

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第435集

深 谷 市

伊 勢 塚 遺 跡

主要地方道花園本庄線整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査

2 0 1 8

埼 玉 県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 第2号方形周溝墓（南西から）



2 第2号方形周溝墓出土土器

序

埼玉県では、平成27年10月の圏央道県内全線開通により、東京から放射状に伸びる関越道、東北道、東西方向に走る外環道などが結節する充実した交通道路網を有することになりました。こうした道路網の強みを生かすことにより、産業、物流、防災など様々な面での発展が期待されています。そのためには、高速道路へのアクセスの更なる改善を進めるとともに、幹線道路のネットワークを強化し産業振興を図るためのバイパス整備などが重要となってきます。今回の主要地方道花園本庄線のバイパス整備事業もその一環として行われたものです。

主要地方道花園本庄線の建設予定地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しており、今回発掘調査を行った伊勢塚遺跡もそのひとつです。発掘調査は同事業に伴う事前調査であり、埼玉県の委託を受け、当事業団が実施しました。

発掘調査の結果、古墳時代前期の方形周溝墓をはじめ、土壌や溝跡などが見かりました。なかでも、周溝の中央部を通路状に掘り残した方形周溝墓からは、死者を埋葬する際に供えられた土器がまとまって発見されました。これらの土器には、東海地方の土器とよく似た特徴をもっている壺や甕が含まれていることから、当時の墓制や交流を考える上で重要な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路街路課、埼玉県熊谷県土整備事務所、深谷市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成30年1月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 塩野谷孝志

例 言

1. 本書は深谷市後榛沢地内に所在する伊勢塚遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

伊勢塚遺跡 (No63-049)
埼玉県深谷市後榛沢字北東501-3
(第2次調査)
平成28年2月29日付け教生文第2-56号
(第3次調査)
平成28年5月10日付け教生文第2-6号
3. 発掘調査は、主要地方道花園本庄線改築工事事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業
「社会資本整備総合交付金(改築)工事(花園本庄線埋蔵文化財発掘調査業務委託) 027」
整理報告書作成事業
「社会資本整備総合交付金(改築)工事(花園本庄線埋蔵文化財整理報告書刊行業務委託) 015」
5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。

発掘調査は、平成28年3月1日から6月30日まで実施し、第2次調査(平成28年3月1日～平成28年3月31日)については大谷徹・中川莉沙が、第3次調査(平成28年4月1日～平成28年6月30日)については砂生智江・久永雅宏が担当した。なお事業の委託期間は、平成28年3月1日～平成28年7月31日までである。

整理報告書作成事業は、平成29年7月3日から11月30日まで、砂生が担当し、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第435集として印刷・刊行した。なお、事業の委託期間は、平成28年7月3日～平成30年1月31日までである。

6. 発掘調査における基準点測量は株式会社中央測地設計に、空中写真撮影は株式会社GIS関東に委託した。
7. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は砂生が行った。
8. 出土品の整理・図版作成は砂生が行った。
9. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、その他を砂生が行った。
10. 本書の編集は砂生が行った。
11. 本書にかかる諸資料は平成30年2月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
12. 発掘調査や本書の作成にあたり、深谷市教育委員会から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。

凡 例

1. 伊勢塚遺跡におけるX・Yの数値は、世界測地系国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00")に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

E-5グリッド北西杭の座標は、X = 23210.000m、Y = -56290.000m。北緯36° 12' 27.2030"、東経139° 12' 26.3567"である。

2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本(1グリッド)とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット(A・B・C…)、西から東方向に数字(1・2・3…)を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばA-1グリッド等と呼称した。
4. 本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は、以下のとおりである。

SR 方形周溝墓 SD 溝跡 SK 土壇
P ビット・柱穴

5. 本書に掲載した遺構番号は、発掘調査時に付した番号を使用した。
6. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。但し、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

調査区全体図 1:500

遺構図

方形周溝墓 1:100

溝跡・土壇・ビット 1:60

遺物実測図

土師器・須恵器 1:4

拓景図・断面図・陶磁器等 1:3

土製品 1:3

鉄製品 1:2

7. 遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。

須恵器(断面黒塗り) 赤彩範囲(網10%)

8. 遺構断面図に表記した本準数値は、全て海拔標高(単位m)を表す。

9. 遺構一覧表の表記は以下のとおりである。

・長さ・幅・深さ・短径・長径はm単位である。

10. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・大きさはcm・重さはg単位である。

・()内の数値は推定値を示す。

・[]内の数値は残存地を示す。

・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A:雲母 B:片岩 C:角閃石 D:長石

E:石英 F:軽石 G:砂粒子

H:赤色粒子 I:白色粒子 J:針状物質

K:黒色粒子 L:その他

・残存率は、図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けて示した。

・色調は「新版標準土色帖」に従った。

・備考には、注記No・生産地・年代等を示した。

・土器・陶磁器の生産地については、胎土によって判断した。

11. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/50000地形図(高崎)を編集・使用した。

目次

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	2. 調査区の概要	18
1. 発掘調査に至る経過	1	3. 伊勢塚遺跡基本層序	24
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	IV 遺構と遺物	25
(1) 発掘調査	2	1. 方形周溝墓	25
(2) 整理・報告書の作成	2	2. 溝跡	48
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3	3. 土壌	56
II 遺跡の立地と環境	4	4. ビット	63
1. 地理的環境	4	5. 遺物包含層	63
2. 歴史的環境	6	6. グリッド出土遺物	71
III 遺跡の概要	13	V 調査のまとめ	73
1. 伊勢塚遺跡と周辺遺跡の概要	13	写真図版	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	4	第14図 方形周溝墓位置図	25
第2図 周辺の地形図	5	第15図 方形周溝墓区割け図	25
第3図 周辺の遺跡(縄文・弥生時代)	7	第16図 第1号方形周溝墓・出土遺物	26
第4図 周辺の遺跡(古墳時代以降)	8	第17図 第2号方形周溝墓(1)	28
第5図 伊勢塚遺跡(第1次)の遺構と遺物	14	第18図 第2号方形周溝墓(2)	29
第6図 調査区位置図(1)	15	第19図 第2号方形周溝墓 遺物出土状況(1)	31
第7図 調査区位置図(2)	16	第20図 第2号方形周溝墓 遺物出土状況(2)	32
第8図 伊勢塚遺跡全体図	19	第21図 第2号方形周溝墓 遺物出土状況(3)	33
第9図 伊勢塚遺跡分割図(1)	20	第22図 第2号方形周溝墓 遺物出土状況(4)	34
第10図 伊勢塚遺跡分割図(2)	21		
第11図 伊勢塚遺跡分割図(3)	22		
第12図 伊勢塚遺跡分割図(4)	23		
第13図 基本層序	24		

第23図	第2号方形周溝墓出土遺物(1) ……	35	第37図	第7号溝跡出土遺物 ……	55
第24図	第2号方形周溝墓出土遺物(2) ……	36	第38図	土城(1) ……	59
第25図	第2号方形周溝墓出土遺物(3) ……	37	第39図	土城(2) ……	60
第26図	第3号方形周溝墓・出土遺物 ……	40	第40図	土城出土遺物 ……	61
第27図	第3号方形周溝墓遺物出土状況 ……	41	第41図	ビット ……	63
第28図	第4号方形周溝墓 ……	43	第42図	遺物包含層(1) ……	65
第29図	第4号方形周溝墓遺物出土状況 ……	44	第43図	遺物包含層(2) ……	67
第30図	第4号方形周溝墓出土遺物 ……	45	第44図	遺物包含層出土遺物(1) ……	68
第31図	第5号方形周溝墓・出土遺物 ……	47	第45図	遺物包含層出土遺物(2) ……	69
第32図	溝跡(1) ……	49	第46図	グリッド出土遺物 ……	72
第33図	溝跡(2) ……	51	第47図	南志渡川・石葺B遺跡位置図 ……	73
第34図	溝跡(3) ……	52	第48図	方形周溝墓復元図・出土遺物(1) ……	76
第35図	第7号溝跡遺物出土状況(1) ……	53	第49図	方形周溝墓復元図・出土遺物(2) ……	77
第36図	第7号溝跡遺物出土状況(2) ……	54	第50図	南志渡川遺跡・石葺B遺跡全体図 ……	79

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧表 ……	9	第9表	土城一覧表 ……	60
第2表	第1号方形周溝墓出土遺物観察表 ……	26	第10表	土城出土遺物観察表 ……	62
第3表	第2号方形周溝墓出土遺物観察表 ……	38	第11表	遺物包含層出土遺物観察表 ……	70
第4表	第3号方形周溝墓出土遺物観察表 ……	41	第12表	グリッド出土遺物観察表 ……	72
第5表	第4号方形周溝墓出土遺物観察表 ……	45	第13表	伊勢塚遺跡方形周溝墓一覧表 ……	77
第6表	第5号方形周溝墓出土遺物観察表 ……	47	第14表	南志渡川遺跡・石葺B遺跡 方形周溝墓一覧表 ……	80
第7表	第7号溝跡出土遺物観察表 ……	55			
第8表	溝跡一覧表 ……	55			

写真図版目次

巻頭図版 1	1	第2号方形須岡溝墓 (南西から)	図版11	1	第4号方形須岡溝墓 (南から)
	2	第2号方形須岡溝墓出土土器		2	第4号方形須岡溝墓西溝 遺物出土状況
図版1	1	伊勢塚遺跡遠景 (南西から)	図版12	1	第5号方形須岡溝墓 (東から)
	2	伊勢塚遺跡遠景 (北東から)		2	第1号溝跡
図版2	1	伊勢塚遺跡垂直空中写真 (1)		3	第2号溝跡
	2	伊勢塚遺跡垂直空中写真 (2)	図版13	1	第4・5号溝跡
図版3	1	伊勢塚遺跡全景 (北西部)		2	第7号溝跡
	2	伊勢塚遺跡全景 (南東部)		3	第4号土壇
図版4	1	第1号方形須岡溝墓 (南西から)		4	第5号土壇
	2	第1号方形須岡溝墓 遺物出土状況 (1)		5	第6号土壇
図版5	1	第1号方形須岡溝墓 遺物出土状況 (2)		6	第8号土壇
	2	第2号方形須岡溝墓 (南東から)		7	第9号土壇
図版6	1	第2号方形須岡溝墓北東コーナー 遺物出土状況	図版14	1	第7号土壇遺物出土状況
	2	第2号方形須岡溝墓 南東コーナー遺物出土状況 (1)		2	第10号土壇遺物出土状況
図版7	1	第2号方形須岡溝墓 南東コーナー遺物出土状況 (2)	図版15	1	第1号方形須岡溝墓
	2	第2号方形須岡溝墓 南東コーナー遺物出土状況 (3)		2~6	第2号方形須岡溝墓
図版8	1	第2号方形須岡溝墓西溝 遺物出土状況 (1)	図版16	1~4	第2号方形須岡溝墓
	2	第2号方形須岡溝墓西溝 遺物出土状況 (2)	図版17	1~3	第2号方形須岡溝墓
図版9	1	第2号方形須岡溝墓西溝 遺物出土状況 (3)		4	第3号方形須岡溝墓
	2	第2号方形須岡溝墓西溝 遺物出土状況 (4)		5	第4号方形須岡溝墓
図版10	1	第3号方形須岡溝墓 (南西から)	図版18	1	第4号方形須岡溝墓
	2	第3号方形須岡溝墓 遺物出土状況 (1)		2・3	第7号溝跡
	3	第3号方形須岡溝墓 遺物出土状況 (2)		4・5	第7号土壇
				6	遺物包含層
			図版19	1	第7号土壇
				2	第10号土壇
				3	第2号方形須岡溝墓
			図版20	1~4	第2号方形須岡溝墓
				5	第4号方形須岡溝墓
				6	第5号方形須岡溝墓
			図版21	1	第7号溝跡
				2	第4号土壇

- 図版22 1 第2号土壌
2 第6号土壌
3 第11号土壌
4 第12号土壌
5 遺物包含層 (E-6グリッド)
6 遺物包含層 (F-7グリッド)
- 図版23 1 第9号土壌
2 遺物包含層 (F-8グリッド)
3 遺物包含層 (G-7グリッド)
- 図版24 1 遺物包含層 (G-8グリッド)
2 遺物包含層 (G-8・H-7グリッド)
3 遺物包含層 (H-9グリッド)
- 図版25 1・2 遺物包含層 (H-9グリッド)
- 図版26 1 遺物包含層 (一括)
2~4 グリッド
- 図版27 1 遺物包含層 (H-9グリッド)
2 グリッド
3 第9号土壌
- 図版28 1・2 第4号土壌
3 第2号方形周溝墓
4 遺物包含層

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では県政運営の基本となる5か年計画に基づき、埼玉の活力を高める道路ネットワーク整備を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、これらの施策に伴う文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

社会資本整備総合交付金（改築）事業費（地域住宅）（主要地方道花園本庄線）事業に係る埋蔵文化財の所在及び取り扱いについては、熊谷県土整備事務所長から平成26年11月6日付け熊整第653-3号で、生涯学習文化財課長あて、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会がなされた。

これに対し、平成27年1月27、28日に試掘調査を実施し、当該箇所の埋蔵文化財の有無を確認した。計8箇所のトレンチ調査を実施し、古墳時代、古代の遺構・遺物が検出された。

この結果をもとに平成27年3月17日付け教生文第2609-1号で、伊勢塚遺跡の取扱いについて次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地内には、次の埋蔵文化財包蔵地が存在します。

名称	種別	時代	所在地
伊勢塚遺跡 (No.63-49)	集落跡	古墳・奈良 平安	深谷市大字 後榛沢

2 手法続

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が

存在します。包蔵地内で工事着手する場合は工事に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

(前略)「記録保存が必要な区域」について、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。(後略)

調査にあたっては、実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と熊谷県土整備事務所、生涯学習文化財課の三者で、工事日程との調整、調査方法、調査期間等について協議を行った。その結果、平成28年3月1日から6月30日までの期間で発掘調査を実施することとなった。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、記録保存のための発掘調査を実施する必要がある旨の指示通知は下記のとおりである。

平成28年1月28日付け教生文第4-1730号

また同法第92条の規定による発掘調査届が公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、それに対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は下記のとおりである。

第2次調査

平成28年2月29日付け教生文第2-56号

第3次調査

平成28年5月10日付け教生文第2-6号

(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

伊勢塚遺跡の発掘調査は、主要地方道花園本庄線の改築事業に伴って平成28年3月1日から6月30日まで実施した。調査面積は1,620㎡である。

第2次調査

2月3日に、第2次調査の発掘調査届提出等の事務手続きを行った。

3月1日に囲柵設置工事を行い、15・16日に現場事務所用地の砕石敷設工事を行った。併行して重機による表土掘削を開始した。3月11日に現場事務所を設置し、発掘器材を搬入した。

3月15日より補助員による遺構確認作業を開始した。14・15日に基準点測量を実施し、遺構概略図を作成した。

第3次調査

4月1日に第3次調査の発掘調査届等の提出等の事務手続きを行い、調査を開始した。第2次調査において確認された遺構は、順次掘削・精査に着手した。終了したものから、土層断面図・平面図作成と、写真撮影を行った。6月1日に、空中写真撮影を実施した。

6月10日に発掘作業を終了した。6月13日に発掘器材を搬出し、6月15日に現場事務所を撤去した。

6月15日から30日まで、重機による調査区の埋戻しを行った。並行して実績報告書の作成と発見届・保管証提出等の事務処理を行い、6月30日にすべての作業を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は、平成29年7月3日から11月30日まで実施した。

遺物は、7月より水洗・註記を行い、順次接合復元作業を行った。接合した遺物は実測図を作成し、計測値や特徴なども記入した。8月より遺物実測図の製図ベンによるトレースを行い、必要に応じて拓本を採った。これらはスキャナを使用してデジタル・データ化し、レイアウト編集して印刷用の挿図版下データを作成した。8月中旬より遺物の写真を撮影し、写真図版の版下データを編集・作成した。

遺構図の整理は、遺物の整理作業と並行して7月より開始した。発掘調査で実施した遺構測量システムのデジタル・データおよび手作業によって作成した平面図・土層断面図等を修正・編集して第二原図を作成した。7月中旬よりパソコンを使用してデジタルトレースと編集作業を行い、印刷用の遺構図版下データを作成した。遺構写真は、発掘調査で撮影されたものの中から選択し、写真図版用の版下データを作成した。

9月中旬より、作成した遺物・遺構のデータ等をもとに、報告文の執筆を開始した。これと、遺構・遺物の挿図と写真図版などを組み合わせて割付・編集を行った。

11月末に原稿を印刷業者に入稿し、校正を3回を行い、平成30年1月下旬に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第435集『伊勢塚遺跡』を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、11月末に整理・分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成27年度（発掘調査）

理事 長	樋田 明 男	調査部	
常務理事兼総務部長	木村 博 昭	調査部長	金子 直 行
総務部		調査部副部長	富田 和 夫
総務部副部長	瀧 瀬 芳 之	主幹兼調査第二課長	田中 広 明
総務課長	安田 孝 行	主 幹	大谷 徹 沙
		主 事	中川 莉 沙

平成28年度（発掘調査）

理事 長	塩野谷 孝 志	調査部	
常務理事兼総務部長	木村 博 昭	調査部長	金子 直 行
総務部		調査部副部長	赤熊 浩 一
総務部副部長	黒坂 禎 二	調査部副部長兼調査第二課長	瀧 瀬 芳 之
総務課長	曾川 浩 二	主 事	砂 生 智 江
		主 事	久 永 雅 宏

平成29年度（報告書作成）

理事 長	塩野谷 孝 志	調査部	
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久	調査部長	赤熊 浩 一
総務部		調査部副部長兼整理第二課長	吉田 稔
総務部副部長	黒坂 禎 二	主幹兼整理第一課長	大谷 徹 沙
総務課長	曾川 浩 二	主 事	砂 生 智 江

II 遺跡の立地と環境

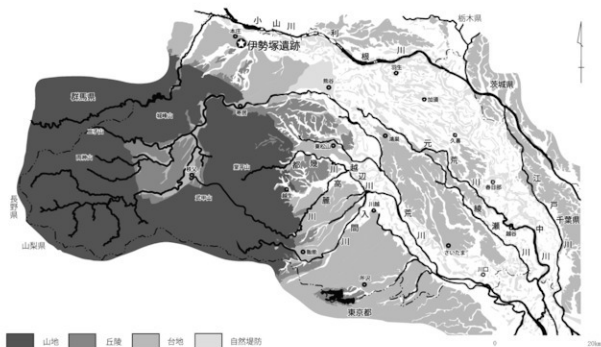
1. 地理的環境

伊勢塚遺跡は、埼玉県深谷市後榛沢501-3に所在する。深谷市は、平成18年に、深谷市・大里郡岡部町・花園町・川本町が合併し現在の市域となった。深谷市は埼玉県の北西部にあり、遺跡の所在地である後榛沢は旧岡部町域にある。旧岡部町は深谷市域の西側に位置し、遺跡はJR高崎線岡部駅から西へおよそ3kmにある。

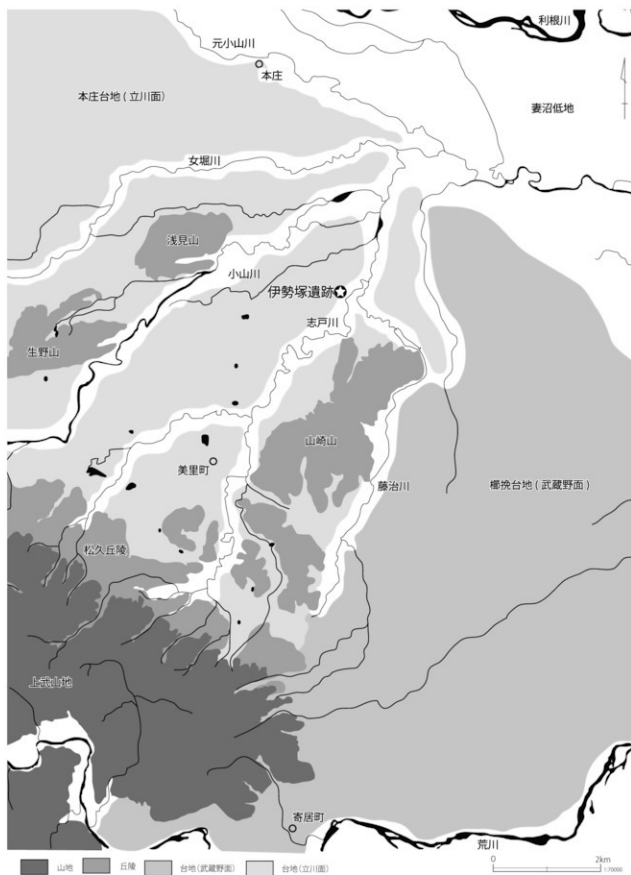
埼玉県および、遺跡周辺の地形を第1・2図に示した。旧岡部町周辺の地形を概観すると、北には群馬県との県境である利根川が流れ、西は児玉丘陵を隔てて上武山地へとつづく。旧岡部町の大半は本庄台地上にあり、今からおよそ3万年前の立川期において、神流川によって形成された洪積扇状地地形となっている。標高は、扇頂部にあたる神川町池田付近で約110m、扇端部の本庄や神保原周辺で約50m、伊勢塚遺跡近くの榛沢周辺

で約50mである。扇頂部から北東方向に向かって緩やかな勾配となっている。本庄台地の南側には、藤治川および、山崎山を隔てて櫛挽台地が広がっている。櫛挽台地は、荒川左岸に広がる広大な台地であり、荒川扇状地が侵食され、形成された。深谷市下郷・境・折之口・上宿へと続く崖線を境として北側の標高の高い面を櫛挽面、南側の荒川の河岸段丘であり標高の低い面を寄居面と称する。

本庄台地と櫛挽台地の崖線より北側には妻沼低地が形成されている。妻沼低地は、利根川や小山川の氾濫によって形成された低地である。利根川に沿って東西に長く伸び、西は利根川・烏川の合流点付近から始まり、東は行田市の利根大堰付近まで及ぶ。自然堤防は利根川沿いに分布する。一方で、本庄・櫛挽台地に近い南側の崖線付近には後背湿地が発達し、自然堤防の分布とは対照的な



第1図 埼玉県の地形図



第2図 周辺の地形図

様相を示している。

本庄台地の南東部には、女堀川・小山川・志戸川・藤沼川が南西から北東方向に流れ、利根川へと注いでいる。これらの河川の両岸には河川の開析による沖積低地が展開する。小山川の西側には、

2. 歴史的環境

伊勢塚遺跡の周辺地域は、多数の遺跡が所在しており、特に古墳時代から奈良・平安時代の遺跡においては、その数や内容は県内有数のものである。ここでは、本地域の遺跡について各時代を通して概観したい。

旧石器時代

遺跡は、多くが河川に近い台地の縁辺部に立地している。本地域では、遺物が単独で出土する事例がほとんどである。一方で、深谷市の北坂遺跡(72)では、後期旧石器前半期の石器集中が23箇所検出され、ナイフ形石器、台形鎌石器、搔・削器などの石器群が出土した。さらに、頁岩と珪質頁岩を素材とする剥片類が多数石核に接合し、これらは剥片剥離工程を解明するための重要な接合資料となっている。さらに、寄居町の末野遺跡では、同じく後期旧石器前半の大型の局部磨製石斧・打製石斧・ナイフ形石器・石刃等の石器群が出土している。また、本庄市の大久保山遺跡(16)では、丘陵斜面の中ほどから石器群が検出されている。石器は、黒曜石製のナイフ形石器・石刃・剥片など55点にのぼり、表土や他時期の遺構覆土などから黒曜石製の有軸尖頭器・搔器、頁岩製の荒屋型彫刻刀形石器などが出土している。いずれも、遺跡の少ない当該期において、貴重な調査成果である。

縄文時代

草創期・早期の遺跡は、丘陵部を分布の中心とする。櫛挽台地の縁辺部に位置する深谷市の西谷遺跡(62)・水久保遺跡(61)からは押圧縄文土器片が、同市の東光寺裏遺跡(32)からは、微隆

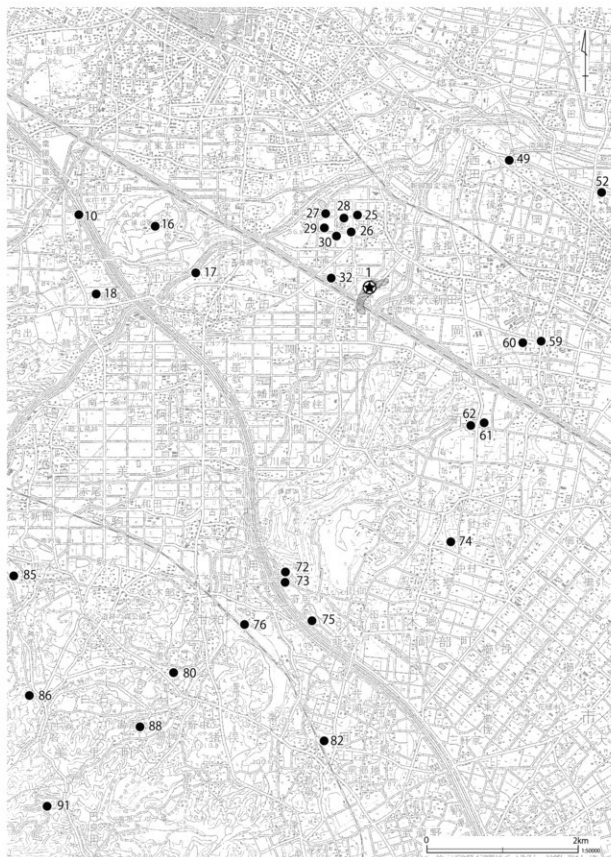
児玉丘陵に端を発する河川によって開析され、残丘となった生野山および大久保山(浅見山)が連なる。また、志戸川と藤沼川の間には、松久丘陵から開析された山崎山が位置する。これらの残丘上には、複数の遺跡や古墳群などが分布している。

起線文土器や爪形文土器が、西龍ヶ谷遺跡(60)からは、爪形文土器や摺糸文系土器が出土している。また、美里町の甘粕山遺跡群中(76)の東山遺跡からは、摺糸文系土器群終末段階の土器と石器がまとめて出土している。

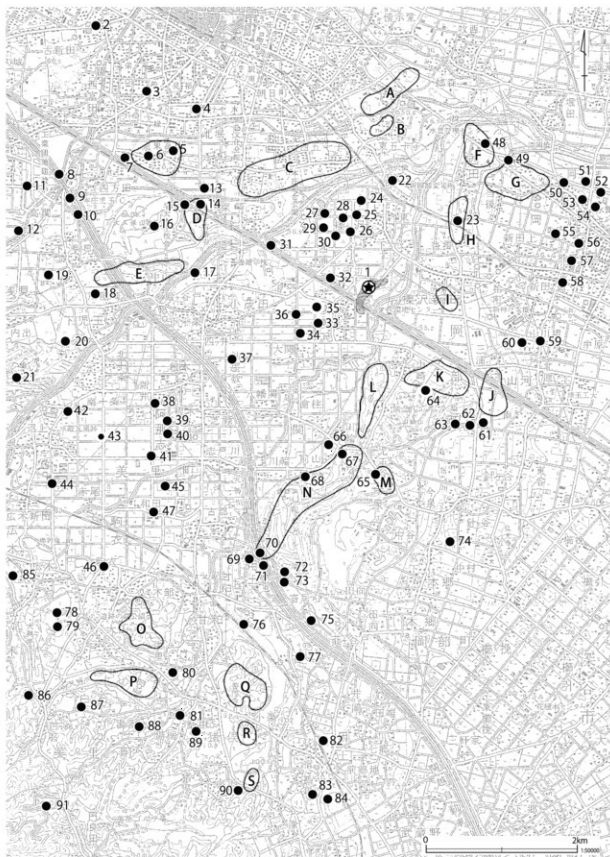
前期の遺跡の立地は丘陵部に集中しており、その傾向は草創期・早期と同様であるが、遺跡の数はかなり増加する。これに伴って、丘陵の縁辺部だけでなく、丘陵部の奥から山地に係る場所にまで分布が広がる。また、密度は薄いものの荒川左岸の台地部や、妻沼低地に面する台地先端部、妻沼低地の自然堤防上にも遺跡が認められる。小山川と志戸川に挟まれた台地上には、深谷市の西浦北遺跡(25)・宮西遺跡(26)・沖田Ⅰ～Ⅲ遺跡(28～30)・東光寺裏遺跡・地神祇A遺跡(33)などがまとめて立地しており、西浦北遺跡からは関山式期、東光寺裏遺跡では諸磯b式期、沖田Ⅰ～Ⅲ遺跡からは諸磯a～b式期などの住居跡が検出されている。また、四十坂遺跡(49)からは、関山式期の住居跡が検出されている。北坂遺跡においても、黒浜式期や諸磯式期の遺物が若干出土している。

中期には、櫛挽台地縁辺部に遺跡が点在するようになり、さらに、今まで分布密度の薄かった台地内部にも広がりが認められるようになる。

深谷市水窪遺跡(23)や菅原遺跡は、当該時期の拠点集落と考えられる。また同市原ヶ谷戸遺跡(48)・大寄遺跡(27)では、加曾利E式期の埋設土器が検出されているほか、清水谷遺跡や北坂遺跡においても同時期の土器が出土している。



第3図 周辺の遺跡（縄文・弥生時代）



第4図 周辺の遺跡(古墳時代以降)

第1表 周辺の遺跡一覧表 (第3・4図)

No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期
1	伊勢塚遺跡	古墳前・後、奈良、平安	56	内手遺跡	奈良、平安
2	社員路遺跡	古墳前・中	57	熊野遺跡	古墳後、奈良、平安、中世
3	離濠遺跡	古墳中	58	新田遺跡	古墳後、奈良、平安、中世
4	笠ヶ谷戸遺跡	古墳中	59	龍ヶ谷遺跡	縄文中、古墳前・後
5	久下東遺跡	古墳前	60	西龍ヶ谷遺跡	縄文草創、古墳後、奈良、平安、中世
6	七色塚遺跡	古墳前～後	61	水久保遺跡	縄文草創・中
7	下田遺跡	古墳前	62	西谷遺跡	縄文草創・中
8	後張遺跡	古墳前	63	石原山瓦窯跡	平安
9	飯玉東遺跡	古墳前	64	千光寺遺跡	古墳前・後、奈良、平安
10	雷電下遺跡	古墳前、平安	65	鷺山祭祀遺跡	古墳前・後
11	川越田遺跡	古墳前～後、奈良、平安、中世	66	石神遺跡	奈良、平安
12	東牧西分遺跡	古墳前	67	川輪聖天塚古墳	古墳中
13	有勝寺北裏遺跡	古墳中	68	長坂聖天塚古墳	古墳前～後
14	前山1号墳	古墳中	69	安光寺1号墳	古墳中
15	前山2号墳	古墳中	70	安光寺2号墳	古墳中
16	大久保山遺跡	旧石器、奈良、平安、中世	71	清水谷1号墳	古墳後
17	村後遺跡	弥生中、古墳前	72	北坂遺跡	旧石器、縄文前・中、奈良、平安
18	砂田遺跡	弥生、古墳後	73	中平遺跡	旧石器、奈良、平安
19	鷺山古墳	古墳前	74	伊勢方遺跡	縄文中、古墳後、奈良、平安
20	宮ヶ谷戸遺跡	古墳前～後、奈良、平安	75	用土平遺跡	弥生中
21	生野山16号墳	古墳後	76	甘粕山遺跡群	縄文草創・早、弥生前、平安
22	六反田遺跡	古墳前・後、奈良、平安、中世	77	中山遺跡	奈良、平安
23	水窪遺跡	古墳前	78	宇佐久保輪竈跡群	古墳中
24	稲荷塚遺跡	古墳	79	宇佐久保遺跡	古墳後
25	西浦北遺跡	縄文前、古墳中、奈良、平安	80	神明ヶ谷戸遺跡	弥生中・後、古墳前
26	宮西遺跡	縄文前、奈良、平安、中世	81	こぶヶ谷戸祭祀遺跡	古墳中・後、奈良、平安
27	大寄遺跡	縄文中、弥生中・後、古墳、奈良、平安	82	雁込遺跡	縄文中、古墳後
28	沖田I遺跡	縄文前、古墳後、奈良、平安	83	用土高城遺跡	古墳
29	沖田II遺跡	縄文前、古墳後、奈良、平安	84	用土北沢遺跡	古墳
30	沖田III遺跡	縄文前、古墳後、奈良、平安	85	飯藪神社前遺跡	縄文中、古墳後、奈良、平安
31	古田端遺跡	古墳中・後期、奈良、平安	86	登所遺跡	縄文前
32	東光寺裏遺跡	縄文草創・前、古墳中・後、奈良、平安	87	白石城跡	中世
33	地神祇A遺跡	縄文前、古墳前～後	88	峯遺跡	縄文中、古墳後
34	地神祇B遺跡	古墳前～後	89	中野遺跡	古墳前
35	石時A遺跡	古墳前～後、奈良、平安、中世	90	一本松古墳	古墳後
36	石時B遺跡	古墳前	91	栗山遺跡	縄文中
37	日の森遺跡	古墳前	A	麩の森古墳群	古墳後
38	堂山古墳	古墳中	B	東五十子古墳群	古墳後
39	向居遺跡	古墳前～後、奈良、平安	C	西五十子古墳群	古墳後
40	勝丸稲荷神社古墳	古墳中	D	浅見山古墳群	古墳後
41	道灌山古墳	古墳中	E	塚本山古墳群	古墳前・後
42	樋之口遺跡	古墳中・後	F	西田古墳群	古墳中・後
43	烏森遺跡	奈良、平安	G	四十塚古墳群	古墳中・後
44	宮下遺跡	奈良、平安	H	水窪古墳群	古墳後
45	志渡川遺跡	古墳前	I	中南古墳群	古墳後
46	南志渡川遺跡	古墳前	J	茶臼山古墳群	古墳後
47	北むい遺跡	古墳前、奈良、平安	K	千光寺古墳群	古墳後
48	原ヶ谷戸遺跡	縄文中、古墳後・晩、古墳前・後	L	西山古墳群	古墳後
49	四十八遺跡	縄文前、弥生中、古墳前・後、中世	M	鷺山古墳群	古墳後
50	上宿遺跡	縄文後・晩、古墳後	N	諏訪山古墳群	古墳中・後
51	滝下遺跡	古墳前	O	木部山古墳群	古墳後
52	砂田前遺跡	縄文後・晩、古墳後、奈良、平安	P	羽黒山古墳群	古墳中・後
53	中宿遺跡	古墳中～後、奈良、平安	Q	普門寺古墳群	古墳後
54	桶詰・岡部条里遺跡	古墳後、奈良、平安	R	猪俣北古墳群	古墳後
55	御手山古墳	古墳後	S	猪俣南古墳群	古墳後

松久丘陵上には、堀込遺跡(82)・峯遺跡(88)・栗山遺跡(91)などが分布し、堀込遺跡では加曽利E式期の集落跡が調査されている。

中期において、丘陵から台地にかけて遺跡が集中的に展開する傾向は、後・晩期になると一変し、散在して分布する傾向を示すようになる。加えて、台地縁辺部や低地部への広がりが見られるようになる。このため、遺跡周辺での調査事例はわずかである。原ヶ谷戸遺跡では、住居跡が検出されたほか、儀礼に伴う遺物や装飾品が多量に出土している。また、深谷市上宿遺跡(50)では堀之内式期の敷石住居跡が調査されている。

弥生時代

遺跡は、縄文時代後・晩期の分布傾向と似通っており、遺跡の調査例も同様に少ない。代表的なものとして前期の遠賀川式土器が出土している深谷市上敷免遺跡や、再葬墓群が検出された熊谷市横間栗遺跡などがあげられる。また、寄居町用土平遺跡(75)は、昭和29年から58年にかけて、東京大学文学部考古学教室と教養学部文化人類学教室によって学術調査が実施されている。調査によって中期の住居跡が検出され、有角式磨製石斧や多量の土器が出土している。埼玉県における弥生時代研究の基準資料となる重要な遺跡である。

本地域は群馬県西部地域を主たる分布圏とする後期樽式土器の分布外縁部である。樽式土器を有する遺跡は丘陵上に分布する傾向にあり、前組羽倉遺跡・羽黒山古墳群内遺跡(P)・新鏡寺後遺跡などが小高い丘陵上に立地している。遺跡の周辺では、小山川左岸に原ヶ谷戸遺跡・大寄遺跡・村後遺跡(17)などが点在している。

四十坂遺跡では再葬墓が検出されているほか、石葺A遺跡(35)では後期の櫛描文系や吉ヶ谷系土器が出土している。

古墳時代

前期では、弥生時代に系譜をもつ方形周溝墓の分布が周辺一帯に密集する時期であり、さらに、

弥生時代においては見られなかった前方後方形周溝墓も多数確認されている。深谷市石葺B遺跡(36)や、美里町南志渡川遺跡(46)・塚本山古墳群(E)などがこれにあたり、前方後方形周溝墓を含む方形周溝墓群が検出されている。これらの周溝墓からは、東海地方西部の影響を受けたS字状口縁台付甕などの土器が多く出土するのが特徴であり、南志渡川遺跡では東海地方西部の特徴をもつバレススタイルの二重口縁壺が複数出土している。また、本市市北堀新田前遺跡においても、前方後方形周溝墓が調査されているほか、原ヶ谷戸遺跡や大寄遺跡では、方形周溝墓群が検出されている。一方で、高塚の墳丘を有する古墳についても造営が開始される。女堀川中流域の丘陵上に位置する本市市鷲山古墳(19)は、前方部が低く、大きく開いた掬形を呈する全長60mの前方後方墳であり、その形状から出現期の古墳に位置づけられている。志渡川右岸の丘陵上に立地する美里町長坂聖天塚古墳(68)は径50mの円墳である。稜雲文方格規矩鏡や獣首鏡・滑石製模造品などが出土しており、古墳時代中期前葉に位置づけられている。近隣にある同町川輪聖天塚古墳(67)は、径41mの円墳である。長坂聖天塚古墳に後続するものと考えられており、壺型埴輪が出土している。中道第1号墳は、白石古墳群内に所在し、古墳時代前期のS字状口縁台付甕・高坏・広口壺などとともに壺形埴輪が出土している。

集落跡は、水窪遺跡・地神祇A遺跡・滝下遺跡(51)などが調査されているが、いずれも散発的で、小規模である。対して、石葺A遺跡では、灌漑を目的とした施設が造られていたとみられ、既に水利に対する管理技術が取り入れられていたことがわかる。

中期にいたると、方形周溝墓はほぼみられなくなり、古墳が多数造営されるようになる。浅見山に位置する前山1号墳(14)は、全長約70mの前方後円墳と推定されている。近接する前山2号墳

(15) は方墳で、主体部は粘土層1基が確認されている。副葬品は、刀子・鉄鎌・鍬・鉈などである。出土した土器がいわゆる和泉式の最古段階のものであり、埴輪の出土がないことから、中期前半に位置づけられる。

美里町道灌山古墳(41)・勝丸稲荷神社古墳(40)は志戸川左岸の自然堤防上に近接して立地し、いずれも円墳である。同町堂山古墳(38)は、道灌山古墳や勝丸稲荷神社古墳から北に約300m離れた微高地上に立地する円墳である。周溝を含めると50mを超える規模の大きいものである。集落は川越田遺跡(11)・宮ヶ谷戸遺跡(20)・地神祇A遺跡・地神祇B遺跡(34)などがあり、その分布状況は、前期同様に小規模かつ散発的で、河川沿いに分布する傾向が認められる。

後期になると、小規模な古墳が密集して造営され、群集墳の形成が盛んになる。浅見山古墳群(D)・同市塚山古墳群、山崎山周辺の深谷市茶臼山古墳群(J)、松久丘陵東端周辺の木部山古墳群(O)・羽黒山古墳群・普門寺古墳群(Q)などがこれにあたる。一方で、東五十子古墳群(B)・西五十子古墳群(C)・四十塚古墳群(G)などは台地上に立地する。塚山古墳群には、古墳175基が分布しており、17号墳からは、鉄鎌・刀子・留金具・銅芯金張の耳環などの金属製品が出土している。19号墳からは、鉄鎌・刀子・耳環のほか、鐙が装着されたままの直刀や、把頭に象嵌が施された頭椎大刀が出土している。調福山古墳群(N)は、帆立貝式前方後円墳の美里調福山古墳と、円墳で構成される。美里調福山古墳は全長39mで、墳丘の断面に緑泥片岩の破片が散在していることから、主体部は箱式石棺の可能性が有る。四十塚古墳群内に所在する四十塚古墳は、横板板鏡留短甲・鍬付楯形鏡板付髀・鉄製楯形鏡板付髀・鉄斧などが、石室内から出土したと伝わっている。

集落跡は、六反田遺跡(22)・砂田遺跡(18)

などがあげられる。児玉郡とその周辺は県内で最も早くカマドが導入された地域であるが、六反田遺跡においても初期のカマドが確認されている。

伊勢塚遺跡の位置する後榛沢地区や、隣接する榛沢地区にも古墳群の存在が伝わるが、現在はほとんどが消滅している。東光寺裏古墳群は、東光寺裏遺跡内に位置する古墳群で、2基の古墳が確認されている。1号墳は、周溝の一部が調査され、埴輪片や土師器の甕・坏などが出土しており、後期に位置づけられる。2号墳は、周溝の一部が調査され円墳に復元されている。土師器の甕・高坏・埴などが出土し、中期に位置づけられる。伊勢塚古墳は、径20mの円墳であり、周辺から埴輪片が採集されたと伝わるが、現在は確認することができない。榛沢古墳群も同様で、現在は円墳1基が所在するのみである。このように、後榛沢・榛沢地区の古墳群は大部分が失われている。しかし、同地区宮西遺跡では、埴輪をカマドの袖に転用した平安時代の住居跡が検出されており、かつて当地に古墳が存在していたことがうかがえる。

古墳に供される埴輪は、主に丘陵斜面部に造られた埴輪窯跡で焼成された。美里町宇佐久保埴輪窯跡群(78)は、天沖川左岸の丘陵斜面の裾部に立地し、登り窯が複数基確認されている。出土した埴輪の多くは円筒埴輪である。また、本庄市有勝寺北裏遺跡(13)は浅見山の東端、台地先端斜面部に位置する埴輪窯跡である。かねてより、器財埴輪、動物埴輪、円筒埴輪の破片や滑石製白玉が発見されていたが、その後の発掘調査によって古墳時代後期の窯跡が3基確認され、ほぼ完形の靴形埴輪が出土した。7世紀後半になると、律令制の整備が進み評制が施行される。当該地域においても役所施設の整備がはじめられた。

奈良・平安時代・中世

当該地域は武蔵国榛沢郡に所在し、榛沢郡の郡家は深谷市熊野遺跡(57)・中宿遺跡(53)周辺におかれていたと考えられる。これらは、これま

で遺跡の分布が希薄であった岡・普濟寺地区に立地し、郡家関連の遺構の充実に伴い、集落も集中して分布するようになる。

熊野遺跡の始まりは7世紀後半代に位置づけられ、8世紀代まで継続すると考えられる。700軒を超える竪穴住居跡や100棟を超える掘立柱建物跡・土壇・石組井戸跡・道路状遺構・連房式鍛冶工房跡など様々な性格の遺構がいくつかのまとまりをもって検出されている。桁行7間×梁行3間の掘立柱建物跡は、熊野遺跡における中核建物である。

遺物は、唐三彩の陶枕や円面硯・帯金具・陶製仏殿・織内産土師器・置きカマドなどが出土しており、いずれも一般集落からは発見されることの少ない特殊なものである。隣接する中宿遺跡は、樺沢郡家の正倉跡に比定されており、20棟の総柱建物跡が検出されている。建物跡は、南から北へと傾斜する地形の上段、中段、下段の三列に規則的に配置されていた。最も古い掘立柱建物跡は7世紀末頃に位置づけられる。

また、中宿遺跡では整地層が確認されており、傾斜地を造成し平場を造る大規模な土木工事が実施されていた。整地層は隣接する岡庵寺においても確認されている。

岡庵寺は7世紀の後半頃より造営が開始される寺院跡である。検出された基壇建物跡は、掘込地業を有すること、周辺から瓦類が多く出土することなどから瓦葺建物であったと考えられる。

郡家に付属する正倉には、郡内から租税として集められた稲が納められていた。これを生産した水田の跡を、樋詰・岡部条里遺跡(54)に認めることができる。遺跡には、古墳時代後期の集落廃絶後、条里型地割に基づいた溝跡や、畦畔の跡、豪族の居館などが形成された。一方で、岡・普濟寺地区だけでなく、伊勢塚遺跡の周辺の後樺沢・樺沢地区にも集落が集中する。石碇遺跡・宮西遺

跡・西浦北遺跡・大寄遺跡・沖田遺跡などがこれにあたり、総数100軒を超える竪穴住居跡が調査されている。

平安時代に入ると、台地の縁辺や自然堤防上だけでなく、丘陵地や低地にも遺跡の分布が認められる。さらに9世紀後半には班田制の崩壊によって共益地の開発が進み、地方の生産力が向上した。この開発を担ったのが、新興の豪族などからなる富裕層であった。上里野中堀遺跡は、新興豪族の経営拠点と考えられる。遺跡は9世紀前半から10世紀後半にかけて営まれ、貿易陶磁器や緑釉・灰釉陶器などが多量に出土した居宅域と、鍛冶・鋳造に伴う鉄滓や伊壁などが出土した工房域とが伴って検出された。大寄遺跡では、10世紀以降の住居跡がまとめて検出されており、遺跡の少ない当該時期において貴重な資料である。

丘陵地では、製鉄・鍛冶・炭焼き・木工などの生産遺跡が営まれる。西浦北遺跡や、宮西遺跡などでは、鉄仏など平安時代末期の鉄生産に関わる遺構や遺物が発見された。また菅原遺跡では、獣脚の銚型が出土しており、仏具の生産が行われていた。これらの遺跡が、鉄塊から製品を作成する鍛冶遺跡であるのに対して、寄居町の中山遺跡(77)では、砂鉄や鉄鉱石から鉄塊を作成する製鉄が行われていた。中山遺跡は、8世紀後半頃に成立した集落跡で、最盛期となる9世紀末から10世紀初頭には、製鉄炉・鍛冶炉のほか、炉の構築材などに利用される粘土の採掘坑や、炉の燃料となる木炭を焼成した炭焼窯跡など、製鉄に関わるさまざまな遺構が数多く検出されている。

中世以降本地域には小武士団がいくつも発生したとつたわる。いわゆる武蔵武士である。浅見山には武蔵七党の児玉党に関する伝承が多く、複数の中世遺跡が立地する。特に12世紀中葉から13世紀にかけて造営される不整形の館は、丘陵を占有した開発領主の館であったと考えられる。

III 遺跡の概要

1. 伊勢塚遺跡と周辺遺跡の概要

伊勢塚遺跡は、JR岡部駅の西3km、小山村と志戸川に挟まれた扇状地に位置する。自然堤防状の微高地上に展開し、標高は55.5mであり、水田面との比高差は、約1.0mである。

遺跡は、志戸川と藤治川の合流地点の西側に、志戸川が湾流する部分に沿って半月状に、南西から北東の直線距離約600mにわたって広がっている。

今回の調査に先立って、昭和50年に上越新幹線建設に伴う発掘調査（第1次調査）が、埼玉県教育委員会によって実施されている。調査は、遺跡南端部の約1.150m²が対象となった。調査区は、水田に向かってわずかに傾斜しており、表土は厚く堆積していた。ローム層は約1.0m堆積しており、その下には灰褐色の粘土層が堆積していた。

検出された遺構は、古代の竪穴住居跡2軒・土壇4基・井戸跡3基であり、調査区の全体図と、遺構・遺物図を第7図に示した。

2軒の竪穴住居跡は、いずれも耕作によって削平されており、カマドの痕跡と貯蔵穴の存在で住居跡と確認できた程度である。このため、規模・形態は不明である。土壇・井戸跡、および表土からは、中・近世の陶器やかわらけなどが出土している。

第1号住居跡の貯蔵穴からは、土師器片が1点出土している。小さな底部から直線的に開く体部の形状から、時期は10世紀前半と考えられる。また、両竪穴住居跡は主軸方向や覆土に類似性が認められることから、同時期の可能性が指摘できる。後述する、対岸に立地する東光寺裏遺跡とも、ほぼ併行する時期であろう。

さらに、伊勢塚遺跡の範囲内には、伊勢塚古墳が立地する。昭和50年の調査区から、北東に約20mに位置し、標高は55.5m前後であり、水田面との比高差は約1.0mである。直径約20m、高さ1.0

mの円墳であり、墳丘の一部が破壊されているとされている。しかし、『岡部町史』原始・古代資料編刊行（平成18年）に先立って現地踏査が実施された際には、墳丘は削平されており古墳と判断できる状況ではなかった。また、かつては埴輪片を採集したと伝わるが所在は不明であり、現地踏査の際にも遺物は採集できなかった。

伊勢塚遺跡の周辺には、東光寺裏遺跡・宮前遺跡・石葺A・B遺跡・地神祇A～C遺跡などが立地する。伊勢塚遺跡第2・3次調査・東光寺裏遺跡第2次調査・宮前遺跡第1次調査は、県道花園本庄線の整備工事に伴うもので、調査区は沿線の上に位置している。

東光寺裏遺跡は、伊勢塚遺跡からは、志戸川の支流である高田川を挟んで、西岸の微高地上に位置する。伊勢塚遺跡とは同一微高地上にあったものが、高田川により分断されたものと考えられる。標高56.5mであり、水田面との比高差は約1.0mである。

上越新幹線建設に伴い、伊勢塚遺跡とともに昭和50年に、埼玉県教育委員会より発掘調査が実施されている。調査は、遺跡南端部の約1,800m²が対象となった。縄文時代の前期から、古墳時代・平安時代・近世までの遺構・遺物が検出された。

平安時代の遺構は、竪穴住居跡10軒である。土壇の多くは、縄文時代と考えられている。井戸跡からは、時期を特定できる遺物は出土しなかった。竪穴住居跡は、調査区のほぼ全面に分布するが、調査区の幅は18mと狭く、集落の規模や構造を想定するまでには至らなかった。さらに、重複・攪乱のほか、一部が調査区域外に位置するものもあり、全体の規模が判明したのは、5軒にとどまる。竪穴住居跡は、一辺の規模が約3.0～4.0mと小規模であり、最も面積の大きい第13号住居跡は、

4.0m×3.95mである。

カマドが確認されたのは8軒である。このうち5軒は東壁に位置する。竪穴住居跡の確認面からの掘り込みが浅かったため、カマドの構造が確認できたのは第14号住居跡のみである。カマドの袖部は黄褐色土で、天井部は白色粘土で構築され、垂直に立ち上がる煙道部が検出された。燃焼部は、床面から約13cm掘り込まれており、焚口の周辺には灰層が広がっていた。

カマドのほかに、貯蔵穴や壁溝、柱穴などがあるが、主柱穴は検出されなかった。

出土遺物は、土師器坏類・甕類・須恵器坏類・手付き壺などの土器、鉄製品・土錘などの土製品

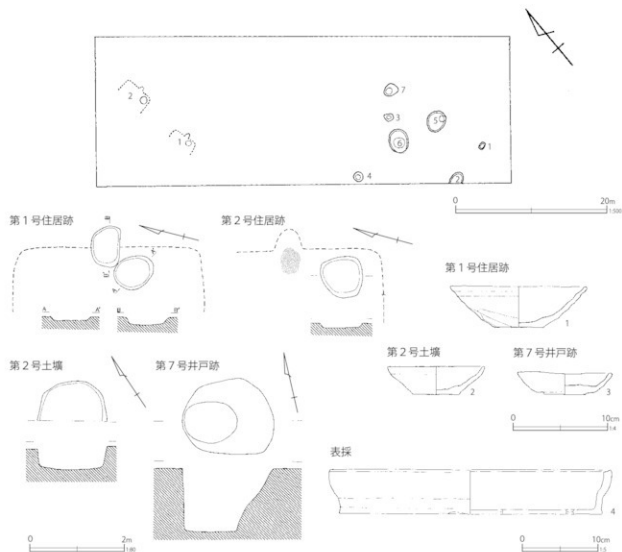
が出土した。第14号住居跡から出土した土師器には、体部外面に「木」の墨書が認められる。いずれにおいても、検出された竪穴住居跡の深さが浅く、遺物の量は少なかった。

これらの遺物より東光寺裏遺跡の集落の時期は、9世紀末～10世紀前半と考えられる。

平成27年7月から9月には、県道花園本庄線改築事業に先立って、当事業団により第2次調査が実施された。調査面積は、1,200m²である。

平安時代の竪穴住居跡1軒のほか、中・近世の溝跡4条・火葬跡1基・時期不明の土城15基・ピット6基などが検出された。

竪穴住居跡は長方形を呈し、北壁にカマドを設



第5図 伊勢塚遺跡（第1次）遺構と遺物



第6図 調査区位置図(1)

けている。

また、幅10mの窪みに、北西から南東に向かって走る2条の溝跡が重複して検出された。溝の中には、天明3（1783）年に噴火した浅間山の火山灰が堆積しており、近世陶磁器や内耳土器、常滑焼、板碑の破片などが出土した。小山川に向かって伸びる幅広い溝跡であり、用水路もしくは排水路と考えられる。

火葬跡は溝跡の東側に検出され、焼土や骨片が出土した。

宮前遺跡は、伊勢塚遺跡の北西約350mの微高地上に位置する。

東光寺裏遺跡と同じく、伊勢塚遺跡に対して、志戸川の支流である高田川を扶んで西岸の微高地上に位置する。標高は、約55.0mである。

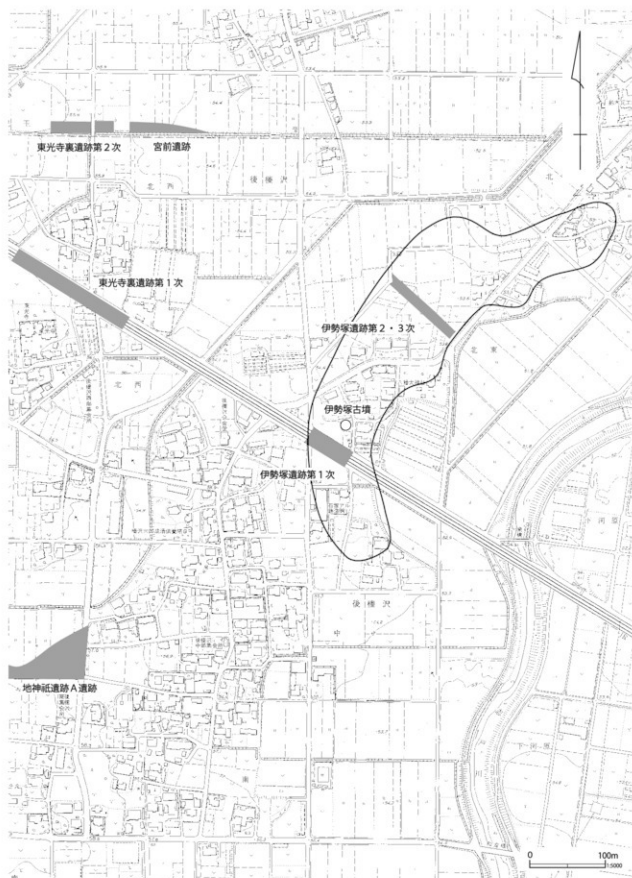
平成28年12月から平成29年3月にかけて、県道花園本庄線整備工事に先立って、第1次調査が実施された。調査面積は1,100㎡である。

遺構は、縄文時代の土壌1基・遺物包含層1箇所、古墳時代の遺物包含層1箇所・古墳時代以降の井戸跡4基、中・近世の溝跡11条・道路跡1条・土城21基などが検出された。

縄文時代の土城からは縄文時代後期の深鉢形土器が潰れた状態で出土した。また、縄文時代の遺物包含層が台地の斜面部に沿って形成されており、縄文時代草創期の尖頭器1点と縄文時代早期の土器が出土した。尖頭器は、長さ17cmほどの大型品で、県内では、深谷市四反歩遺跡から出土した資料に類似している。このほか縄文時代早期の土器片が多く出土している。

第1号井戸跡からは多くの遺物が出土している。なかでも、鎌倉時代の土製の鍋は西日本で生産された特徴を備えており、県内では嵐山町金平遺跡で類例が出土している。概ね鎌倉時代後期頃の井戸跡と考えられる。第11号溝跡は調査区東側に検出され、川辺筋跡に向かって伸びている。戦国時代の溝跡と考えられる。道路跡は、調査区西側で約30mにわたって検出された。地面を掘った部分に路面を構築し





第7図 調査区位置図(2)

ており、両側に側溝が設けられている。路面をかき上げしながら何度も改修され、硬く踏み固められた路面が複数確認された。最も下の路面は、戦国時代以前と考えられる。

伊勢塚遺跡の南西約500mには、石葺遺跡・地神祇遺跡が位置する。遺跡は本庄台地東部にあり、高田堀の水路を隔てて南東側に地神祇遺跡、北西側に石葺遺跡が立地する。標高は57.0m前後である。両者を合わせて後榛沢遺跡群と称する。

昭和52年の県営圃場整備事業に先立って、岡部町教育委員会による石葺A・B遺跡、地神祇遺跡A～C遺跡の発掘調査が実施されている。

石葺A遺跡とB遺跡の間は、地形が若干低くなっている。これを境に土地利用の形態が明確に分かれており、石葺A遺跡は居住域、B遺跡は墓域であった。

石葺B遺跡からは、方形周溝墓12基・竪穴状遺構3基・井戸跡1基・溝跡5条が検出された。方形周溝墓群中には、前方後方形を呈する第8号方形周溝墓と第12号方形周溝墓を主墳とする、2つのグループが形成されていた。

遺物は、第8号方形周溝墓から埴形土器が出土した。東海地方の廻間Ⅱ式に比定されるものである。また、第11号方形周溝墓からは、パレスタ

イルの壺が出土している。この土器は、焼成後の底部穿孔を有する。

これに対して、石葺A遺跡からは、竪穴住居跡119軒・掘立柱建物跡10軒・井戸跡5基・溝跡10条・土壇37基が検出された。竪穴住居跡には、石葺B遺跡の方形周溝墓の時期と並行する竪穴住居跡も確認されている。

地神祇遺跡は、本庄台地東部に位置し、東側に高田堀が北流する。標高は、約57.0mである。地神祇A～C遺跡は、古墳時代前期～後期にかけての集落跡である。最盛期となるのは、古墳時代中期～後期初頭である。

地神祇A遺跡からは、古墳時代の竪穴住居跡29軒・溝跡1条、平安時代の竪穴住居跡3軒・井戸跡3基などが検出された。古墳時代の竪穴住居跡からは土器がまとめて出土しており、5世紀後半から6世紀前半にかけての土器様相を把握する上での貴重な資料である。

地神祇B遺跡からは、溝跡4条が検出された。地神祇C遺跡からは、古墳時代前期～中期にかけて機能していた大溝が検出された。溝跡の覆土中からは白色の火山灰が検出されており、榛名二ツ岳テフラと考えられる。この溝跡は、石葺A遺跡において検出された溝跡と同一と考えられる。

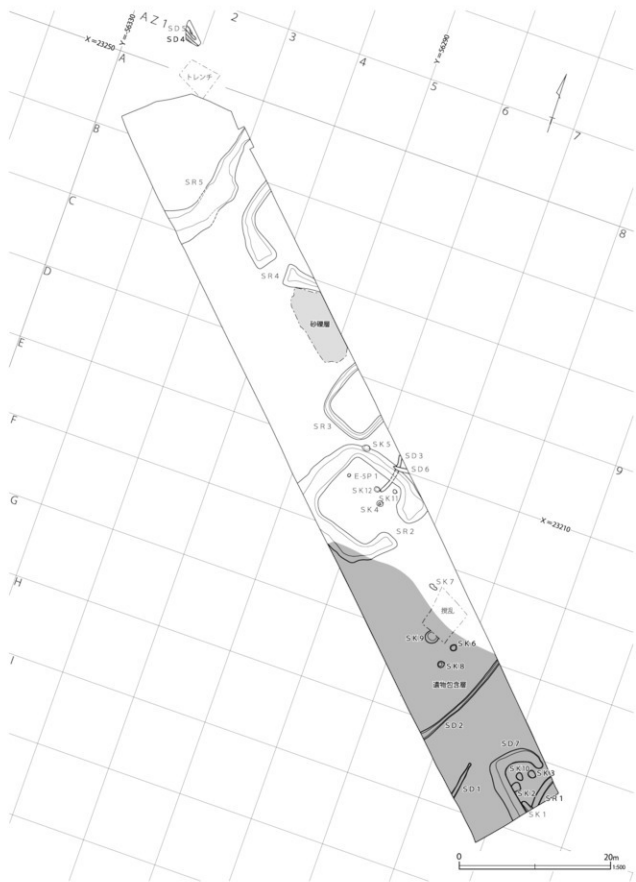
2. 調査区の概要

調査区は、遺跡範囲のほぼ中央を横断する北西から南東に伸びる長方形であり、標高は約33.0mである。調査区北西端は三角形に張り出す。張り出し部分には、調査区の北側に位置する農地へ侵入する唯一の道が位置していたため、トレンチ調査に留めた経緯がある。

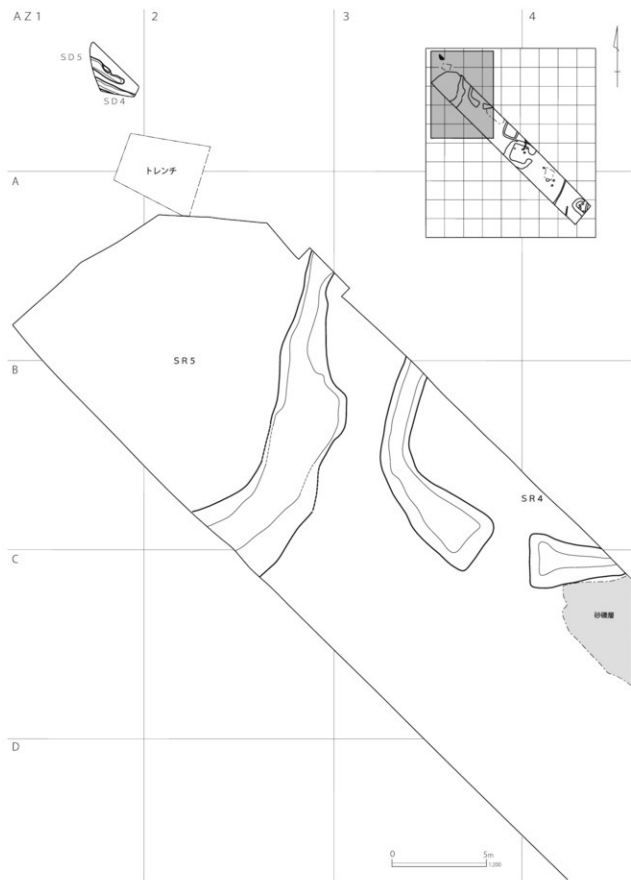
調査区より道路を挟んで南東側は、攪乱が遺構確認面までおよぶことが確認されている。調査区北西端においても同様の状況であった。これは、圃場整備事業による土壌改良のためと考えられる。後榛沢遺跡群周辺では、昭和52年に圃場整

備事業が行われており、本遺跡周辺でも、これと前後して事業が行われたものと想定される。

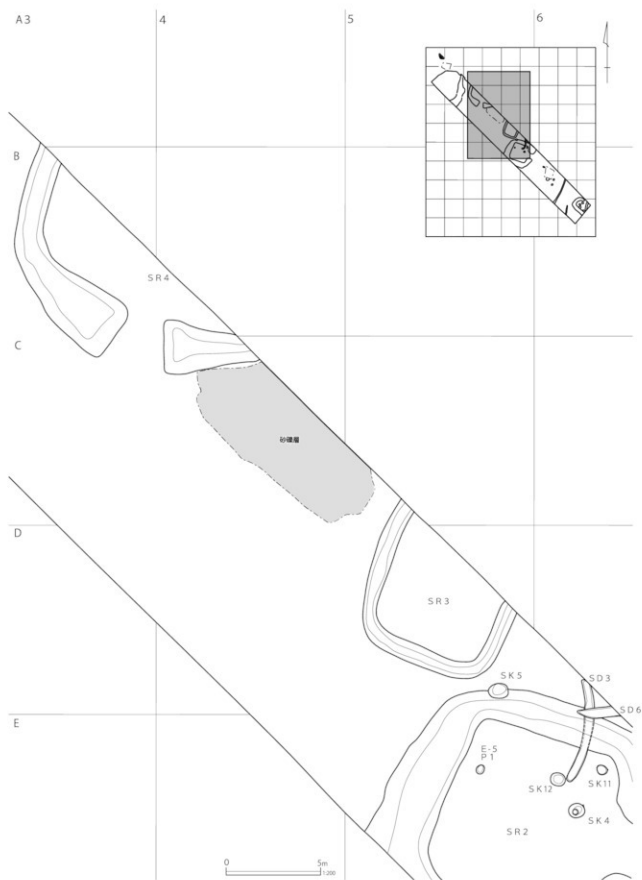
検出された遺構は、古墳時代前期の方形周溝墓5基のほか、溝跡7条・土壇12基・ピット1基・主に古墳時代の遺物が出土した遺物包含層1箇所である。溝跡の多くは、近世のものだが、第7号溝跡は古墳時代の溝跡となる可能性が高い。土壇は、6基が古墳時代、2基が古代に位置づけられ、その他の時期は不明である。遺物包含層は、古代以降の遺物が含まれていないことから、古墳時代後期頃に形成された可能性が高い。



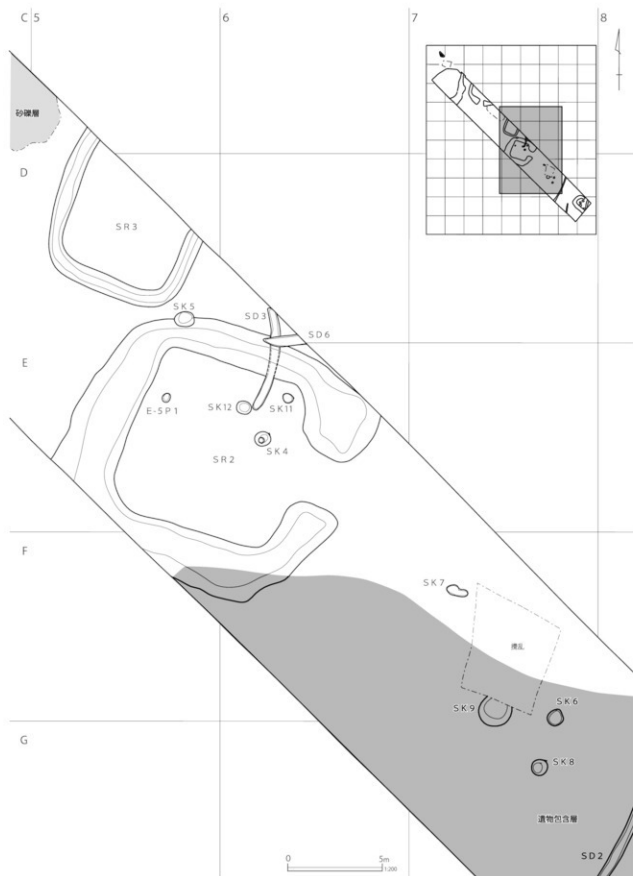
第8図 伊勢塚遺跡全体図



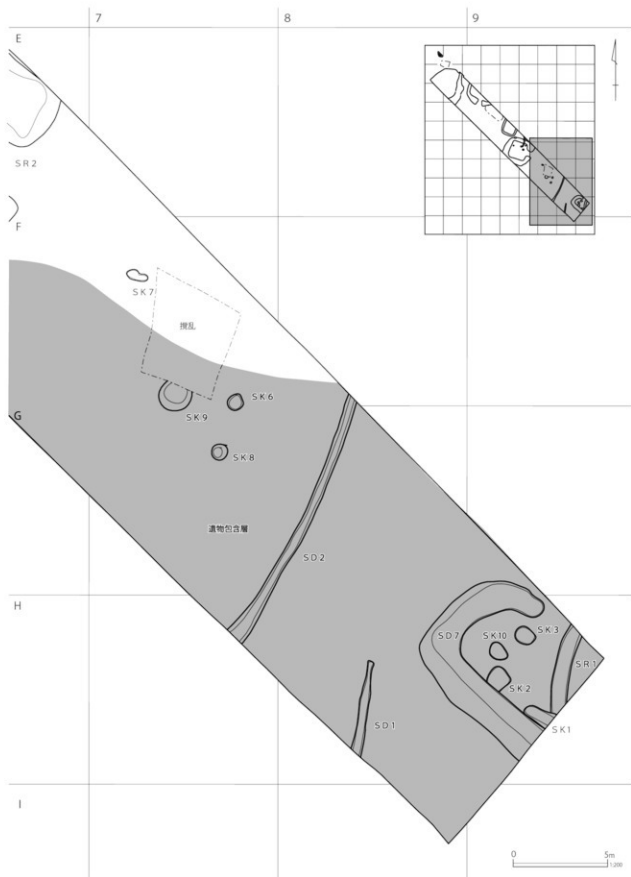
第9図 伊勢塚遺跡分割図(1)



第10图 伊勢塚遺跡分割图(2)



第11图 伊勢塚遺跡分割图(3)



第12図 伊勢塚遺跡分割図(4)

3. 伊勢塚遺跡の基本層序

伊勢塚遺跡第2・3次調査区は、前述のとおり北西から南東方向に長い長方形の調査区である。

土層は、北西側と南西側とで、概ね同様の堆積状況を示していた。しかし、第4号方形周溝墓の北東側など、遺構確認面と同一の標高で氾濫土に伴う下層の礫層が検出される場所も認められた。

基本層序は調査区南東側の、G-9北壁際と、I-9グリッド東壁際にトレンチを掘削して確認し、土層断面図を第13図に示した。

調査区北西端においてもトレンチを2箇所掘削し確認したが、北西側は、圃場整備などによる攪乱が遺構確認面前後までおよんでおり、基本層序は確認できなかった。

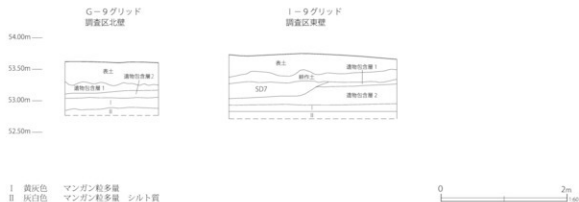
G-9グリッド北壁は農地に面しており、耕作土が0.3~0.45m堆積していた。耕作土中においても、3~5mm以下のごく微細な遺物の破片が含まれていることが、断面観察によって確認できた。

耕作土の下には、遺物包含層が0.1~0.2m堆積していた。遺物包含層の下には、マンガン粒を多量に含む、粘性の極めて強い黄灰色土（I層）が0.1~0.15m堆積していた。その下には、粘性の弱いシルト質の灰白色土（II層）が堆積していた。

I-9グリッド東壁は、道路に面しており、碎石を含む表土層が、0.25~0.35m堆積していた。表土層以下では、G-9グリッド北壁とほぼ共通する堆積状況を示し、遺物包含層が、0.45m、I層が0.1m、その下にII層の堆積が認められた。

遺構は、I層上面において確認した。I層は、保水性が高く水を含むと粘性が増して泥土状となり、反対に乾燥が進むと表面に亀裂が生じ、極めてしまりの強い土となった。

第1次調査において確認されたローム下に堆積する灰褐色の粘土層が、今回の調査区におけるI層に対応するものと考えられる。



第13図 基本層序

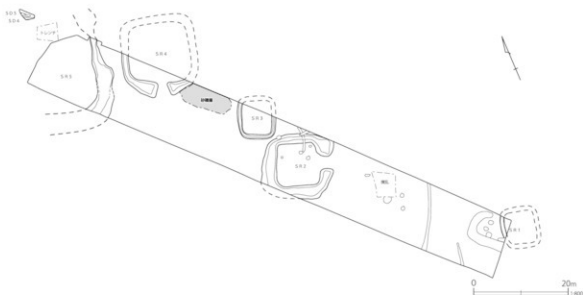
IV 遺構と遺物

1. 方形周溝墓

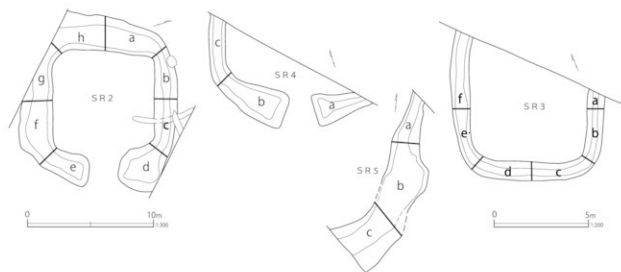
調査区からは、古墳時代前期の方形周溝墓が5基検出された。第2号方形周溝墓はほぼ全体を検出することができたが、その他の4基は大部分が調査区域外に位置する。いずれの方形周溝墓も重複は認められず、周溝を接するものも認められなかった。主軸方位に共通性は認められなかった。

第2・4号方形周溝墓では、調査区内に周溝の一部を掘り残した陸橋部が存在するが、その位置する方位はそれぞれ異なっていた。

遺構確認面の直上まで耕作による攪乱が及んでいたこともあり、いずれの方形周溝墓においても盛土は遺存していなかった。また、主体部も検出



第14図 方形周溝墓位置図



第15図 方形周溝墓区分け図

されなかった。方形周溝墓の分布状況は、調査区中央より北西側に第2～5号方形周溝墓からなる群が位置し、南東隅に離れて第1号方形周溝墓が位置していた。

遺物は、第2号方形周溝墓では、多量に出土したが、残りの4基においては、極めて少なかった。第15図に示すとおり、周溝から出土した遺物は、便宜上の区割けに従って取り上げ、周溝底面上から出土したものや、まとまりをもって出土したものなどについては、適宜出土位置と高さを記録して取り上げた。

第1号方形周溝墓（第16図）

H-9グリッドに位置する。大部分が調査区域外に位置し、コーナー部分も検出されなかった。

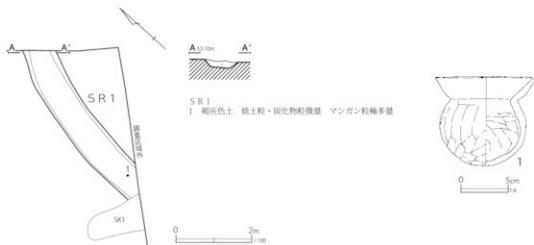
第1号土壇に壊されている。また、古墳時代後期頃に形成されたと思われる遺物包含層に周溝上部を削平されている。第1号方形周溝墓は、第2～5号方形周溝墓の群から離れて、単独で位置する。西側に位置する第2号方形周溝墓までの距離

は、約33.0mである。方台部の盛土、主体部は遺存していなかった。

主軸方位は、N-19°-Eと推測される。周溝の断面形態は、逆台形である。周溝底面に凹凸は認められず、周溝の掘削単位などは確認できなかった。検出された周溝の長さは、4.5mである。周溝の規模は、最も広いところで上幅1.0m、下幅0.65m、最も狭いところで上幅0.9m、下幅0.5mである。深さはいずれも0.2mである。覆土は、褐灰色土の単層である。周溝の幅から、第3号方形周溝墓とほぼ同規模になるものと想定される。

遺物は、土師器の胴部片が2点と埴1点のわずかに3点が出土したのみである。1は土師器の埴であり、ほぼ完形で出土した。外面に強い縦方向のヘラナデ、内面にヘラナデを施す。口縁部にヨコナデを施す。口縁部は、中ほどより外反し、下半部はやや厚手である。胎土に赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含み、焼成は良好である。

時期は、古墳時代前期に位置づけられる。



第16図 第1号方形周溝墓・出土遺物

第2表 第1号方形周溝墓出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	埴	10.5	9.4	2.2	H1K	90	良好	にぶい黄橙	SR1 No1	15・1

第2号方形周溝墓 (第17～25区)

D・E・F-5・6グリッドに位置する。本調査区において、唯一周溝の全容が、確認できるものである。

第3・6号溝跡、第4・5号土壌に壊されている。また、周溝内f・e区では、上端の一部が、遺物包含層によって壊されていた。

方台部に位置する第4号土壌は、奈良・平安時代に位置づけられ、本土壌が掘削された時期には、周溝がほぼ埋没し、地表面は平坦になっていたものと考えられる。

東側に位置する第1号方形周溝墓までの距離は、約33.0mである。

対して、北西側に位置する第3号方形周溝墓とは近接しており、最も近くで接している第2号方形周溝墓北西コーナー部分と第3号方形周溝墓南東コーナー部分間の距離が、約1.0mである。

方台部の盛土、および主体部は、遺存していないかった。

周溝内c・d区の境界周辺から調査区域外にかけては礫層が形成されていた。このため、d区の外側の立ち上がりは、この礫層を掘り込んで形成されており、d区の覆土中には、多量の砂や礫が含まれていた。

方台部の平面形態は、ほぼ正方形であり、東側の辺に周溝を掘り残した陸橋部が存在する。陸橋部は、周溝に対してほぼ垂直に掘り残されている。主軸方位は、N-66°-Wである。

周溝の断面形態は、北東・南東辺では、U字形を呈する。方台部側の立ち上がりはきつく、外側はなだらかに立ち上がる傾向がある。

一方で、南東・北西辺では、断面形態は皿形を呈し、立ち上がりも、方台部側・外側ともに緩やかである。

周溝底面の形態は、エレベーションに示す通り、ほぼ平坦であり、周溝の掘削単位などは確認できなかった。

周溝の規模は、北西から南東方向で外法14.7m、内法8.5m、周溝内側の下端間が9.5m、南西から北東方向で、外法14.1m、内法9.1m、周溝内側の下端間が10.3mである。

周溝の幅は、北西上端2.6m、下端1.6m、北東上端2.0m、下端0.6m、南東上端3.5m、下端1.8m、南西上端2.7m、下端1.3mである。

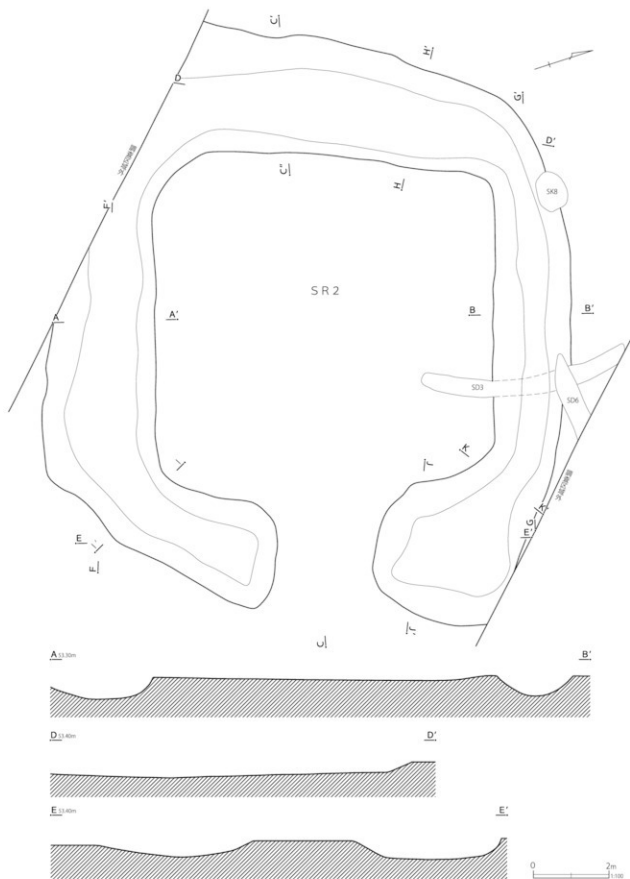
検出されたコーナーは3箇所であり、周溝の幅は、北西コーナーで、上端1.8m、下端0.8m、北東コーナーで、上端2.0m、下端0.8m、南東コーナーで、上端2.2m、下端1.1mである。

陸橋部の規模は、北西から南東方向で2.7m、南西から北東方向で2.6mである。

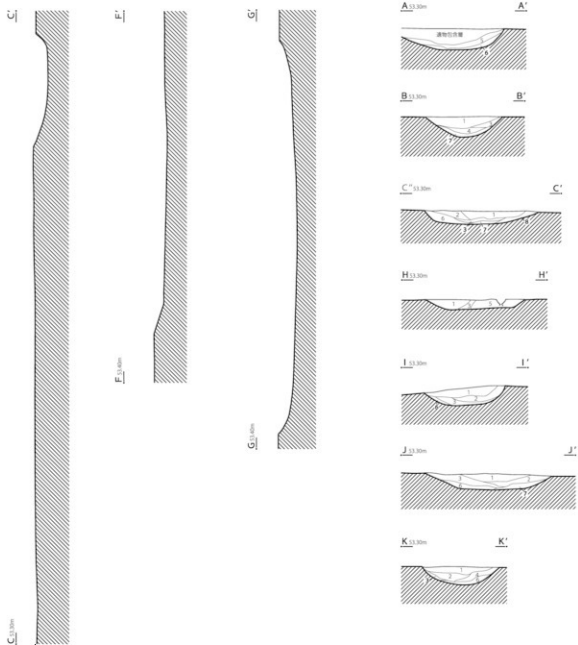
覆土は、8層に分層できた。1層は、マンガン粒多量・砂利・黒色粒少量・黄色ブロックを微量含む灰黄褐色土であった。2層は、マンガン粒多量・砂利少量を含む灰黄褐色土であった。3層は、マンガン粒・礫・砂利を多量含む灰黄褐色土であった。4層は、3層と類似しており、マンガン粒・黄色粒を多量・黄色ブロックを中量・炭化物粒を少量含む灰黄褐色土であった。5層は、マンガン粒を多量・黄色粒・炭化物粒を少量含む灰黄褐色土であった。6層は、マンガン粒を多量に含む灰白色土で、全体に砂を含む。7層は、マンガン粒を多量に含む褐灰色土であった。シルト質で、やや粗い砂を多量に含む。8層は、マンガン粒・黄色ブロックを多量に含む灰白色土であった。覆土中に含まれる黄色粒および黄色ブロックは、ローム層に由来するものの可能性がある。

3・4層は、崩落した盛土が流れ込み堆積した層と考えられる。発掘調査時、この層は地山との区別がほとんどつかなかった。

また、3・4層より下層は、砂質性の強い土が堆積しており、一部で、周溝底面直上にごく薄い砂の堆積層が認められた。さらに、周溝内b・c区境界周辺で、覆土中層から黒色化した植物遺体がまとまって検出された。植物繊維や茎が確認で



第17图 第2号方形周溝墓(1)



SR2

- | | | | |
|---------|-----------------------------|---------|--------------------------|
| 1 灰黄褐色土 | マンガン粒多量 砂利・黒色粒少量 黄色ブロック微量 | 5 灰黄褐色土 | マンガン粒多量 黄色粒・炭化物粒少量 |
| 2 灰黄褐色土 | マンガン粒多量 砂利少量 | 6 灰白色土 | マンガン粒多量 全体に砂を含む |
| 3 灰黄褐色土 | マンガン粒・礫・砂利多量 | 7 褐色土 | マンガン粒多量 シルト質 やや粗い砂を多量に含む |
| 4 灰黄褐色土 | マンガン粒・黄色粒多量 黄色ブロック中量 炭化物粒少量 | 8 灰白色土 | マンガン粒・黄色ブロック多量 |

0 2m
1cm

第18図 第2号方形周溝墓(2)

き、ヨシなどが周溝埋没後自生していたか、あるいは一括で廃棄された可能性がある。

遺物の量は、検出された方形周溝墓の中で最も多く、いずれも周溝内から出土した。

器種は、土師器の壺・甕が主体であり、高環・埴・鉢・小型甕などはごく少量であった。器台は出土しなかった。また、e区において、鉄製品の小片が1点出土した。

第19図に示すとおり、遺物の分布状況は、d区、e区、a・h区の3箇所に集中する傾向がある。出土位置において器種の偏りは認められなかったが、出土状況は大きく異なっていた。

d区は、陸橋部の北側に位置する。第2号方形周溝墓において、最も周溝の幅が広がる場所であり、断面形態は立ち上がり極めて緩やかな皿状を呈していた。

d区は、遺物が最も集中して出土した区画である。器種は、壺・甕・高環・広口壺・埴などである。また、遺物の出土状況には、2点の特徴が認められた。

1点目は、遺物のほとんどが破片であり、さらに、完形に復元できる個体が含まれなかったことである。

2点目は、遺物は、ほぼ同一レベルから出土したことである。遺物は主に、覆土の中層以上に分布しており、遺構確認面において既に遺物の一部が露出している状況であった。

このような特徴を示す由来は、方台部に供されていた土器群が時を経て破損し、それらが短時間で周溝内に流れ込んだためと考えられる。

e区は、陸橋部をはさんでd区の反対側に位置する。d区とは異なり、周溝幅の平面形態に、他よりも広がる傾向は認められなかった。

断面形態はd区と似た様相を示し、立ち上がりが極めて緩やかな皿状を呈していた。

遺物は、壺・鉢が出土した。d区とは対照的に、ほとんどが完形に近いものである。破片について

も、それぞれの個体がある程度まとまりをもって出土しており、接合により復元することができた。1・2が底面直上から、3・30が覆土中層から出土した。時期差はあるものの、いずれも方台部から周溝内に、完形に近い形のまま転落したものと考えられる。

a・h区は、陸橋部を正面とし、反対側に位置する。周溝の平面形態は、b・c・f・g区と比較すると、やや広がる傾向が認められる。

断面形態は、皿形であった。周溝の深さは、比較的浅かった。

遺物は、d・e区のように集中せず、完形に近いものが単独で少量出土した。器種は、壺・台付甕・小型甕などである。

5・29は、覆土中層から出土した。いずれも、盛土の崩落とともに方台部から周溝内に転落したものと考えられる。

一方で、14の台付甕は、遺構確認面において口縁部が露出しており、当初は方台部に設置されたものかと思われた。しかし、トレンチによって検討したところ、周溝内に含まれていたことが確認された。

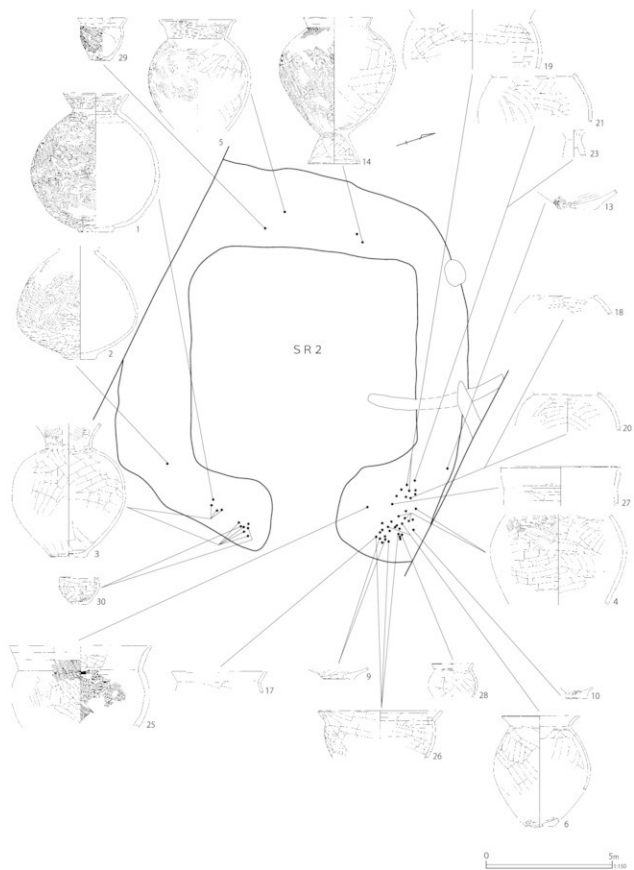
この台付甕は、底面上に直立した状態で出土し、脚台部の一部を欠損しながらも自立していた。方台部から転落した可能性も否定できないが、一方で、周溝内に据え置かれたものとも考えられる。

遺物は、第23～25図に示した。

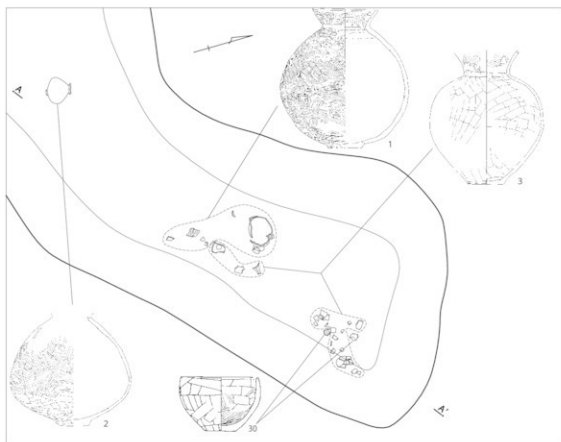
1～13は、壺である。1は、球須胴で、器壁はやや厚手である。整形は粗雑で、外面の胴部中央には輪積みの痕跡が全周する。調整は、外面に刷毛目後へラ磨きを施す。口縁部内面には、へラ磨きを施し、頸部は、強いへラナデによって接合痕をなじませている。底部はへラナデを施す。

胎土に、砂粒子・白色粒子を含み、焼成は普通である。

2は、下膨らみの胴部が特徴的である。口縁部を欠損する。風化が進んでいたためか埋没してい

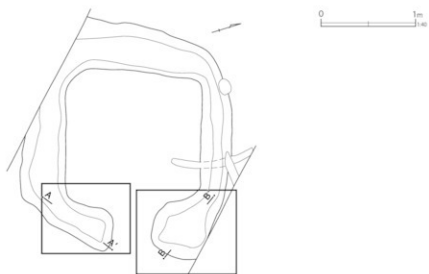
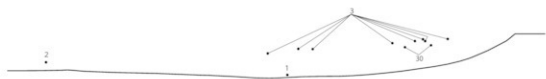


第19图 第2号方形周满墓遗物出土状况(1)

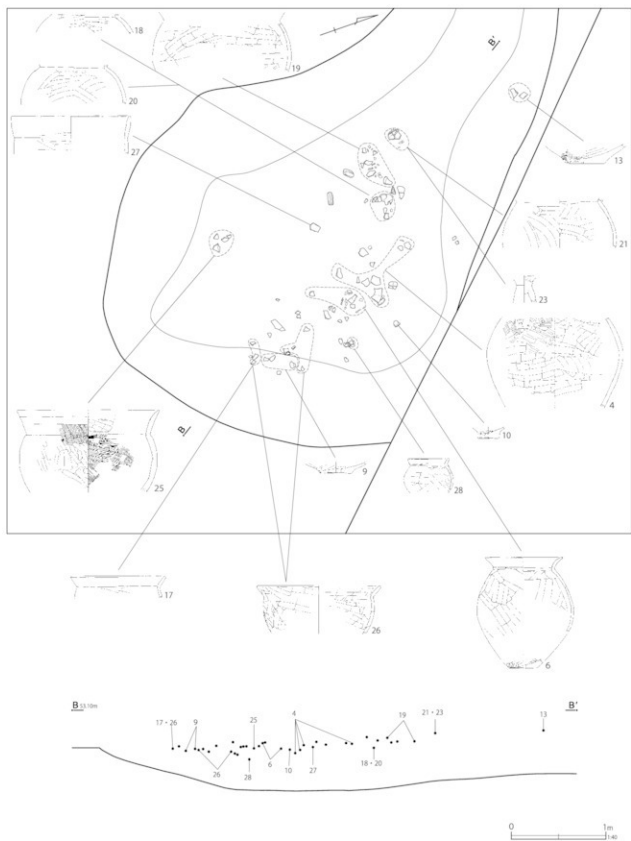


A 1:10m

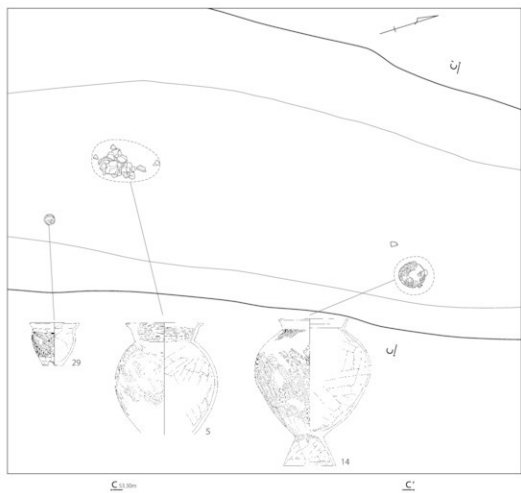
A'



第20图 第2号方形周满墓遺物出土狀況(2)

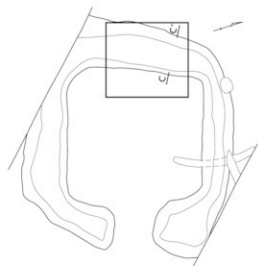


第21图 第2号方形周满墓遺物出土狀況(3)

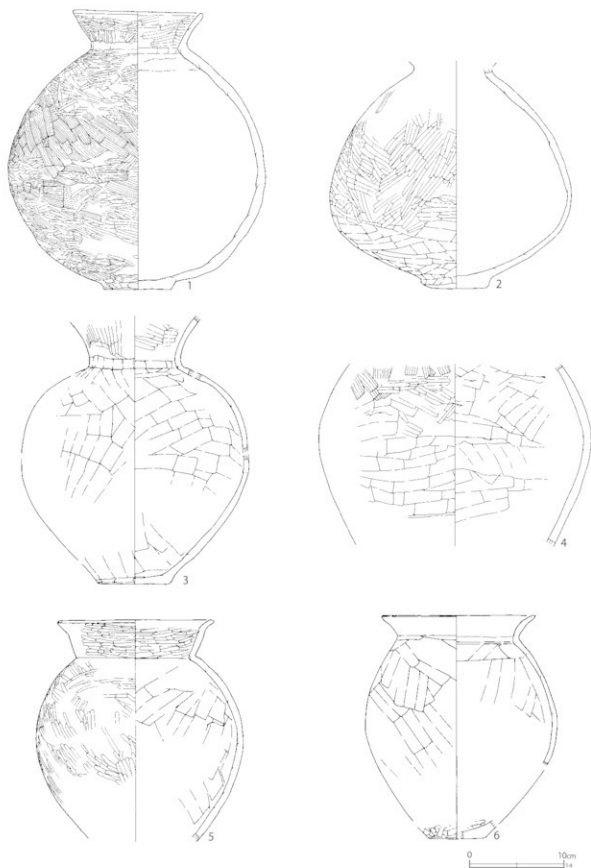


C1

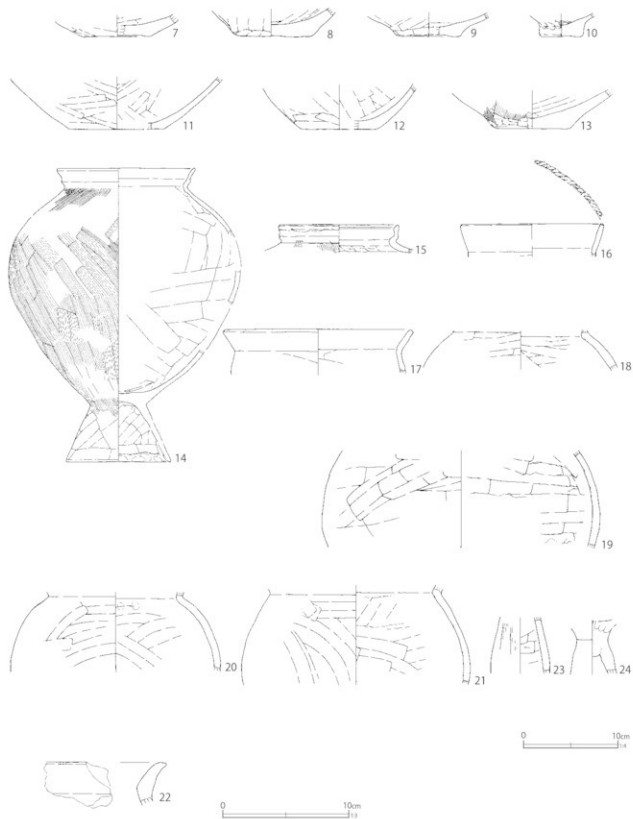
C1



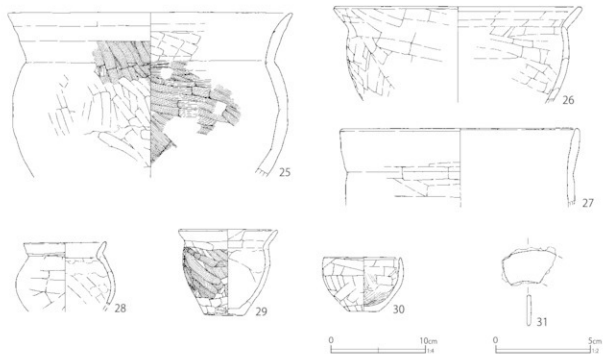
第22图 第2号方形周满墓遗物出土状况(4)



第23图 第2号方形周满墓出土遗物(1)



第24图 第2号方形周满墓出土遗物(2)



第25図 第2号方形周溝墓出土遺物(3)

た土質によるものか不明であるが、調査で取り上げた際に、器面が薄く剥離してしまった。このため、調整は不明瞭である。外面の中段にはヘラ磨き、下段にはヘラナデを施す。上段の調整は確認できなかった。底部にはヘラナデを施す。胎土に、片岩・長石・砂粒子・白色粒子を含み、焼成は普通である。器形の特徴から、東海地方の土器の影響をうけて、在地で生産されたものと考えられる。

3は、口縁部・肩部・底部の3つの破片から成る。同一個体と考えられるが、いずれも接合する部分がなかったため、図上で復元した。内外面ともに、口縁部にヘラ磨き、胴部にヘラナデを施す。頸部には、強いヘラナデ、底部にはヘラナデを施す。胎土に、角閃石・石英・砂粒子・赤色粒子・白色粒子を含み、焼成は普通である。

4は、壺の肩部である。外面には、上部に刷毛目後ヘラ磨きを施し、下部にヘラナデを施す。内面にはヘラナデを施す。胎土に、角閃石・長石・砂粒子・赤色粒子を含み、焼成は普通である。第

2号方形周溝墓から出土した壺の中では、大型に分類できるものと想定される。

5は、頸部のしまりがゆるく長胴形で、甕に類する器形であるが、調整などの特徴から壺に分類した。小片を接合によって、復元した。全体にゆがみが激しく、風化も著しい。口縁部の端部が、強く外反する。外面には、ヘラ磨き、内面にはヘラナデを施す。胎土に、角閃石・石英・砂粒子を含み、焼成は普通である。6は、5と近い器形である。口縁部端部が、外反し、長胴形を呈する。内外面ともに、ヘラナデを施し、内面は平滑に仕上げている。底部近くでは、幅の狭いヘラによってナデを施す。胎土に、長石・石英・砂粒子を含み、焼成は普通である。

7～13は、壺の底部である。7は、内外面・底部にヘラナデを施し、平滑に仕上げる。胎土に、赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含み、焼成は普通である。8は、外面の底部直上は、強いヘラナデによる整形が認められる。内外面・底部にヘラ

第3表 第2号方形周溝墓出土土物観察表 (第23~25頁)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	13.8	29.6	7.2	G I	90	普通	にぶい橙	SR2 No53	16-1
2	土師器	壺	—	[24.2]	7.2	B D E G	90	普通	橙	SR2 No54	16-2
3	土師器	壺	—	[28.1]	7.3	C E G H I	50	普通	明褐	SR2 No43-45-47-49-50 周溝外F6G 周溝	15-2-3
4	土師器	壺	—	[19.3]	—	C D G H	10	普通	にぶい橙	SR2 No21・15・18・20 SR2e.d	
5	土師器	壺	16.5	[24.1]	—	C E G	80	普通	橙	SR2 No2	16-3
6	土師器	壺	—	[15.8]	—	D E G	50	普通	灰黄褐	SR2 No25・30b	15-4
7	土師器	壺	—	[2.3]	7.0	H I K	35	普通	にぶい褐	SR2g 外面煤付着	19-3
8	土師器	壺	—	[3.15]	8.3	H I K	80	普通	橙	SR2 周溝f	19-3
9	土師器	壺	—	[2.5]	6.4	H I K	45	普通	にぶい褐	SR2 No36	19-3
10	土師器	壺	—	[2.4]	4.0	H I K	75	普通	にぶい黄橙	SR2 No41	19-3
11	土師器	壺	—	[5.4]	13.0	H I K	10	普通	褐	SR2 周溝e-c	19-3
12	土師器	壺	—	[4.3]	(7.8)	H I K	50	普通	にぶい褐	SR2g	19-3
13	土師器	壺	—	[4.1]	8.0	C H I K	50	普通	明赤褐	SR2 No5	19-3
14	土師器	台付甕	(14.5)	31.1	11.0	D G	70	普通	明褐	SR2 No1 S字状口縁	16-4
15	土師器	台付甕	(13.8)	[3.2]	—	G I K	10	普通	褐	SR2e S字状口縁	20-1
16	土師器	甕	(15.0)	[3.5]	—	I K	15	普通	明赤褐	SR2	20-1
17	土師器	甕	(23.4)	[4.7]	—	C E H I	5	普通	橙	SR2 No37 周溝d	20-1
18	土師器	甕	—	[4.3]	—	A E H I	15	普通	にぶい赤褐	SR2 No14 SR2-16と同一個体か	20-1
19	土師器	甕	—	[10.3]	—	D E G H	5	普通	にぶい黄橙	SR2 No7・8	20-2
20	土師器	甕	—	[8.5]	—	A C E H I K	15	普通	橙	SR2 No4 SR2-14と同一個体か 内外面煤付着	20-4
21	土師器	甕	—	[10.6]	—	E H I K	10	普通	明褐	SR2 No6	20-1
22	土師器	甕	—	[3.4]	—	H I K	5	普通	明赤褐	SR2g	20-3
23	土師器	高坏	—	[6.0]	—	H I K	25	普通	赤褐	SR2 周溝f 外面煤付着	20-1
24	土師器	高坏	—	[5.5]	—	C E H I	40	不良	橙	SR2 No6	20-1
25	土師器	大型鉢	(3.0)	[17.4]	—	C D G	30	普通	灰黄褐	SR2 No20・41 周溝f SR28・SR29 南中央ベルト 外面黒色 煤付着	15-5
26	土師器	大型鉢	1.6	[10.2]	—	C H I	20	普通	明赤褐	SR2 No29-35-37-40 SR2d	15-6
27	土師器	大型鉢	(24.6)	[8.4]	—	C E H I	15	普通	明褐	SR2 No17	20-4
28	土師器	小型壺	8.7	[7.2]	—	H I	70	不良	橙	SR2 No42	17-1
29	土師器	小型甕	11.3	9.0	4.1	E G	100	普通	黒褐	SR2 No4	17-2
30	土師器	鉢	8.0	5.7	3.2	B C E	100	普通	にぶい橙	SR2 No46・48 SR2e	17-3
31	鉄製品	不明	長さ2.8cm	幅1.9cm	背幅0.2cm	重さ3.5g				SR2b	28-3

ナデを施し、平滑に仕上げる。底部は、輪台状である。胎土に、赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含み、焼成は普通である。7・8の器形は、5・6のような長胴形を呈するものと考えられる。

9は、外面の底部直上の横方向のヘラナデ後、胴部に向かって斜めのヘラナデを施す。内面は、剥離が激しくわずかにヘラナデが認められる。底部は輪台状を呈する。胎土に、赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含み、焼成は普通である。10は、外面に縦方向のヘラナデ後、底部直上に横方向のナデを施す。内面にはヘラナデを施す。胎土は、赤色粒子・白色粒子・黒色粒子をわずかに含む精

緻なものである。焼成は普通である。11は、内外面ともにヘラナデを施す。胎土は、赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通である。12は、内外面ともに、ヘラナデを施し、平滑に仕上げる。胎土に、赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含み、焼成は普通である。13は、外面に刷毛目後、底部直上に横方向のヘラナデを施す。内面・底部にはヘラナデを施し、平滑に仕上げる。底部は輪台状を呈する。胎土に、角閃石・赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含み、焼成は普通である。

14・15はS字状口縁台付甕である。14は、ほぼ完形である。胴部は長胴で、イチジク形を呈する。

外面には、上位から下位に刷毛目を施し、内面はヘラナデによって平滑に仕上げる。脚部は、内外面にヘラナデを施す。内面端部に、指頭痕が認められる。胎土に、長石・砂粒子を含み、焼成は普通である。15は、口縁部で、14よりもやや厚手である。口縁部中段に粘土を張り付け、陵部とする。外面に刷毛目、内面にヘラナデを施す。胎土に、砂粒子・白色粒子・黒色粒子を含み、焼成は普通である。

16～22は、甕であり、16・17・22は口縁部である。16は、端部に刻みを施す。胎土に、白色粒子・黒色粒子を含み、焼成は普通である。18～21は、肩部である。18は、内外面に、ヘラナデを施し、外面は平滑に仕上げる。内面は屈曲部下位に強いヘラナデの痕跡が残っている。胎土に、雲母・石英・赤色粒子・白色粒子を含み、焼成は普通である。19は、しまりがゆるく、なで肩である。内外面にヘラナデを施す。胎土に、長石・石英・砂粒子・白色粒子を含み、焼成は普通である。20は、内外面にヘラナデを施し、平滑に仕上げる。内面の屈曲部下位には、指頭痕が認められる。胎土に雲母・角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含み、焼成は普通である。21は、内外面にヘラナデを施す。胎土に石英・赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含み、焼成は普通である。

23・24は、高坏の脚部である。23は、内面にヘラケズリ、外面にヘラナデを施す。外面には、ヘラ磨きを施していたと思われるが、風化のため、不明瞭である。胎土に、赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含み焼成は普通である。24は、ホソ接合である。風化がかなり激しい。胎土には角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子を含み、焼成は不良である。

25～27は、大型鉢である。25の器壁は厚手である。外面は、口縁部に3段にわたってヨコナデを施す。口縁部下部から胴部中段には一部に、目の細かい刷毛目が認められ、刷毛目跡ヘラナデを施す。

内面は、口縁部にヘラナデ、胴部に刷毛目を施し、平滑に仕上げる。胎土に、角閃石・長石・石英を含み、焼成は普通である。26は、内外面にヘラナデを施し、平滑に仕上げる。角閃石・赤色粒子・白色粒子を含み、焼成は普通である。27は、口縁部と胴部の接続部分の屈曲も弱く、ほぼ直立する。また、口縁部にゆがみがみられる。胴部に丸みをもつ25・26とは形態を異にするが、ここでは大型鉢とした。外面にヘラナデを施す。角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子を含み、焼成は普通である。25・26は、北陸系甕の可能性が高い。

28～30は、小型土器である。28は、小型壺である。内外面にヘラナデを施す。内面の屈曲部など、粘土の接続部に、指頭痕が認められる。風化が極めて激しい。胎土に、赤色粒子・白色粒子を含み、焼成は不良である。29は、小型甕である。外面に刷毛目を施す。内面には、ヘラナデを施し、平滑に仕上げる。屈曲部は、内外面ともに横方向のヘラナデを施す。底部は、輪台状を呈する。胎土に、石英と砂粒子を含む。含有物の少ない精緻な胎土である。焼成は、普通である。30は、鉢である。外面・底部には、ヘラナデを施す。内面には、ヘラナデ後ヘラ磨きを施す。内外面ともに、調整によって平滑に仕上げる。胎土に、片岩・角閃石・石英を含み、焼成は、普通である。

31は、延板状鉄製品である。緩やかなアーチ形を呈すると推定される。

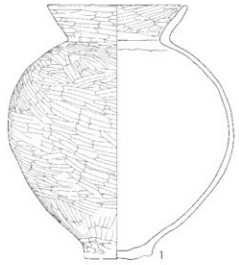
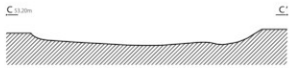
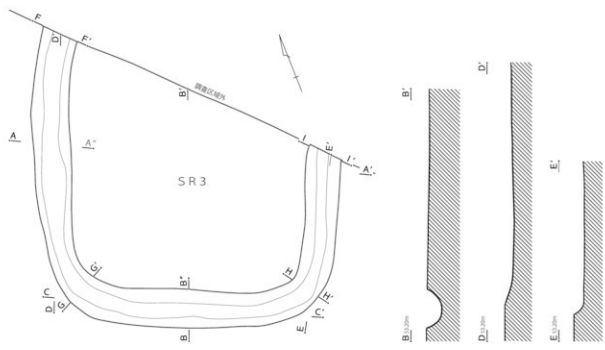
第3号方形周溝墓 (第26・27図)

C・D-5グリッドに位置する。

周溝の北側一辺および、東側の一部が調査区域外に位置する。検出された5基の方形周溝墓のなかでは、周溝の幅は狭く、深さは、きわめて浅いものであった。

方台部の盛土、および主体部は遺存していなかった。

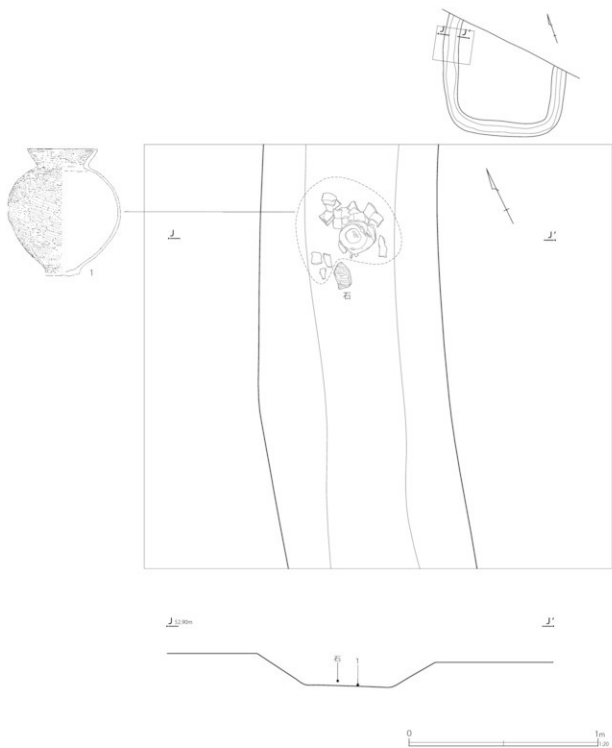
南東コーナー部で、第2号方形周溝墓と近接し、距離は約1.0mである。また、北西側に位置する、



- SR 3
 1 潮灰色土 マンガン粉・白色礫多量 黒色粘微層 中や砂質
 2 潮灰色土 炭化物粒多量 シルト質



第26図 第3号方形周溝墓・出土遺物



第27图 第3号方形周满墓遗物出土状况

第4表 第3号方形周满墓出土遗物观察表 (第26图)

番号	种别	器种	口径	器高	底径	胎土	残存	烧成	色调	備考	图版
1	土师器	壶	14.2	26.9	7.2	E.G	80	普通	明褐色	SR3 No.1	17-4

第4号方形周溝墓までの距離は、約11.0mである。

第3号方形周溝墓周辺の土層の堆積状況は、周囲と異なる様相を示していた。基本土層の項に記述したとおり、伊勢塚遺跡第2・3次調査における遺構確認面は、水はけの悪い粘質土である。しかし、第3号方形周溝墓周辺では、粒子の極めて細かい砂が、遺構確認面上に薄く層状に堆積しており、周辺に比べて水はけもよかった。この砂は、覆土中にも混入しており、特に1層は砂を全体に含む、しまりの弱い土であった。

周溝内f区における、調査区の境界部分では、周溝がわずかに内湾しており、コーナーに近い位置であると考えられる。

隣接する第2号方形周溝墓から、正面を南東と想定した。主軸方位は、N-64°-Wである。

周溝の断面形態は、大部分でU字形を呈するが、コーナーと仮定したf区の調査区境界では、断面形態は皿状を呈し、周溝の深さもやや浅くなる。方台部側と外側とで、周溝の立ち上がりには差は認められなかった。

周溝底面の形態は、エレベーションに示すとおりほぼ平坦であり、周溝の掘削単位などは確認できなかった。

周溝の規模は、北西から南東方向で外法8.0m、内法6.3m、周溝の内側下端間6.8mである。南西から北東方向で、外法(6.4)m、内法(5.3)mである。

周溝幅は、北西上端1.0m、下端0.4m、南西上端1.0m、南西下端0.3m、北西上端1.0m、下端0.4mである。

検出されたコーナーは、2箇所であり、周溝の幅は、南東コーナーで、上端0.8m、下端0.5m、南西コーナーで、上端0.9m、下端0.4mである。深さは、0.2~0.3mである。

覆土は、2層に分層できた。いずれも、マンガング粒を多量に含む。1層は白色礫を多量・黒色粒を微量含む、褐灰色の砂質土であった。2層は、

炭化物粒を多量含む、褐灰色土であった。

1・2層とも地山と類似しており、特に2層は、含有物のわずかな差異でしか、地山との区別がなかった。これらの層は、盛土が崩落して、流れ込んだものと想定される。

遺物の量は極めて少なく、図示した壺1点のほか、土師器の小片が微量出土した。

第27図に示す通り、遺物は、f区周溝底面の直上に口縁部を上にして、埋没していた。破片はすべて接合し、ほぼ完形に復元された。盛土の再堆積層と考えられる2層中に埋没していたことから、盛土の崩落に伴って、周溝内に転落したものと思われる。

また、近接して、石が1点出土した。こちらも、周溝底面の直上に位置する。表面が摩耗していたが、砥石などとして使用されたものか、自然の風化によるものか判断できなかった。

1は、壺である。口縁部端部はごくわずかに内湾する。底部の破損が著しく、一部を欠損している。内外面ともに風化が激しいが、外面と口縁部内面に、ヘラ磨きが施された痕跡を認めることができる。

胎土に、石英・砂粒子を含む。含有物の少ない精緻な胎土である。焼成は普通である。

底部の欠損は一部で貫通しているが、故意に打ち欠かれたような痕跡は認められず、焼成後の底部穿孔などではないと思われる。

第4号方形周溝墓(第28~30図)

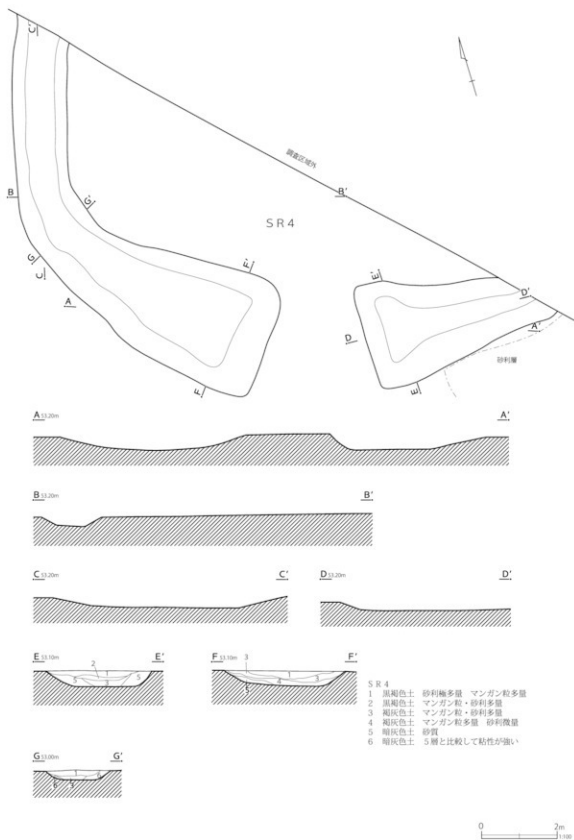
B・C-3・4グリッドに位置する。

北東側のおよそ3分の2が、調査区域外に位置している。

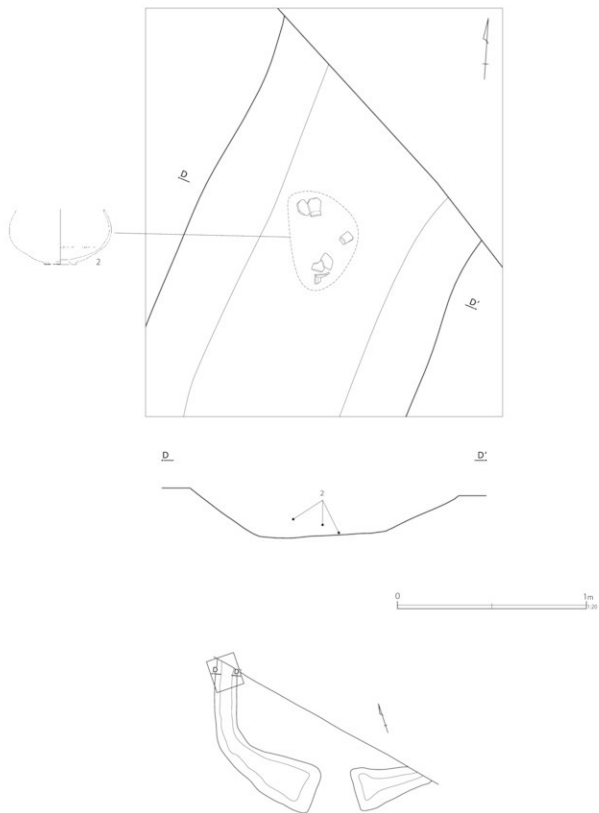
方台部の盛土や主体部は遺存していなかった。

南東側、約11.0mの距離に、第3号方形周溝墓が位置する。また、北西側、約2.0mの距離に第5号方形周溝墓が位置する。

第4号方形周溝墓の南側には、周溝内a区に接して礫層が約10.0×4.0mの範囲に広がっている。



第28図 第4号方形周溝墓



第29图 第4号方形周溝墓遺物出土狀況

a区の外側の立ち上がりは、この礫層を掘り込んでいた。礫層は30cm程度堆積しており、その下には粒の粗い砂層が堆積していた。

また、b区の周辺においては1層の堆積が薄く、周溝は、大部分で粗い砂層を掘り込んでいた。この砂層は、a区の礫層下層から続くものである。

平面形態は、南西側の辺に、周溝を掘り残す陸橋部を有する。陸橋部は、外側に向かってハの字に開く形態であり、前方後方形を呈するものとも考えられる。

一方で、前方部は未発達であり、周溝は前方後方形に全周していなかった。

周溝の幅は、第2号方形周溝墓と同様に、屈曲部からやや広がる傾向があり、陸橋部に接するa・b区が最も幅が広い。

正面は、陸橋部の位置する南西側であり、主軸方位は、 $N-2^{\circ}-E$ である。

周溝の断面形態は、いずれの位置でも逆台形を

呈する。方台部側と外側とで、周溝の立ち上がりには差は認められなかった。

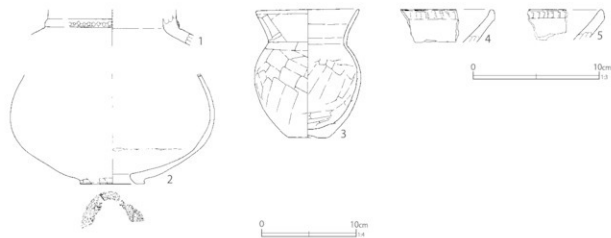
規模は、北西から南東方向で、外法(8.7)m、内法(7.0)m、北東から南西方向で、(6.0)mである。すべて遺存値である。

周溝の幅は、北西上端1.6m、下端0.7mである。また、セクションポイントE-E'上端2.8m、下端1.7m、F-F'上端3.2m、下端2.1mである。検出されたコーナーは、1箇所であり、周溝の幅は、1.7m、下端0.9mである。

陸橋部の規模は、北西から南東方向で、最も狭い位置の上端幅が2.0m、下端幅が、3.3m、最も広い位置の上端幅が3.8m、下端幅が4.8mである。南西から北東方向で、3.0mである。

周溝底面の形態は、エレベーションに示すとおりほぼ平坦であり、周溝の掘削単位などは確認できなかった。

周溝の深さはほぼ均一で、0.3~0.4mである。



第30図 第4号方形周溝墓出土遺物

第5表 第4号方形周溝墓出土遺物観察表(第30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	—	[3.7]	—	BCEGH	5	普通	橙	SR4a	20-5
2	土師器	壺	—	[11.7]	(6.5)	BEH	30	不良	橙	SR4 No.1-2-3 SR4c 底部穿孔	17-5
3	土師器	小型壺	10.8	13.5	4.2	DGH	80	不良	橙	SR4 No.4 SR4b	18-1
4	土師器	壺	—	[2.6]	—	BDEGH	5	普通	にぶい橙	SR4a	20-5
5	土師器	壺	—	[2.4]	—	BEGH	5	普通	にぶい橙	SR4-2	20-5

覆土は、6層に分層できた。1層は、砂利を極めて多量・マンガン粒を多量に含む黒褐色土であった。2層は、マンガン粒と砂利を多量に含む黒褐色土である。3層は、マンガン粒と砂利を多量に含む褐色土であった。4層は、マンガン粒を多量・砂利を微量含む褐色土であった。5層は、暗灰色の砂層であった。6層は、5層に類似するが、粘性が強かった。a・b区においては、砂層を掘り込んでいたために、覆土のすべての層に、かなりの砂が混入していたが、c区では砂の覆土への混入量は、比較的少なかった。

出土遺物は少なく、また、遺存状態は不良であった。1・2・4・5は壺である。1は、口縁部である。屈曲部に紐状の粘土を貼り付し、先端の丸い棒状工具によって、押捺を施す。胎土に、片岩・角閃石・石英・砂粒子・赤色粒子を含み、焼成は普通である。2は、下膨らみの胴部である。風化が著しく、調整は不明瞭である。底部の直上にヘラ状工具による整形が認められる。底部は、丸く打ち欠かれており、焼成後に穿孔されたものと考えられる。胎土に、片岩・石英・赤色粒子を含み、焼成は不良である。4は、口縁部である。端部に紐状の粘土を貼り付し、断面形態は三角形を呈する。添付された粘土には、ヘラ状工具により押捺が施される。片岩・長石・石英・砂粒子・赤色粒子を含み、焼成は普通である。5は、4と同様に、口縁部端部に粘土紐を貼り付し、ヘラ状工具による押捺を施す。同一個体の可能性もあるが、断面形態は5の方がややすべり胴であるなど差異が認められたので、別個体としてそれぞれを図示した。胎土に、片岩・石英・砂粒子・赤色粒子を含み、焼成は普通である。3は、小型壺である。外面は、口縁部にヘラナデを施し、端部をヨコナデする。胴部にはヘラナデを施す。内面は、口縁部にヨコナデ、胴部にヘラナデを施す。底部は、ヘラナデを施す。輪台状を呈する。胎土に、長石・砂粒子・赤色粒子を含み、焼成は不良である。

第5号方形周溝墓（第31区）

A・B-1・2、C-2グリッドに位置する。大部分は調査区域外に位置する。南東側2.0mに第4号方形周溝墓が位置する。

周溝の幅は5基の中で最も広い。b区には外へ向かって突出する部分を有し、a区では幅が狭まる傾向がある。南側の調査区域において、周溝はわずかに内湾する傾向が認められ、コーナー近くである可能性が高い。調査区北西端およびトレンチで周溝が確認されなかったことから、かなり大規模になるものと想定される。隣接する第4号方形周溝墓に比べて南西方向を正面とすると、主軸方位はN-8°-Eである。

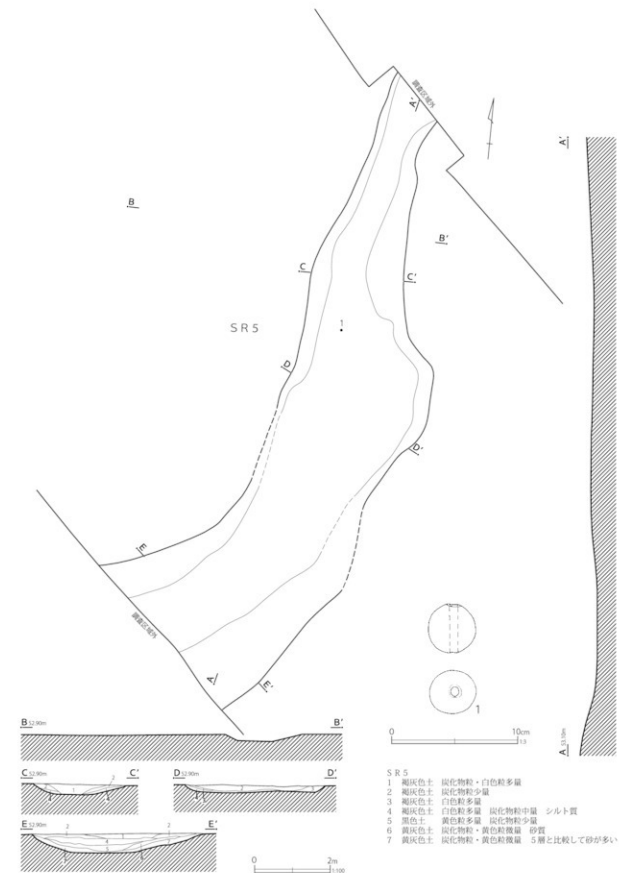
周溝の断面形態は皿状を呈する。周溝底面の形態は、エレベーションに示すとおり、ほぼ平坦であり、周溝の掘削単位などは確認できなかった。

周溝の規模は、最も広い位置で、上端4.5m、下端1.7m、突出部の位置で、上端3.8m、下端3.0m、最も狭まる位置で、上端1.2m、下端0.7mである。深さは、0.2~0.45mである。

覆土は、7層に分層できた。1層は、炭化物粒・白色粒を多量に含む褐色土であった。2層は、炭化物粒を少量含む褐色土であった。3層は、白色粒を多量に含む褐色土であった。4層は、白色粒を多量、炭化物粒を中量含む褐色土で、粘性が弱くシルト質であった。5層は、黄色粒を多量、炭化物粒を少量含む黒色土であった。6層は、炭化物粒・黄色粒を微量含む黄褐色土であり、粘性が弱く砂質であった。7層は、6層に類似するが、6層よりも砂が多く含まれていた。

4層と5層の境には、黄褐色で粒子の細かく、粘性の弱い土が薄く堆積しており、火山灰と考えられる。また、覆土に含まれる黄色粒はローム層に由来する可能性がある。

出土遺物は、1の土玉のみである。ナデを施す。胎土に、雲母・石英・赤色粒子を含み、焼成は、良好である。



第31図 第5号方形周溝墓・出土遺物

第6表 第5号方形周溝墓出土遺物観察表 (第31図)

番号	種別	器種	長さ	幅	重さ	孔径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土製品	土玉	3.9cm	3.8cm	46.7g	0.6cm	A E H	100	良好	にぶい黄粒	SR5 No1	20・6

2. 溝跡

溝跡は、7条検出された。多くが第2号方形周溝墓より東側に分布している。各溝跡の概要は第8表に示し、出土遺物は第37図に示した。

第7号溝跡を除く6条は、いずれもごく浅く幅の狭いものであった。しかし、溝の上部が削平されていることを想定すると、本来は溝幅もひろく深いものであった可能性がある。水の流れた痕跡は認められなかった。出土遺物は少なかった。

第1号溝跡 (第32図)

H-8グリッドに位置する。遺構の南側は調査区域外に位置する。東側に位置する第2号溝跡が近接する。

走行方位は、N-9°-Eである。平面形態は、直線的である。断面形態は、狭いところではU字形を呈し、広いところでは皿形を呈する。南から北へと深くになっている。検出された長さは、4.94mである。幅は0.26~0.60m、深さは0.04~0.08mである。北側の端部から南に向かって徐々に幅が広がっており、覆土は、褐灰色土の単層であった。調査区の壁面において溝の上部が耕作によって壊されていることが確認できた。

遺物は、土師器の小片が少量出土した。覆土の様相から近世に位置づけられる。

第2号溝跡 (第33図)

G・H-7、F・G・H-8グリッドに位置する。調査区を縦断しており、遺構の両端は調査区域外に位置する。西側に位置する第1号溝跡と近接する。

走行方位は、N-24°-Eである。平面形態は、直線的である。断面形態は、逆台形を呈する。セクションポイントD-D'ライン周辺から南側より幅が広くなり、極端に浅くなる。検出された長さは、14.16mである。幅は、0.48~1.08m、深さは0.06~0.16mである。覆土は、褐灰色土の単層であった。調査区の壁面において、溝の上部が耕

作によって壊されていることが確認できた。

遺物は、土師器の小片が少量出土した。覆土の様相から近世に位置づけられる。

近接する第1号溝跡と第2号溝跡は、覆土がきわめて類似しており、上部が耕作によって削平される程度も共通している。このことから、2条の溝跡はほぼ同時期に機能していたものであろう。溝の性格については、区画溝や排水溝などが想定される。

第3号溝跡 (第32図)

D・E-6グリッドに位置する。北東側の端部がわずかに調査区域外に位置する。第2号周溝墓を壊し、第6号溝跡に壊されている。

走行方位は、N-7°-W、N-26°-Eである。平面形態は緩やかに弧を描く弓状で、距離の短い溝跡である。断面形態は、逆台形・U字形を呈する。検出された長さは、5.62m、幅は、0.38~0.50m、深さは0.10~0.14mである。覆土は暗褐灰色土の単層であった。

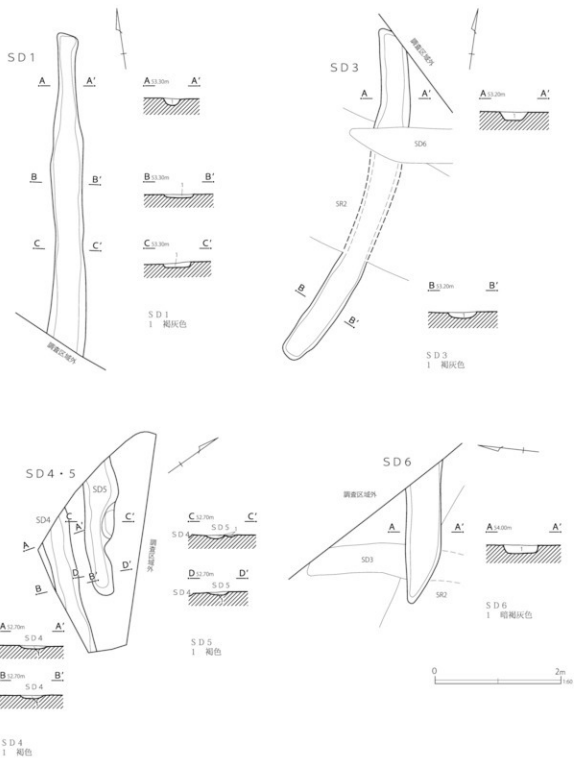
遺物は、土師器の小片が少量出土した。性格は不明である。

第4号溝跡 (第32図)

AZ-1グリッドに位置する。遺構の両端は調査区域外に位置する。走行方位は、N-64°-Wである。北側に位置する第5号溝跡と並走する。平面形態は、直線的である。断面形態は皿形を呈する。検出された範囲が少なく、底面の傾きは確認できなかった。

検出された長さは、2.28mである。幅は、0.36~0.44mである。深さは、0.04~0.06mである。覆土は褐色土の単層であった。

AZ-1グリッドは、耕作による攪乱が深くまで及んでおり、溝の上部はほぼ削平されている状態であった。そのため、本来の形状はほぼ失われており遺物も出土しなかった。よって性格や時期



第32图 沟迹 (1)

は不明である。

第5号溝跡 (第32図)

A-Z-1グリッドに位置する。遺構の北西側は調査区域外に延びる。南側に位置する第4号溝跡と並走する。

走行方位は、N-56°-Wである。平面形態は、直線的である。断面形態は皿形を呈する。第4号溝跡と同様に底面の傾きは確認できなかった。北側の立ち上がりはやや不明瞭であった。検出された長さは2.06m、幅は0.28~0.54m、深さは0.02~0.06mである。覆土は褐色土の単層であった。

前述のとおり、当該グリッドは上部が耕作によって覆乱されており、溝の本来の形状はほぼ失われている。また、遺物も出土しなかった。このため、遺構の性格や時期は不明である。

第6号溝跡 (第32図)

D・E-6グリッドに位置する。遺構の東側は調査区域外に延びる。第2号方形周溝墓と、第3号溝跡を壊している。

走行方位は、N-85°-Eである。平面形態は、直線的である。断面形態は逆台形である。検出された範囲が少なく、底面の傾きは確認できなかった。検出された長さは、2.10mである。幅は、2.80mである。深さは、0.09~0.14mである。覆土は暗褐色土の単層であった。遺物は、土師器の小片が微量出土した。

第7号溝跡 (第34~37図)

G・H-8・9グリッドに位置する。遺構の東側は調査区域外に延びる。第2号土壇を壊し、第1号土壇に壊されている。

走行方位は、N-66°-W、N-43°-E、N-49°-Wである。

平面形態は、J字状を呈する。断面形態は逆台形であり、内面が直立し、外面がなだらかに立ち上がる傾向がある。底面に凹凸は見られるが、一方向への傾きは認められなかった。溝の上部は、耕作によって壊されている。検出された長さは、

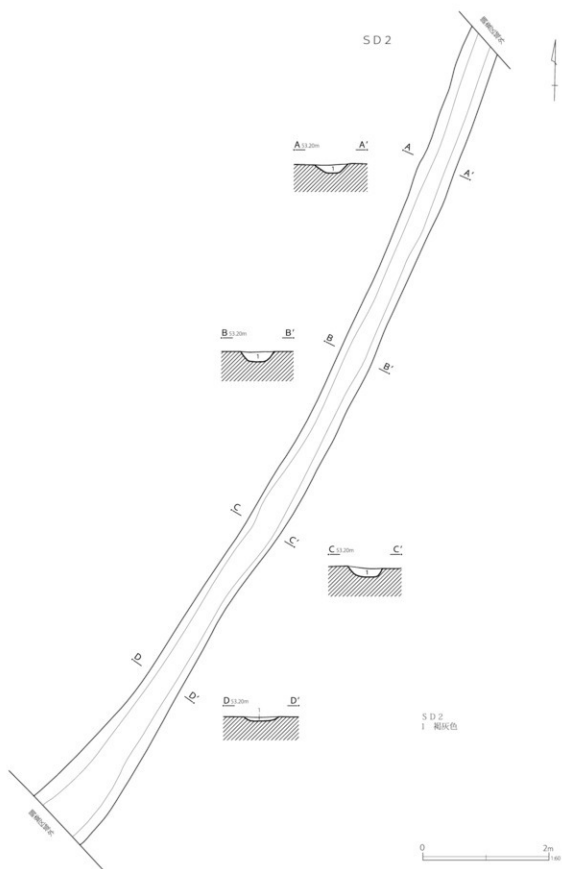
13.75m、幅は、1.30~2.18m、深さは、0.15~0.33mである。

覆土は、3層に分層できた。1層は、白色粒を多量、マンガン粒を少量含む暗灰褐色土であった。2層は、白色粒を多量、マンガン粒を極めて多量に含む暗灰褐色土であった。3層は、白色粒・マンガン粒を少量含む灰褐色土であった。3層は、粘土質でしまりが非常に強い土であった。

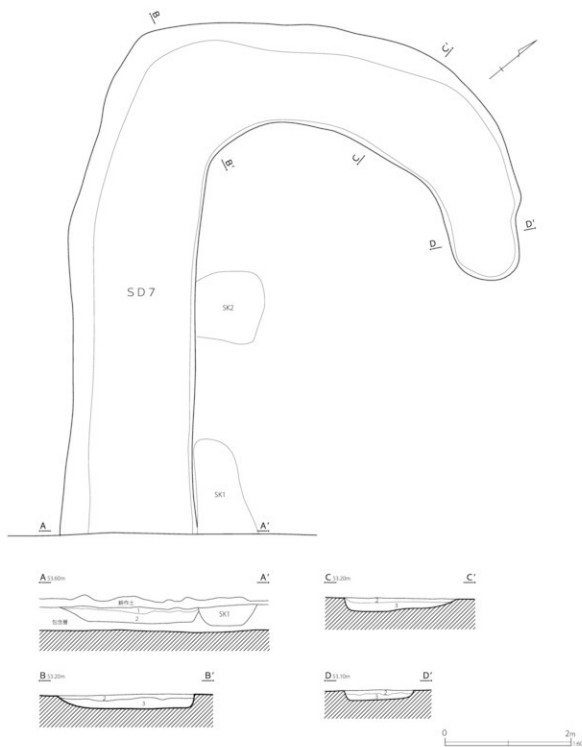
現場における遺構精査の際、セクションポイントB-B'部の屈曲が明瞭であったため、当初は方形周溝墓を想定して掘削を開始したが、平面形態は不整形で方形をなさなかった。さらに、土層断面を確認したところ、古墳時代前期~後期までの遺物が混在する遺物包含層を掘り込むことが明らかとなった。そのため、当初の想定を改め、溝跡とした。

遺物は、主に1・2層中に含まれており、極めて多量であった。その内訳は、土師器の小片がほとんどであるが、なかには壺・甕・台付甕・高坏・埴など器種を特定できるものが少量含まれる。

1・2は壺の口縁部である。1は口縁部がやや外反する。外面には、刷毛目後に横ナデ、内面には、ヘラナデ後横ナデを施す。2は端部がやや外反する。外面には、ヘラナデ後横ナデ、内面は刷毛目後横ナデを施す。外面にはヘラの当たった痕跡が強く残る。屈曲部から胴部にかけては、内面に横方向のヘラナデを施す。1・2ともに含有物の多い粗い胎土である。3は壺の肩部である。外面は刷毛目を施す。内面はヘラナデが施される。4・5は壺の底部である。4は、外面を横方向のヘラナデによって平滑に仕上げる。内面には、強いヘラナデ、底部にはヘラナデを施す。底部は中央の窪んだ輪台状を呈する。5は、外面をヘラナデによって平滑に仕上げる。内面には、強いヘラナデ、底部にはヘラナデを施す。底部は中央の窪んだ輪台状を呈する。全体の成形、調整は4と共通するが、5は、4よりも底部の粘土の織み目を



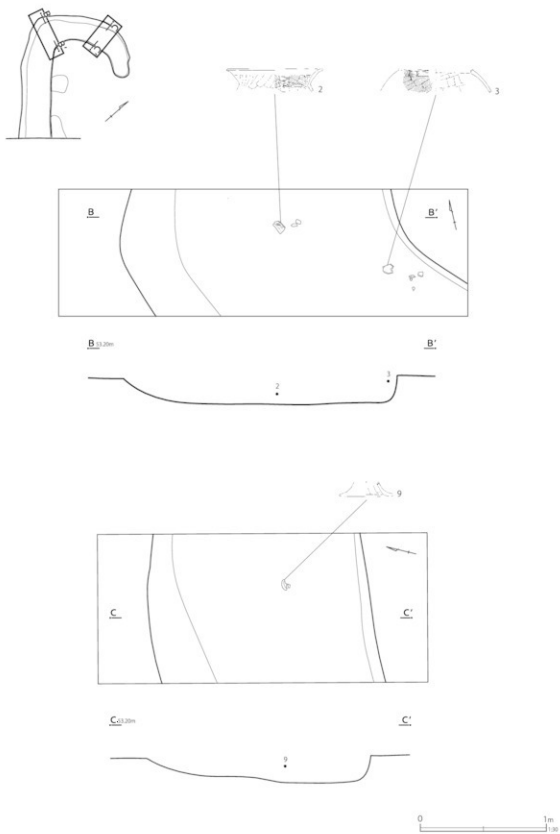
第33图 沟迹 (2)



SD7

- 1 暗灰褐色土 白色粒多量 マンガン粒少量
- 2 暗灰褐色土 白色粒多量 マンガン粒極多量 土師器破片少量
- 3 灰褐色土 白色粒少量 マンガン粒少量

第34図 溝跡(3)



第35图 第7号沟迹遗物出土状况(1)

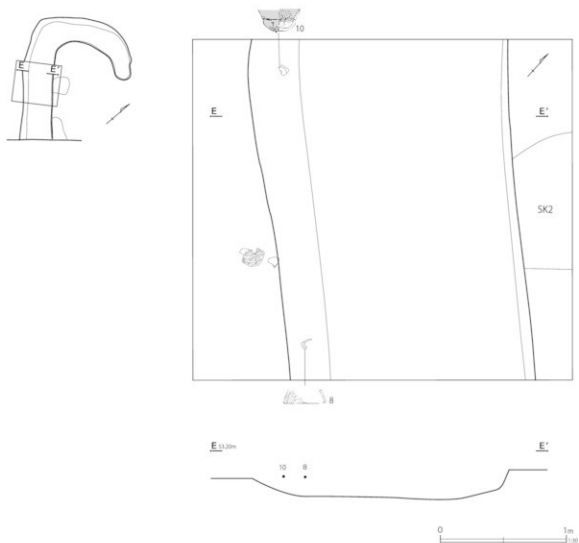
丁寧に均し、滑らかに仕上げている。

6～8は台付甕の脚台部である。6は、外面に単位幅の広い刷毛目、内面にヘラナデを施す。7は、外面に刷毛目後ナデを施す。これにより刷毛目の一部がナデ消される。接地部を内面に折り返す。内面には、指頭痕が確認でき、過半部にはナデを施す。8は、外面に、単位幅の広い刷毛目を施す。内面は、わずかにヘラナデが認められるが風化のため不明瞭である。

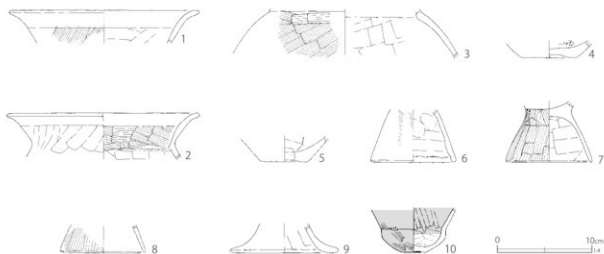
9は高環の脚部である。扁平な形状で焼成不良のため器面の風化が著しく、調整は不明瞭である。

内面にわずかにヘラナデが認められる。

10は埴である。胴部は扁平で、頸部はハの字に開く。底部はヘラケズリにより中央をくぼませている。外面にはヘラナデ後ヘラ磨きを施す。内面には、ナデを施す。外面と、内面の一部に赤彩が認められる。これらは、古墳時代前期に位置づけられる。図示できなかった遺物においても、刷毛目調整を施すなど古墳時代前期に比定できるものが多く含まれる。これは、隣接する第1号方形周溝墓の遺物が流れ込んだためと想定される。一方で、古墳時代後期の模倣坏なども含まれていた。



第36図 第7号溝跡遺物出土状況(2)



第37図 第7号溝跡出土遺物

第7表 第7号溝跡出土遺物観察表(第37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(19.2)	[3.6]	—	B E I	5	普通	明赤褐	SD7	21-1
2	土師器	壺	(19.6)	[5.0]	—	B E H I	15	普通	明赤褐	SD7 No2	21-1
3	土師器	壺	—	[6.1]	—	B C E H I	5	普通	明赤褐	SD7 No3	21-1
4	土師器	壺	—	[2.8]	(4.6)	B C E H I	50	普通	にぶい橙	SD7	21-1
5	土師器	壺	—	[1.8]	(5.6)	B E H I	10	普通	にぶい橙	SD7	21-1
6	土師器	台付甕	—	[5.6]	(8.4)	C E I	25	普通	にぶい橙	SD7	21-1
7	土師器	台付甕	—	[6.5]	(8.8)	B C G H	30	普通	橙	SR1 No8	18-2
8	土師器	台付甕	—	[2.9]	(8.8)	B C E H I	5	普通	橙	SD7	21-1
9	土師器	高坏	—	[3.2]	(11.4)	E H I	30	不良	橙	SD7 No1	21-1
10	土師器	埴	—	[4.8]	2.4	B C E G H	50	普通	にぶい橙	SD7 No6 赤彩	18-3

第8表 溝跡一覧表(第32～34図)

遺構名	グリッド	長さ	幅	深さ	断面形	方位	走行方向	重複関係・備考
1号溝跡	H 8	4.94	0.26～0.60	0.04～0.08	皿形	N-9° -E	南→北	
2号溝跡	G・H-7 F・G・H-8	14.16	0.48～1.08	0.06～0.16	逆台形	N-24° -E	北東→北西	
3号溝跡	D 6・E 6	5.62	0.38～0.50	0.10～0.14	逆台形 U字形	N-7° -W N-26° -E	北東→南西	SD6より古・SR2より新
4号溝跡	A Z 1	2.28	0.36～0.44	0.04～0.06	皿形	N-64° -W	南東→北西	
5号溝跡	A Z 1	2.06	0.28～0.54	0.02～0.06	皿形	N-56° -W	南東→北西	
6号溝跡	D 6・E 6	2.10	2.80	0.09～0.14	逆台形	N-85° -E	西→東	SR2・SD3より新
7号溝跡	G8・G9・H8・H9	13.75	1.30～2.18	0.15～0.33	逆台形	N-66° -W N-49° -W N-43° -E	南東→南西 →南東	

3. 土壌

土壌は、12基検出された。主に、第2号方形周溝墓より東側に分布する。各土壌の概要は第9表に示し、出土遺物は第40図に示した。

平面形態は、円形・楕円形・不整形など多様である。

第6・8・9号土壌は、遺物包含層を除去後に検出したものであるが、遺物包含層との新旧関係は不明である。

覆土は、灰色味を帯びるものが主体で、地山の土色に近いものであったため、いずれも検出は困難であった。また、マンガン粒を含むものが多い。遺物は、多くの土壌で土師器の破片が出土したが、器種や時期がわかるものは少なかった。そのため、土壌の時期や性格を特定できないものもあった。

一方で、第7号土壌では、古墳時代前期の壺・無頸壺・鉢など多種にわたる遺物が出土した。無頸壺は、口縁部に一對の孔を有する。また、第4号土壌からは、川原石とともに奈良・平安時代の丸瓦が出土した。各土壌の詳細は以下に示す。

第1号土壌 (第38図)

H-9グリッドに位置する。一部が調査区域外となる。遺物包含層を掘り込んでいる。

平面形態は、やや不整な楕円形と考えられる。

断面形態は皿形で、底面に傾きは認められない。

長軸方位はN-60°-Wである。

規模は、長軸が遺存値で1.52m、短軸0.70m、深さ0.18mである。

覆土はマンガン粒を中量含む暗褐色土の単層であった。遺物は、土師器の小片が少量出土した。

第2号土壌 (第38・40図)

H-9グリッドに位置する。一部を第7号溝跡によって壊されている。遺物包含層を掘り下げる過程で検出された。遺物包含層下層を掘り込んでいる。

平面形態は不整形な隅丸方形と考えられる。

断面形態は皿形で、底面に傾きは認められな

った。長軸方位はN-40°-Eである。

規模は、長軸1.10m、短軸1.05m、深さ0.32mである。覆土は、マンガン粒を多量に含む黒褐色土の単層であった。

遺物は、壺・甕・高坏環部などの破片が多量に出土した。また、遺物包含層検出面において、本土壌の平面プラン内から鉄製の鎌1点が出土したが、土壌への帰属が不確定であったため、遺物包含層の項において詳述した。実測図は、第44図に示した。

1は甕の底部と考えられる。内外面、底面ともにヘラナデを施す。外面では、ヘラナデ後に棒状工具による成形が認められる。胎土は1~2mm程度の石英粒等を多量に含む粗いもので、焼成がよく硬質である。遺物は古墳時代前期に位置づけられる。

胎土に雲母・片岩・角閃石・石英・赤色粒子を含み、焼成は良好である。

第3号土壌 (第38図)

H-9グリッドに位置する。遺物包含層を掘り込んでいる。

平面形態は、不整形な円形である。

断面形態は、皿形で底面に傾きは認められない。

長軸方位はN-50°-Wである。

規模は、長軸1.08m、短軸0.90m、深さ0.14mである。

覆土は、マンガン粒を多量に含む暗褐色土の単層であった。

遺物は、土師器甕・高坏環部・脚部のほか土師器の小片が多量に出土した。多くが古墳時代前期に位置づけられる。

第4号土壌 (第38・40図)

E-6グリッドに位置する。第2号方形周溝墓の方台部に位置する。

平面形態は円形である。

断面形態はU字形で、一部を深く掘り込む。中

端の中央よりやや西寄りにピット様の掘り込みを有する。長軸方位はN-79°-Eである。

遺構の形態や遺物の出土状況から、掘立柱建物跡の柱穴の可能性を想定したが、周辺から同様の遺構が検出されなかったため土壌とした。

規模は、長軸0.84m、短軸0.78m、深さ0.58mである。

覆土は、4層に分層できた。1層は砂利を極めて多く含む暗褐色土であり、2層は地山によく似た暗灰色土であった。3・4層は、いずれも明褐色の目の粗い砂層であった。

遺物は、2層と3層の境において、丸瓦と川原石が重なって検出された。さらに、土師器の小片1点が出土した。2は、丸瓦である。広端面の一部が遺存する。凹面に細かい布目が見られ、一部に布綴じ痕が残る。1cmあたりの布目の本数は、9×6本である。広端面より約4cmの範囲にケズリ後ヘラナデを施す。一部の割れ目にそって筋状のへこみが認められることから、有段式丸瓦の可能性がある。凸面は、縄叩きの後ヘラ状工具による縦方向のナデが施され、縄目をすり消している。広端面にはヘラナデを施す。焼成は良好で、硬質である。

胎土に、砂粒子と白色粒子を含む。

時期は、凹面の布目が細かいこと、凸面の縄叩き痕をナデ消していることなどから、奈良時代までさかのぼる可能性がある。

石は、自然石であったため、写真のみを示した。(図版28 1・2) 出土遺物から、土壌の時期は古代と考えられる。

第5号土壌 (第38図)

D-5グリッドに位置する。第2号方形周溝墓の周溝を壊している。

平面形態はやや不整な楕円形である。

断面形態は箱形で、底面は西側がやや深くなっている。長軸方位はN-90°-Eである。

規模は、長軸1.03m、短軸0.76m、深さ0.56m

である。

覆土は、3層に分層できた。1層は炭化物粒を少量含む粘性の弱い灰黄色土で、2層は黄灰色土、3層は暗灰色の目の粗い砂層であった。2層は全体にブロック状の砂や砂利を含んでいた。

覆土の堆積状況が第4号土壌に類似することから、土壌の時期は古代と考えられる。遺物は、土師器の小片が少量出土した。

第6号土壌 (第38・40図)

F・G-7グリッドに位置する。遺物包含層掘削後に検出された。

平面形態は、不整な円形である。

断面形態は皿形で、底面はわずかに西側が深くなる。長軸方位はN-25°-Eである。

規模は、長軸0.94m、短軸0.83m、深さ0.12mである。

覆土は、2層に分層できた。1層はマンガンを多量に含む褐灰色土であり、2層はマンガンを含む1層より明い褐灰色土であった。2層は壁の崩落土と考えられる。

遺物は、器種不明の土師器片少量と、埴が出土した。3は、埴の底部である。内面はユビナデを施す。外面は、ヘラナデを施すものと考えられるが、磨滅しており不明瞭である。底部はヘラケズリ後ヘラナデを施す。胎土に、片岩・角閃石・長石・石英・赤色粒子・白色粒子を含む。混入物が多く胎土は粗かった。焼成は普通である。

古墳時代前期に位置づけられる。

第7号土壌 (第38・40図)

F-7グリッドに位置する。

平面形態は不整形である。

断面形態は皿形で、底面には凹凸が認められる。長軸方位はN-77°-Wである。

規模は、長軸1.16m、短軸0.38m、深さ0.26mである。

覆土は、2層に分層できた。1層は粘性の強い暗茶褐色土であり、2層はマンガン粒を多量に含

む暗灰色土であった。

遺物は、壺・無頸壺・鉢が出土した。これらは、遺構確認をした際、既に一部が露出した状態であった。耕作によって遺構の上部が壊されたためと考えられる。

4は、壺上半部の破片である。頸部より上の風化が著しい。端部の外面には、粘土が貼付されており、断面が三角形となる口縁部である。胴部はなで肩で、やや下膨らみである。胴部外面は、上半にヘラ磨きを施す。下半にも同様に磨きが施されていたものと思われるが、風化の為確認できない。内面は、ヘラナデによって平滑に仕上げる。胎土に、長石・砂粒子・白色粒子を含み、焼成は普通である。

5は無頸壺である。口縁部には径3mmの焼成前穿孔孔が一对認められる。2つの孔は、ほぼ直線上に位置する。器面は、内外面ともに風化が著しい。外面には、ヘラ磨きを施す。内面の調整は不明瞭であるが、下底面に指頭痕が確認できる。内面の一部に煤様の付着物が認められる。口縁部にはヨコナデを施す。底部は輪台状を呈するが、丁寧なヘラナデによって滑らかに仕上げられている。胎土に、長石・石英・砂粒子・白色粒子を含み、焼成は、普通である。

6は鉢である。こちらも内外面の風化が著しく、胎土の含有物が露出しざらついている。内外面と底部にはヘラナデを施す。端部にはやや強いヨコナデを施す。胎土に、片岩・長石・砂粒子・白色粒子を含み、焼成は普通である。

4・6は古墳時代前期、5は古墳時代前期～中期に位置づけられる。

第8号土壌 (第38区)

G-7グリッドに位置する。遺物包含層掘削後に検出された。

平面形態は円形である。

断面形態は皿形である。西側の壁の立ち上がり直立気味であるのに対して、東側の壁は立ち上

がりが不明瞭である。底面に傾きは認められなかった。長軸方位はN-90° -Eである。

規模は、長軸0.84m、短軸0.82m、深さ0.14mである。

覆土は、マンガン粒・小砂粒を多量に含む粘性の強い褐色土の単層であった。遺物は、出土しなかった。

第9号土壌 (第39・40区)

F・G-7グリッドに位置する。東側の一部を攪乱によって壊されている。遺物包含層除去後に検出された。

平面形態は円形と考えられる。

断面形態は皿形で、底面に傾きは認められない。長軸方位はN-19° -Eである。

規模は、長軸1.70m、短軸は遺存値で(1.45)m、深さ0.20mである。

覆土は、2層に分層できた。1層は炭化物粒を中量含む粘性の強い褐色土であり、2層はマンガン粒を極めて多量含む粘性の強い褐色土であった。2層は、1層よりやや暗い色であった。

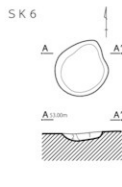
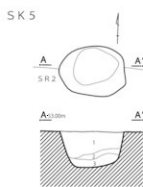
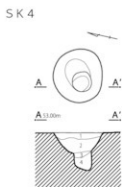
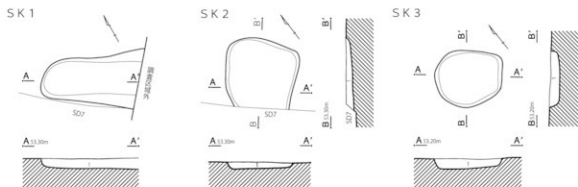
遺物は、土師器の小片微量のほか、高坏脚部や、土製鋼が出土した。

7・8は高坏の脚部である。

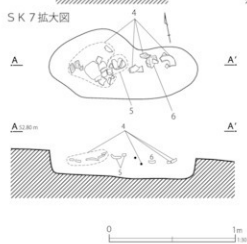
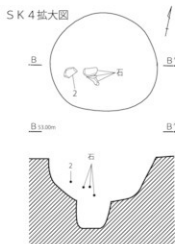
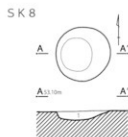
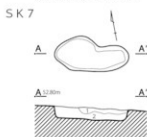
7は、外面が磨滅しているが一部に磨きが認められる。内面にはヘラナデを施す。胎土に、石英・砂粒子・白色粒子を含む。含有物は少なく、精緻である。焼成は、普通である。

8は、外面には赤彩と磨きを、内面にはヘラナデを施す。胎土に片岩・石英・砂粒子を含む。含有物の少ない精緻な胎土である。焼成は、普通である。

9は土製鋼と考えられる。前面にヘラナデを施す。側面には文様状の沈線が認められる。胎土に、角閃石・石英・白色粒子を含む。比較的精緻な胎土である。焼成は、普通である。類別として、行田市鴻池遺跡の出土例が知られている。遺物の時期は、古墳時代前期に位置づけられる。



- SK 4
 1 暗褐色土 砂利極多量・マンガン粒多量
 2 暗灰色土 マンガン粒多量 砂利少量 粘土質
 3 明褐色土 マンガン粒中量 砂質 埋め戻しか
 4 明褐色土 3層よりもやや粗い砂 埋め戻しか



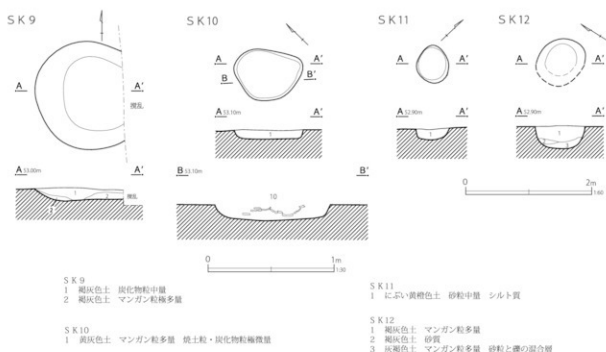
0 2m

- SK 1
 1 暗褐色土 マンガン粒中量
 SK 2
 1 黒褐色土 マンガン粒多量
 SK 3
 1 暗褐色土 マンガン粒多量

- SK 5
 1 灰黄色土 炭化物粒少量 シルト質
 2 黄灰色土 ブロック状に砂・砂利・粘質土を含む シルト質
 3 暗灰色土 1・2層と比較して目の粗い砂
 SK 6
 1 暗灰色土 マンガン粒多量
 2 暗灰色土 マンガン粒中量

- SK 7
 1 暗茶褐色土
 2 暗灰色土 マンガン粒多量
 SK 8
 1 暗灰色土 マンガン粒・小砂利多量

第38図 土壌 (1)



第39図 土壌 (2)

第9表 土壌一覧表 (第38,39図)

単位: m

遺構名	グリッド	重複	長軸方位	長軸	短軸	深さ	断面形	平面形	遺物	時期・備考
1号土壌	H-9	-	N-60°-W (1.52)	0.70	0.18		圓形	楕円形		
2号土壌	H-9	SD7より古	N-40°-E (1.10)	1.05	0.32		圓形	隅丸方形	第40図 1	古墳
3号土壌	H-9	-	N-50°-W 1.08	0.90	0.14		圓形	円形		古墳
4号土壌	E-6	-	N-79°-E 0.84	0.78	0.58		U字形	円形	第40図 2	奈良・平安
5号土壌	D5	SR2より新	N-90°-E 1.03	0.76	0.56		箱形	楕円形		奈良・平安
6号土壌	F7, G7	-	N-25°-E 0.94	0.83	0.12		圓形	円形	第40図 3	古墳
7号土壌	F7	-	N-77°-W 1.16	0.38	0.26		圓形	不整形	第40図 4~6	古墳
8号土壌	G7	-	N-90°-E 0.84	0.82	0.14		圓形	円形		
9号土壌	F7, G7	-	N-19°-E 1.70	(1.45)	0.20		圓形	円形	第40図 7~9	古墳前~中期
10号土壌	H-9	-	N-61°-W 1.03	0.66	0.14		圓形	不整形	第40図 10	古墳後期
11号土壌	E-6	-	N-45°-W 0.60	0.50	0.20		U字形	円形	第40図 11	弥生か
12号土壌	E-6	-	N-33°-W 0.76	(0.38)	0.36		U字形	円形	第40図 12	古墳

第10号土壌 (第39・40図)

H-9グリッドに位置する。遺物包含層を掘り込んでいる。

平面形態は不整形である。

断面形態は皿形で、底面には傾きは認められない。長軸方位はN-61°-Wである。

規模は、長軸1.03m、短軸0.66m、深さ0.14mである。

覆土は、マンガン粒を多量、焼土粒・炭化物粒を極めて微量含む、粘性の強い黄灰色土であった。

遺物は、ほぼ丸形の壺が、押し潰された状態で出土した。土壌内に正位で納められていたものと考えられる。遺構確認の際、確認面において既に口縁部が一部露出していた。おそらく、遺構の上部は耕作によって破壊されており、掘り込みは検出されたよりも深いものであった可能性が高い。

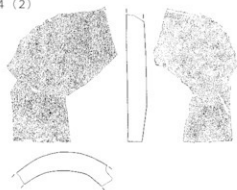
SK 2 (1)



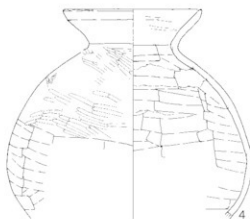
SK 6 (3)



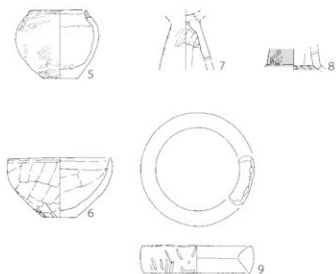
SK 4 (2)



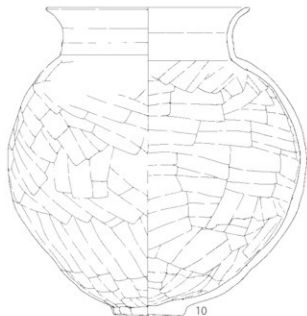
SK 7 (4~6)



SK 9 (7~9)



SK 10 (10)



SK 11 (11)



SK 12 (12)



第40図 土城出土遺物

第10表 土壌出土遺物観察表 (第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	—	[1.9]	(7.4)	A B C E H	30	良好	橙	SK2	22-1
2	瓦	丸瓦	長さ13.45cm 幅10.20cm 重さ365.4g 厚さ1.5~2.0cm			G I	70	良好	灰	SK4 試験	21-2
3	土師器	埴	—	[2.0]	2.8	B C D E H I	25	普通	橙	SK6	22-2
4	土師器	壺	14.6	[22.3]	—	D G I	5	普通	にぶい赤褐	SK7 №1-3-4-6-7	19-1
5	土師器	無頸壺	6.0	7.1	3.5	D E G I	70	普通	明赤褐	SK7 №5 口縁部有孔	18-4
6	土師器	鉢	10.85	6.2	3.4	B D E G	60	普通	明赤褐	SK7 №1-2	18-5
7	土師器	高坏	—	[5.0]	—	E G I	10	普通	橙	SK9	23-2
8	土師器	高坏	—	[2.4]	—	B E G H	5	普通	橙	SK9 赤彩	23-2
9	土製品	土製罎	(8.5)	高さ2.2cm 厚さ1.2cm		C E I	10	普通	にぶい黄橙	SK9	27-3
10	土師器	壺	(21.4)	32.1	7.1	G H	75	普通	にぶい橙	SK10	19-2
11	弥生土器	壺	(7.8)	[4.5]	—	C E H	25	不良	浅黄橙	SK11	22-3
12	土師器	甕	—	[1.8]	(8.6)	C E H	10	普通	浅黄橙	SK12	22-4

10は壺である。口縁部の一部を欠損する。頸部の縮まりは緩く底部はやや厚手である。口縁部の内外面はヨコナデを施す。胴部の内外面はヘラナデを施す。胎土に砂粒子・赤色粒子を含み、焼成は普通である。

遺物の時期は、古墳時代後期に位置づけられる。

第11号土壌 (第39・40図)

E-6グリッドに位置する。第2号方形周溝墓の方台部に位置する。

平面形態は、やや不整な円形である。

断面形態は、U字形で底面に傾きは認められない。長軸方位はN-45° -Wである。

規模は、長軸0.60m、短軸0.50m、深さ0.20mである。

覆土はごく細かい砂粒を中量含むにぶい黄橙色土の単層であった。

遺物は、弥生土器の細頸壺の口縁部から頸部にかけてが出土した。全体の形状を把握できないが、口縁部は比厚し、小波状となるようである。頸部は垂直で肩部で膨らみ形状を成すものと推定される。

頸部には、径2mm程度の細い棒状工具によるヘラ描波状文が3条施文されている。波状文は粗雑で振幅は緩やかである。

胎土に角閃石を多く含む特徴があり、焼成は不

良である。

土壌内出土ではあるが、やや磨滅が認められ、帰属する遺物と判断するには疑問が残る。

遺物の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

第12号土壌 (第39・40図)

E-6グリッドに位置する。第2号方形周溝墓の方台部に位置し、西半分をトレンチによって壊されている。第2号方形周溝墓との先後関係は不明である。

平面形態は、円形と考えられる。

断面形態はU字形で、底面に傾きは認められない。長軸方位はN-33° -Wである。

規模は、長軸0.76m、短軸は遺存値で(0.38)m、深さ0.36mである。

覆土は3層に分層でき自然堆積と考えられる。1層はマンガン粒を多量に含む粘性の強い褐灰色土、2層は褐灰色の砂層、3層は灰褐色土で、マンガン粒を多量に含む、砂と礫の混合層であった。

遺物は、小型壺と考えられる破片が微量と、甕が出土した。小型壺は、同一個体の可能性が高い。

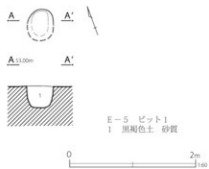
12は甕の底部と考えられる。内面、底面にはヘラナデを施す。外面には棒状工具による成形痕が認められる。胎土に、角閃石・石英・赤色粒子を含み、焼成は、普通である。

時期は、古墳時代前期に位置づけられる。

4. ピット

ピットは1基検出された(第41図)。E-5グリッドに位置する。トレンチによって南西側のおよそ半分が壊されている。平面形態は、円形と想定される。規模は、0.42m×(0.24)m、深さは0.34mである。断面形態は、箱形を呈する。覆土は、砂質でしまりの強い黒褐色土の単層であった。遺物は出土しなかった。

E-5 P1



第41図 ピット

5. 遺物包含層

F-5~8・G-6~9・H-7~9・I-8・9グリッドに位置する(第42~45図)。

伊勢塚遺跡の東側には、志戸川が東流しており、第2・3次調査区は、志戸川に向かって標高を減じる台地の縁辺部に位置する。そのため、調査区の標高も東側に向かって緩やかに低くなる。特に、第2号方形周溝墓の東辺を境として、東方向・南東方向に標高が低くなる傾向があり、この部分に黒褐色から暗褐色の粘性の強い土の堆積が認められた。

この土層中には遺物が含まれており、遺物包含層が形成されていた。遺物包含層は、耕作土の直下に位置しており、上層は耕作によって削平されていた。遺物は、遺構確認面において既に一部が露出している状態であった。

他の遺構との関係を整理すると、遺物包含層は、第1・2・7号溝跡・第1・3・10号土壌によって壊されており、第1・2号方形周溝墓を壊している。第2・6・8・9号土壌は、主に遺物包含層除去後に検出されたものであるが、遺物包含層との新旧関係は不明である。

調査では、まず遺物包含層の範囲を確認した後、該当する範囲の10×10mの大グリッドを2×2mの小グリッドによって25分割し、北西隅より東に向かって①から⑮の番号を割り当てた。そして、

小グリッド番号を付して遺物を取り上げながら、遺物包含層の掘り下げを行った。遺物包含層検出面において完全に露出している遺物については、大グリッドの番号を付して取り上げた。

遺物包含層の堆積状況は、調査区の南東側と北東側の壁面、および第10号土壌と第1号方形周溝墓を北西から南東に向かって通るベルトと第2号方形周溝墓の周溝断面によって確認した。包含層は、およそ20~40cm堆積していた。第2号方形周溝墓周辺が最も厚い層を形成する。

遺物包含層は、2層に分層できる。1層は、灰褐色でしまりの強い粘質土である。部分的に焼土粒や炭化物粒を多量に含む。また、砂利や5mm程度の微細な遺物片を含む。2層は暗灰色から黒褐色のしまりの強い粘質土で、1層と同様に砂利や遺物片を含む。耕作による攪乱は、2層までは及んでいない。遺物が出土するのは主に1層からである。

包含層に含まれる遺物の量は総じて少ないが、分布には局所的なまとまりが見られた。(1)F-6グリッド⑭・⑮・⑯~⑳、(2)F-7グリッド㉓・㉔、F-8グリッド⑰・㉑・㉒、G-7グリッド③~⑤・⑨・⑮・⑲・㉑、G-8グリッド①~④・⑥~⑧・⑪~⑬・⑮~⑰・㉑・㉒・㉓、(3)H-9グリッド⑥~⑧・⑪~⑬の3箇所である。

このうち最も遺物が多いのが第7号溝跡と第1号方形周溝墓の狭間の位置にあたる(3)であり、均一的に多量の遺物が出土した。また、含まれる焼土粒・炭化物粒・微細な遺物片も(1)・(2)と比較して多い傾向であった。次いで多いのが、(2)である。ここでは、G-7グリッド③を端とし、南東方向におよそ6m範囲に不規則な遺物の分布が認められた。同グリッド⑤周辺の出土量が多い傾向にある。焼土粒はほとんど含まれていなかった。(1)では平均的に少量の遺物が出土した。焼土粒が多量に含まれていた。

遺物の時期は、縄文・弥生時代・古墳時代前期～後期にわたるが、主体となるのは古墳時代前期のものである。遺物包含層の厚さは薄く、2層にしか分層できないことからわかるとおり、層序と遺物の時期の関連は認められず、同一層から様々な時期の遺物が出土する状況であった。

遺物包含層の形成要因については、出土遺物の時期に層序的なまとまりが認められないこと、出土遺物の多くが風化し、割れ口が摩耗していること、遺物包含層中にごく微細な遺物の破片や、砂利・砂が多く含まれることなどから、河川の氾濫等により周辺の遺跡を侵食しながら流れ込んだ土が、標高の低い部分に堆積したことにより、遺物包含層が形成されたものと推測される。

また、第1号方形周溝墓の盛土やこれに伴う遺物が、氾濫によって壊され、その土が(3)周辺に再堆積したために、(3)には、主に古墳時代前期の遺物が濃密に分布していたものと推察される。

遺物は、第44・45図に示した。1は、E-6グリッドから出土した。壺の口縁部である。大きく外湾し、受け口状となる。口端部に浅い刻み目が施され、口縁部外面は原体L R単節縄文が横位2段に連続施文されている。頸部外面及び、内面は横位のナデが施されている。

胎土に石英・片岩・細砂粒を含み、焼成は良好である。

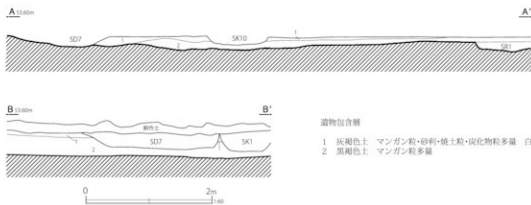
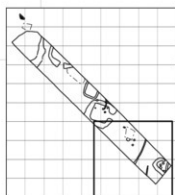
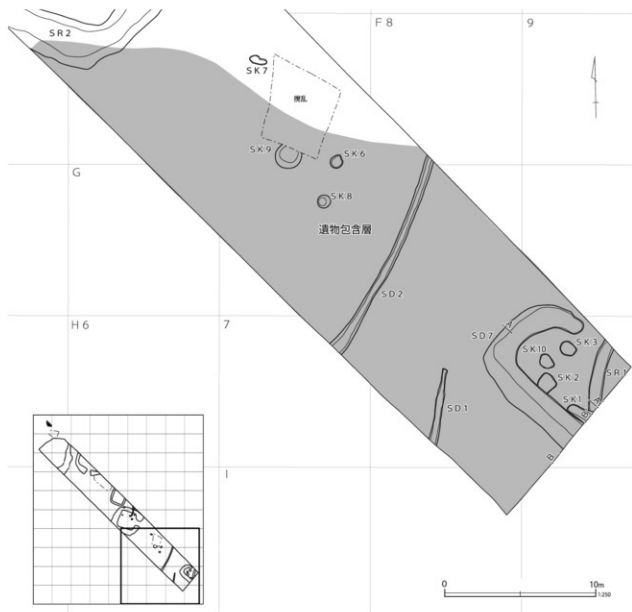
所属時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

2はF-7グリッドから出土した。埴の口縁部と考えられる。風化のため、内外面ともにヘラナデの痕跡がわずかに認められるのみである。

3～7はF-8グリッド②から出土した。3・4は壺の口縁部である。4は端部がややまるまり厚みを持つ。外面にはヘラ磨きを施す。5は壺の底部である。風化がかなり著しい。外面に横方向のヘラナデを施す。6・7はS字状口縁部付甕である。外面には刷毛目を施す。6は口縁部中段の稜にかぶせた粘土が、馴染まずに残っている。3～7は古墳時代前期に位置づけられる。

8～12はF-7グリッドから出土した。8・9は壺の口縁部である。それぞれ⑨・⑤から出土した。8は風化が激しく、端部にヨコナデの痕跡が認められるのみである。9は端部がまるまり、やや厚手である。外面には、刷毛目後ヘラナデ、内面には刷毛目が施される。10は⑨から出土した。高環の坏部である。内面の風化が著しい。粒子の大きい含有物はほぼ認められず、精緻な胎土である。11は④から出土した。埴の胴部である。外面にヘラナデ、内面にヘラナデ、および縦方向の強いユビナデが施される。両面ともヘラ磨きがわずかに遺存する。これらは古墳時代前期に位置づけられる。12は⑤から出土した。甕の口縁部である。器形の特徴から、古墳時代後期に位置づけられる。

13～15はG-8グリッドより出土した。13は、高環の坏部である。外面にはヘラ磨き、内面にはヘラナデを施す。外面に赤彩が施されるようにも思われるが、風化のため不明瞭である。14は⑥・⑩より出土した。埴である。口縁部と胴部に接合点はないが、同一個体と考えられる。内外面ともにヘラナデ後ヘラ磨きを施す。含有物の少ない精緻な胎土である。13・14は古墳時代前期に位置づけられる。15は坏身模倣坏である。含有物の少ない胎土である。下半部にヘラナデを施す。古墳時代後期に位置づけられる。



第42図 遺物包含層 (1)

16・17は、H-7グリッドより出土した。16は土鍾である。H-9グリッドより出土した、40・41と比較して、小ぶりの印象をうける。17は鎌である。遺物包含層検出面において、遺構確認作業中に出土した。第2号土壌の平面プラン内に位置していたが、遺構への帰属関係が明確でなかったため、本項で取り扱うこととした。

刃の先端を欠損する曲刃鎌である。柄との接続部は内側に折り返されている。刃部は、使用による摩耗のためか、少し減っている。

18~42は、H-9グリッドより出土した遺物である。

18~20・22・23は壺の口縁部である。18は頸部のしまりがゆるく、内外面ともにヘラナデを施す。19はやや薄手で、内外面にヘラナデを施す。20は内面にヘラナデおよび刷毛目、外面にヘラナデを施す。

22は端部が外反する。口縁部中央にヨコナデを施す。23は、端部が外反する。口縁部下半にはヘラナデを施し、端部に沿って施されたヨコナデで、ヘラナデをナデ消している。24は、折返し口縁である。外面にヘラナデを施す。21は壺の肩部である。頸部のしまりがゆるくで肩である。外面に、ヘラケズリ後ヘラナデ、内面にヘラナデを施す。25は、輪台状を呈する壺の底部である。内面にヘラナデ、外面にヘラケズリおよびヘラナデを施す。

26・27は、S字状口縁付甕の口縁部である。26の方が、口径が大きく端部の外反がやや強い。いずれも、外面に刷毛目、内面にヘラナデを施す。28~33は高坏である。28は坏部である。接合部はホゾ状を呈する。表面の風化が進んでおり、調整は不明瞭である。外面には、わずかにヘラナデが認められる。

29~33は脚部である。29は坏部下半部が遺存し、ヘラナデが施される。内面には絞りが認められる。29・30は内外面ともにヘラナデを施す。内面の絞りが、ナデ消されずに残っている。31は端

部の広がり強く、内面には輪積みの痕跡が3段にわたって認められる。内外面ともにヘラナデを施す。32は風化のため、調整は不明瞭であった。接合部はホゾ状である。脚部内側の脰部分は絞りが認められる。これらは、古墳時代前期に位置づけられる。

34・35は坏身模倣坏である。古墳時代後期に位置づけられる。

36~38は単孔の甗である。底部の径は小さく、形状は鉢形になるものと想定される。底部の穿孔は、36は内側から、37・38は上下から施されている。底面はほぼ無調整である。36は、外面にヘラケズリ後ヘラナデを施す。内面にはヘラナデを施す。37は内外面にヘラナデを施す。38は、37とほぼ同様の調整が認められる。36~38は古墳時代前期後半から古墳時代中期前半に位置づけられる。

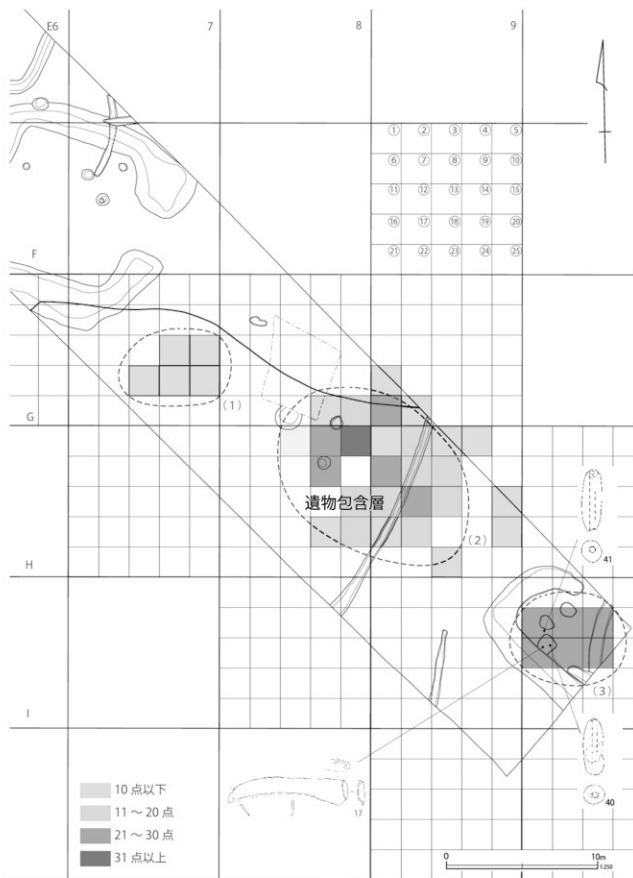
39は、縄文土器の小片で、器種は不明である。外面に隆帯が貼り付けられている。

時期は、縄文時代中期に位置づけられるものと考えられる。

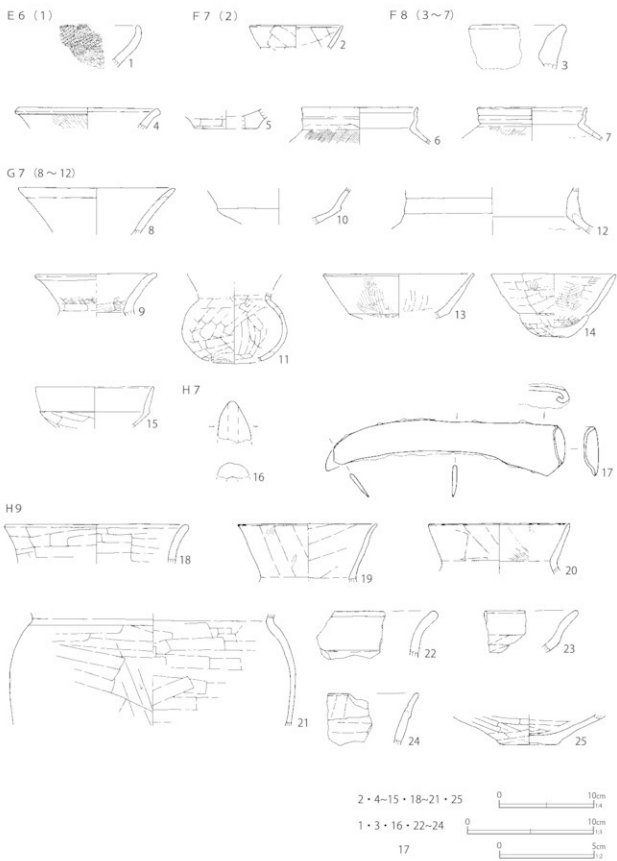
40・41は土鍾である。遺物包含層検出面において、遺構確認中に出土した。いずれも規模は大きい。全体にナデを施す。40の小口は無調整である。41の小口の方は、平坦である。

42は性格不明の土製品であり、指頭痕が全体に認められる。支脚の可能性がある。

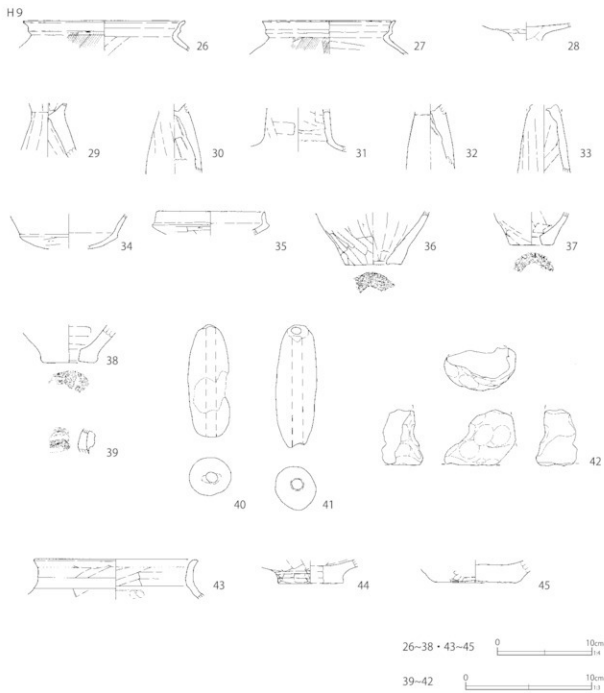
43~45は遺物包含層一括遺物である。43は壺の口縁部である。端部が外反する。外面は、ヘラナデ後横ナデを施す。内面は、ヘラナデ、および端部にヨコナデを施す。口縁部と胴部との接合部分には指頭痕が残る。44・45は壺の底部である。輪台状を呈する。44は含有物の少ない精緻な胎土である。内外面、底面にヘラナデを施す。45は、外面に棒状工具による整形痕が認められる。内面はヘラナデにより丁寧に仕上げるが、底面には強いナデの痕跡が残る、粗雑な印象をうける。古墳時代前期に位置づけられる。



第43図 遺物包含層 (2)



第44图 遺物包含層出土遺物(1)



第45图 遺物包含層出土遺物（2）

第11表 遺物包含層出土遺物観察表 (第44・45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生土器	壺	—	[3.3]	—	A D E G	5	普通	にぶい黄橙	E-6 黒斑あり	22-5
2	土師器	埴	(10.0)	[2.5]	—	A B C D E H	5	普通	橙	F-7②	22-6
3	土師器	壺	—	[3.5]	—	A C E G	—	普通	にぶい褐	F-8②	
4	土師器	壺	(14.5)	[2.2]	—	E G	5	普通	にぶい赤褐	F-8②	23-1
5	土師器	壺	—	[2.0]	(6.6)	H I K	5	普通	明赤褐	F-8②	23-1
6	土師器	台付甕	(12.0)	[4.1]	—	A E H	5	普通	にぶい黄橙	F-8② S字状口縁	23-1
7	土師器	台付甕	(11.6)	[3.3]	—	A D E H	5	普通	にぶい黄褐	F-8② S字状口縁	23-1
8	土師器	壺	(16.6)	[4.7]	—	C E G	5	普通	明赤褐	G-7⑦	23-3
9	土師器	壺	(12.5)	[4.3]	—	E G I	5	普通	にぶい赤褐	G-7③	23-3
10	土師器	高坏	(15.0)	[5.2]	—	E G H	5	普通	橙	G-7⑦	23-3
11	土師器	埴	—	[7.3]	—	A G I	20	普通	明赤褐	G-7④	18-6
12	土師器	壺	—	[4.2]	—	C E G I	5	普通	明赤褐	G-7③	23-3
13	土師器	高坏	(15.8)	[4.5]	—	C D E H	5	普通	褐	G-8⑥ 外面赤彩	24-2
14	土師器	埴	(10.4)	[6.6]	3.0	E G I	50	普通	暗褐	G-8③・⑥	24-1
15	土師器	坏	(12.4)	[4.3]	—	A E	15	普通	橙	G-8⑦	24-2
16	土製品	土錘	長さ3.3cm 幅2.5cm		—	E G	5	普通	橙	H-7	24-2
17	鉄製品	鎌	長さ12.25cm 最大幅2.1cm 背幅0.2cm 重さ30.2g		—	—	90	—	—	H-7 SR1 包含層 No1	28-4
18	土師器	壺	(19.0)	[4.2]	—	H I K	15	普通	にぶい黄橙	包含層	24-3
19	土師器	壺	(14.7)	[6.2]	—	H I K	20	普通	明赤褐	包含層	24-3
20	土師器	壺	(14.8)	[5.4]	—	H I K	20	普通	明赤褐	包含層	24-3
21	土師器	壺	—	[11.9]	—	C E H I	15	普通	浅黄	包含層	24-3
22	土師器	壺	—	[3.7]	—	E H I K	5	普通	橙	包含層	24-3
23	土師器	壺	—	[3.3]	—	E H I K	5	普通	橙	包含層	24-3
24	土師器	壺	—	[4.1]	—	B C E H I	5	普通	橙	包含層	24-3
25	土師器	壺	—	[3.2]	6.3	H I K	75	普通	にぶい黄橙	包含層	24-3
26	土師器	台付甕	(17.0)	[3.2]	—	B H I	10	普通	橙	包含層 S字状口縁	25-1
27	土師器	台付甕	(14.0)	[3.6]	—	H I K	15	普通	にぶい黄橙	包含層 S字状口縁	25-1
28	土師器	高坏	—	[2.0]	—	C H I	80	普通	にぶい黄橙	SR1 No3	25-1
29	土師器	高坏	—	[5.7]	—	A C H I	65	普通	明赤褐	包含層 外面煤付着	25-1
30	土師器	高坏	—	[7.4]	—	C H I K	85	普通	浅黄橙	包含層	25-1
31	土師器	高坏	—	[4.1]	—	H I K	20	普通	橙	包含層	25-1
32	土師器	高坏	—	[6.9]	—	E H I	40	普通	にぶい黄橙	包含層	25-1
33	土師器	高坏	—	[7.3]	—	C H I	40	普通	にぶい黄褐	包含層	25-1
34	土師器	坏	—	[3.5]	—	C E H I	15	普通	にぶい黄橙	包含層	25-2
35	土師器	坏	(11.2)	[2.1]	—	B C H I	10	普通	明赤褐	SD7 No5	25-2
36	土師器	瓶	—	[5.5]	(6.0)	H I K	25	普通	にぶい黄橙	包含層	25-2
37	土師器	瓶	—	[3.5]	(4.3)	C E H I	30	普通	灰黄褐	包含層	25-2
38	土師器	瓶	—	[4.0]	(5.4)	H I	25	普通	にぶい黄橙	包含層 外面煤付着	25-2
39	縄文土器	不明	—	[2.0]	—	C E G	5	普通	橙	H-9	
40	土製品	土錘	長さ8.9cm 最大径3.3cm 重さ76.3g 孔径0.9cm		—	—	80	—	にぶい黄橙	SR1 No10	27-1
41	土製品	土錘	長さ9.7cm 最大径3.2cm 重さ95.4g 孔径0.9cm		—	—	100	—	にぶい黄橙	SR1 No9	27-1
42	土製品	支脚	高さ4.4cm最大径5.6cm 重さ54.8g		—	C H I	—	—	明黄褐色	包含層	27-1
43	土師器	壺	(17.4)	[4.2]	—	D E H	5	普通	にぶい褐色	遺物包含層	26-1
44	土師器	壺	—	[2.5]	(6.8)	G H	5	不良	橙	遺物包含層	26-1
45	土師器	壺	—	[2.4]	(8.4)	C D E H	5	良好	にぶい褐色	遺物包含層	26-1

6. グリッド出土遺物

遺物は、第46図に示した。

1は甕の頸部から胴部上半にかけてである。前体の形状を把握できないが、口縁部は外反し、頸部で窄まって胴部で緩やかに膨らむ形状を成すものと推定される。

頸部には4本1単位の櫛歯状工具による右回りの櫛歯状文が1条施文されている。施文工具の幅は7mmで、5mm間隔で止め周回させている。

櫛歯状文以下の胴部上半には同一工具による連続山形文が1条周回している。山形文は左が緩やかに上がり、右が急に落ちる形状となっている。山形文の下には、0段多条無節Lの縄文が横位施文されている。

胎土に長石・白色粒子を多く含み、焼成は良好である。時期は弥生時代中期末葉と考えられる。

2は甕胴部である。全体の形状は把握できないが、口縁部が緩やかに外反し、頸部で窄まり、胴部が、球胴状に張り出す形状を成すものと考えられる。胴部は0段多条無節Lの縄文を横位施文している。

胎土に白色粒子を多く含み、焼成は良好である。時期は、1と同一個体の可能性があり弥生時代中期末葉と考えられる。

3は東海系の装飾高坏脚部である。脚部底面に近く、末広りの部分に2条のヘラ描連続鋸歯文と4本1単位の櫛歯直線文が2段配置されている。

胎土に軟質の白色物質と石英を含み、焼成は良好である。所属時期は欠山式併行期と考えられる。

4は、土師器壺の口縁部である。下端は、胴部との接続部分で破損している。外面には刷毛目を施したものであると思われるが風化のため判然としない。胎土に角閃石と砂粒子を含み、焼成は不良である。時期は、古墳時代前期と考えられる。

5は、土師器の壺の底部である。外面の底面近くに、ヘラ状工具による整形痕が遺存する。外面には、ヨコナデを施す。内面には、ヘラケズリを

施している。底面には木炭痕が認められる。胎土に角閃石・石英・砂粒子を含み、焼成は良好である。時期は、古墳時代前期と考えられる。

6は、土師器の高坏である。坏部との接続部は、ホゾ接合と考えられる。坏部の内面底部が遺存しており、ヘラナデが認められる。脚部は、外面にヘラナデを施すものと思われるが、風化のため不明瞭である。内面は絞り目状に皺になっており、この上に、ユビナデを施す。胎土に砂粒子を含み、焼成は不良である。

時期は、古墳時代前期～中期と考えられる。

7は、土師器の高台付坏で、底部の破片である。高台部はハの字状に開く形態を成す。底面の回転糸切痕をヘラナデによって消した後に、高台部を貼付している。

胎土に雲母・赤色粒子を含み、焼成はやや不良である。形態的特徴から、10世紀頃のものと考えられる。

8は、須恵器の甕の破片と考えられる。第3号方形周溝墓の周溝底面近くから出土し、混入したものと考へた。

部位は、底部に近い位置と想定される。内外面が激しく風化する。胎土に石英・白色粒子・黒色粒子を含み、焼成は良好である。寄居町の未野窯産の可能性が有る。

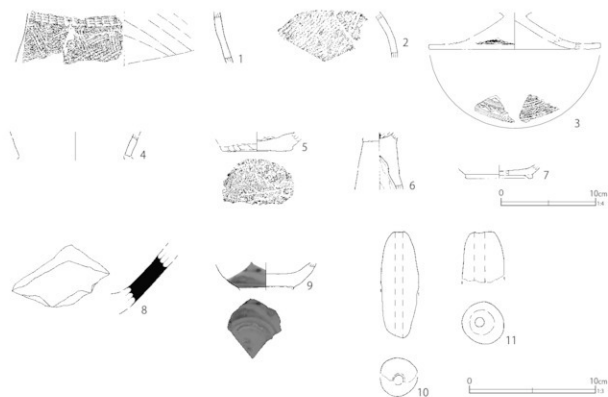
時期は、古代に位置づけられる。

9は、肥前系の磁器碗である。胴部上半と高台端部を欠損する。外面と、底裏に染付する。底裏には銘が認められるが、崩されていて判別できない。時期は、18世紀に位置づけられる。

10・11は土鍾である。いずれも全体にナデを施す。11の小口は平坦に整えられている。

10は、胎土に片岩・石英・砂粒子・赤色粒子を含み焼成は良好である。

11は、胎土に石英・砂粒子を含み、焼成は良好である。時期は、いずれも不明である。



第46図 グリッド出土遺物

第12表 グリッド出土遺物観察表 (第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生土器	甕	—	[4.3]	—	CH I	15	普通	橙	SR2 周溝d 外面保着付	26-2
2	弥生土器	甕	—	[3.7]	—	A	5	普通	橙	SR2d	26-2
3	土師器	高杯	—	[3.4]	—	C E H I	5	普通	にぶい黄橙	SD7 パレス文様	26-2
4	土師器	壺	—	[2.0]	—	B G	5	不良	橙	2次 表土掘削	26-3
5	土師器	壺	—	[2.0]	7.3	C E G	5	普通	にぶい黄橙	2次 表土掘削 木葉痕	26-3
6	土師器	高杯	—	[6.2]	—	GH	10	不良	浅黄橙	2次 表土掘削	26-3
7	土師器	高台付杯	—	[1.4]	(6.8)	A H I	5	不良	にぶい橙	2次 表土掘削	26-3
8	須恵器	甕	—	[4.6]	—	E I	5	普通	褐灰	SR3 No1	26-4
9	磁器	碗	—	[2.0]	—	K	20	良好	—	2次 表土掘削 肥前系 18C	
10	土製品	土鍾	長さ:8.4cm 幅:2.9cm 重さ:44.8g 孔径:0.7cm			B E G H	60	普通	にぶい黄橙	試堀	27-2
11	土製品	土鍾	長さ:4.0cm 幅:3.3cm 重さ:42.9g 孔径:0.8cm			E H	40	普通	にぶい黄橙	表土掘削	27-2

V 調査のまとめ

伊勢塚遺跡第2・3次調査では、方形周溝墓5基・土城12基・溝跡7条・遺物包含層1箇所が検出された。

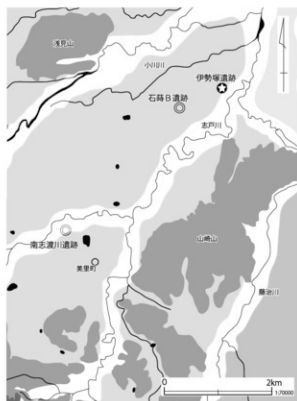
遺構の分布状況は、調査区のほぼ中央にあたる6グリッドラインを境界として、西側には、第2～5号方形周溝墓が位置し、方形周溝墓群を形成する。これに対して、東側の6～8グリッドライン周辺は、標高が西側よりもやや低くなっており、遺物包含層が形成されている。

土城や溝跡も、主に東側に所在している。また、調査区の東端には第1号方形周溝墓が位置しており、調査区の東側には新たな方形周溝墓群が広がる可能性がある。

遺構の時期を整理すると、方形周溝墓は古墳時代前期に位置づけられる。土城は、主に方形周溝墓と並行すると考えられるが、第10号土城は古墳時代後期、第4・5号土城は古代のものである。溝跡の多くは近世に位置づけられるが、第7号溝跡は出土遺物から古墳時代後期以降と考えられる。

遺物包含層からは、主に古墳時代前期の遺物が出土しているが、一部古墳時代後期の遺物も含まれている。一方で、これより新しい時期の遺物はまったく確認されておらず、このことから遺物包含層の形成時期については、古墳時代後期頃と想定される。

以上のことから、調査区の土地利用の変遷を考えると、まず、古墳時代以前では、遺物包含層などからごくわずかに遺物は出土しているものの、遺構は確認されておらず、積極的な土地利用はなされていなかったようである。続く古墳時代前期になると方形周溝墓が造営され、墓域として利用される。古墳時代後期頃までは、少ないながら土城などが散在する状況であった。この頃、河川の氾濫によって周辺の遺跡を壊しながら流入した土



第47図 南志渡川・石碓B遺跡位置図

砂が堆積し、遺物包含層が形成されたものと考えられる。

第4号土城は、覆土中より古代の瓦が出土していることから、当該時期の遺構である。周辺に瓦葺の建物が存在していた可能性もあるが、調査区内では、古代の遺構は土城が2基検出されるにとどまっている。

この第4号土城は、第2号方形周溝墓方部に位置しており、少なくとも土城が掘削される頃には、方形周溝墓の盛土は崩落し、周溝も大部分が埋没していたものと推察される。

古代以降については、耕作による擾乱が深く明確でないが、溝跡などがわずかに検出されていることから、何らかの利用はなされていたものと考えられる。

方形周溝墓の出土土器の様相と築造時期

第48・49図に示したとおり、検出された方形周溝墓の土器は全体的に少量であり、完形のものも少なかったが、第2号方形周溝墓では、複数の土器が出土している。

第2号方形周溝墓から出土した土器の多くは、壺・甕類であり、次いで多いのは大型鉢である。出土した限りでは、底部穿孔の壺は確認されなかった。S字状口縁台付甕は、破片を含め2点、高坏2点、小型壺・甕・鉢は1点ずつ出土している。器台は出土しなかった。高坏が少ないこと、器台が出土しなかったことが、特徴のひとつである。さらに、大型鉢25・26は、下半を欠損するため断定はできないが、外面に刷毛目を施す北陸系甕の可能性があり、注目すべき遺物である。

土器は主に陸橋部に面した周溝内から出土している。陸橋部の南側では、周溝底面近くから完形に近い状態で壺2点と鉢1点が出土している。これに対して、北側では、周溝に流れ込んだ盛土の再堆積層中かその上層から、土器片が多量に出土している。器種は、壺・甕・大型鉢・小型壺など多様である。このような出土状況の差は、方形周溝墓に土器を供する行為の時期差を示しているものと考えられる。すなわち、陸橋部南側周溝内の土器は、周溝内に土が堆積していない初期の頃のもの、陸橋部北側周溝内の土器は、盛土の崩落と同時期か、崩落后に供されたものの可能性がある。

さらに、周溝内より出土した土器の多くは、方台部より転落したと想定されるが、14のS字状口縁台付甕については、周溝底面に直立した状態で出土しており、周溝内に据え置かれた可能性も留意しておきたい。

方形周溝墓の先後関係については、遺物の出土量が少ないため、土器から検討することは困難である。遺物が豊富な第2号方形周溝墓については、築造時期について、土器から検討したい。

器形がおおむね確認できる土器について個別に

特徴を整理すると、壺では、1は、頸部の縮まりがやや緩く、口縁部が短く斜めに開く点、頸部の屈曲部に粘土紐を貼り付ける点が特徴である。3・5・6などは、1の特徴に加えて、胴部が長胴化する傾向が認められる。また、28の小型壺は、胴部が扁平化している。これらの特徴を、東松山市反町遺跡において示された土器変遷（福田2012）と比較してみると、Ⅱ-3期に分類される土器群と近似する。Ⅱ-3期は、五領式期の末葉に位置し、廻間Ⅲ式期に並行するものである。このことから、第2号方形周溝墓は、五領式期末葉（古墳時代前期末）に築造されたと考えられ、隣接する第1・3～5号方形周溝墓についても、これと前後する時期に築造されたことが想定される。

方形周溝墓の平面形態

調査において検出された方形周溝墓は、第2号方形周溝墓を除いて、大部分が調査区域外に位置している。そこで、検出された部分から平面形態の復元を試み、復元図を第48・49図に示した。すべての方形周溝墓を復元した上で、各部の数値を第13表に示した。（ ）は、復元図からの推定値である。規模のaは、陸橋部を通る中軸線で周溝を含む最長距離の値であり、bは、aに直交する最長距離の値である。それぞれの復元方法と平面形態について確認しておきたい。

まず、第1号方形周溝墓である。周溝の幅や深さが第3号方形周溝墓とほぼ一致していたことから、同規模であると想定した。北側の調査区域でわずかに屈曲がみられ、ここをコーナーと仮定して南北方向に長軸をもつ長方形に復元した。とはいえ、検出された部分は極めて少なく、復元は想定によるところが大きい。

第2号方形周溝墓は、ほぼ全体が検出されていたため、調査区域に位置する端部を推定線で結び、復元した。平面形態はほぼ正方形であり、南東側に陸橋部を有する。北西コーナー周辺で周溝の幅が狭まる傾向にある。

第3号方形周溝墓は、北西の調査区境がコーナーと考えられ、ここに南西コーナーの形態を反転して重ね復元した。平面形態は、周溝幅に乱れない長方形になると考えられる。

第4号方形周溝墓は、南西側に陸橋部を有する。同様に陸橋部を有する第2号方形周溝墓のa値:b値の比を、第4号方形周溝墓に当てはめることで復元した。方台部は、主軸方位が短い長方形である。本方形周溝墓の平面形態は、陸橋部が「フ」の字に開く点が特徴であり、赤塚次郎の分類(赤塚1992)によれば、B2型に類するものと思われる。前方部は明瞭ではないが、前方後方形を意識した形態であろう。周溝は、南西コーナーより北側で幅が狭くなる。

第5号方形周溝墓は、南西側の調査区境にコーナーが位置する。調査区北西端及びトレンチでは周溝が検出されなかったことから、周溝は調査区北西端の外側を巡ると考えられる。方台部は少なくとも25.0mとなり、かなり大規模といえる。覆土中には榛名二ツ岳テフラとみられる火山灰の堆積が認められ、周溝の埋没時期は他の方形周溝墓と隔たりがあると考えられる。また、検出された部分には、周溝が外側に突出した付帯施設が確認された。これは、東京都北区豊島馬場遺跡(島村・長瀬1999)第28号墓や、東松山市下道添遺跡(坂野1987)第13号方形周溝墓などに類例が認められる。付帯施設をもつ方形周溝墓について、柿沼幹夫は、松河戸I式期に比定される坂戸市稲荷前B区(富田1994)の事例を最も新しいものとして指摘している。(柿沼2014)

周辺の方形周溝墓群との比較

本遺跡の時期と方形周溝墓の平面形態について確認したところで、築造の先後関係について考えていきたい。しかし、調査区の制限もあり情報は限られている。そこで、本遺跡と同じく志戸川流域に立地する南志渡川遺跡と石蒔B遺跡について確認し比較検討したい。

南志渡川遺跡からは10基の方形周溝墓が確認された。このうち、第1・2・4号方形周溝墓は、ほぼ全体が検出されている。第4号方形周溝墓は前方後方形を呈し、赤塚分類に照らすとB3型と考えられる。

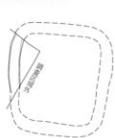
第4・5号方形周溝墓の周溝内からは、パレススタイルの壺が出土しており、第1～3号方形周溝墓からは二重口縁壺が出土している。長滝歳康・中沢良一によると、これらの壺の時期は、廻間Ⅱ式期の第3段階前後から廻間Ⅲ式期の第4段階頃までのものであり、土器の変遷から、方形周溝墓の時期を古い順から第4号墓→第5号墓→第1号墓→第2号墓→第6号墓→第10号墓と位置づけている。

最大規模であり、前方後方形である第4号方形周溝墓を築造の契機として、間隙を埋めるように、後続の方形周溝墓が築造されたものと思われる。

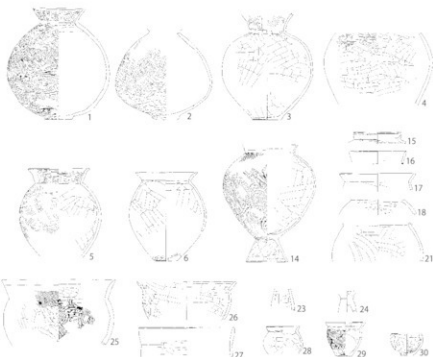
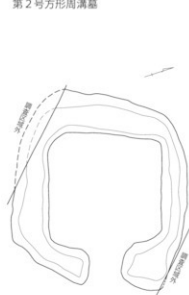
石蒔B遺跡からは、12基の方形周溝墓が検出されている。調査区の西側を南西から北東方向へ走る溝によって、第1～11号方形周溝墓が属する群と、第12号方形周溝墓が属する群とに墓域が区画されている。後者の群は、さらに北西方向に広がるものと考えられている。第8号方形周溝墓は、前方後方形を呈し、赤塚分類に照らすとB3型に属すると考えられる。

周溝墓は密集しており、周溝が重複するものや、周溝を共有するものが多数認められる。隣接する石蒔A遺跡の集落跡は、石蒔B遺跡の方形周溝墓群に並行するものである。出土した土器のうち、もっとも数量が多いのは埴形土器である。佐藤忠雄はこれらの時期を、廻間Ⅱ式期第4段階から廻間Ⅲ式期の第3～4段階頃までとしている。また駒宮史郎は「第8号墓→第9号墓→第10号墓→第11号墓」「第3号墓→第2号墓」「第5号墓→第6号墓」という3グループ内の先後関係を切り合い関係から位置づけている。さらに前方後方形という優位的な墳墓形態をとることから第8号方形周溝墓を最初に出た墓とし、これに次ぐ規模の

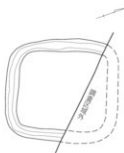
第1号方形周溝墓



第2号方形周溝墓

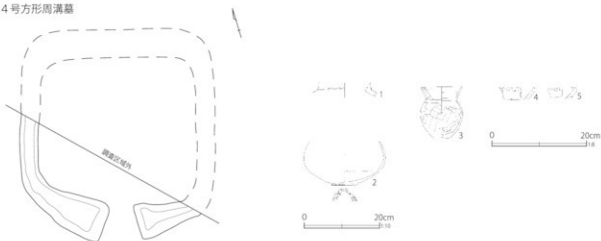


第3号方形周溝墓



第48図 方形周溝墓復元図・出土遺物(1)

第4号方形周溝墓



第5号方形周溝墓



第49図 方形周溝墓復元図・出土遺物(2)

第13表 伊勢塚遺跡方形周溝墓一覧表

単位：m ()は推定値

遺構名	規模		溝幅		溝深さ		主軸	備考
	a	b	最狭	最広	最浅	最深		
1号方形周溝墓	(8.9)	(8.1)	0.9	1.0	0.2	0.2	N-19°-E	
2号方形周溝墓	15.6	13.7	1.8	3.5	0.2	0.5	N-66°-W	
3号方形周溝墓	8.0	(8.9)	0.8	1.0	0.2	0.3	N-64°-E	
4号方形周溝墓	(16.7)	(15.4)	1.6	3.2	0.3	0.4	N-19°-E	前方後方形か？
5号方形周溝墓	(30.0)	(29.0)	1.2	4.5	0.2	0.45	N-20°-E	

第1号方形周溝墓を2番目に築造されたものとしている。(駒宮・佐藤2003)

以上の2遺跡は、伊勢塚遺跡よりやや先行するものの、比較的近い時期に営まれた方形周溝墓群である。築造順序については、両遺跡とも規模が大きく、前方後方形を呈する墳墓を最古とし、次いで規模が大きいものを次点に位置づけている。

ここで、伊勢塚遺跡の様相を再確認すると、検出された5基の方形周溝墓は、第1号方形周溝墓が属する東側の群と、第2～5号方形周溝墓が属する西側の群との2群に大別できる。東側の群については不明な部分が多いため、ここでは主に西側の群について考えることとする。

西側の群のうち、陸橋部を有するのは第2・4号方形周溝墓である。陸橋部の位置は異なっており、同一群内においても、主軸方位を異にする2つのグループを想定できる。主軸方位を北東方向とする第4・5号方形周溝墓が属するグループ①と、主軸方位を北西方向とする第2・3号方形周溝墓が属するグループ②である。

グループ①では、2基が最も接近する第5号方形周溝墓付帯施設周辺において、第4号方形周溝墓の周溝が幅を狭めていることがわかる。これは、すでに築造されていた第5号方形周溝墓を避ける意図があったと思われる。このことから2基の築造順序は、第5号方形周溝墓→第4号方形周溝墓と想定される。

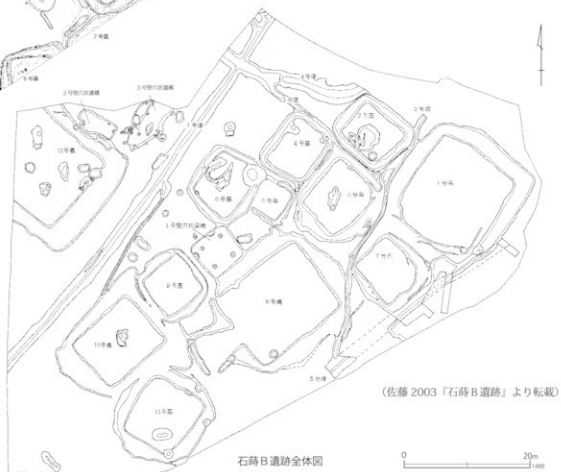
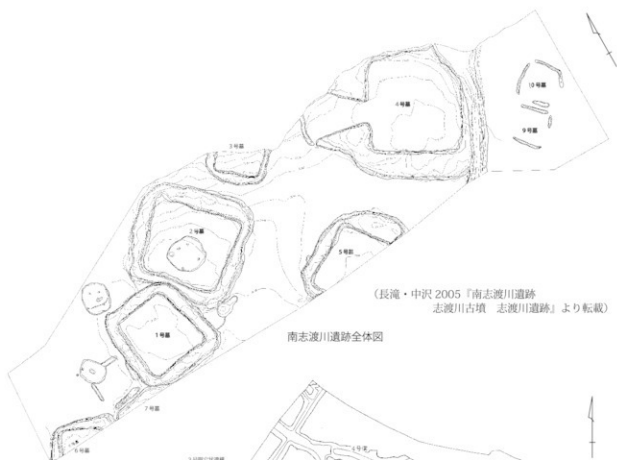
グループ②では、第3号方形周溝墓は、周溝の幅も狭く規模は小さいものの平面形態には乱れがなく、整った長方形を呈する。対して、第2号方形周溝墓では、第3号方形周溝墓と最も接近するコーナー部分において周溝の幅が極端に狭まっている。これはグループ①と同様に、すでに存在していた第3号方形周溝墓を避けたためと考えられる。このことから、2基の築造順序は、第3号方形周溝墓→第2号方形周溝墓と想定される。しかし、グループ①と②については、先後関係を決め

かねる状態である。そこで、前述の2遺跡の事例と比較してみると、第5号方形周溝墓は、方台部が復元値で25.0mと際立って大きく、最古となる可能性が高い。しかし、第4号方形周溝墓は、優位性の高い前方後方形を呈する。前述の位置関係から想定した築造順序とは矛盾するが、第4号方形周溝墓が最古となる可能性は捨てきれない。いずれにおいても、検出された限りでは第4・5号方形周溝墓のどちらかが築造の契機と位置づけられる可能性は高く、グループの先後関係は①→②であると想定される。

ここまで、伊勢塚遺跡における方形周溝墓群において、出土した土器の時期や築造順序について検討してきた。方形周溝墓群の形成時期は、第2号方形周溝墓出土土器より古墳時代前期末葉と考えられる。第2号方形周溝墓25・26は、北陸系甕の可能性があり、地域間交流を考える上で、貴重な資料である。築造順序は、第5号方形周溝墓もしくは第4号方形周溝墓→第3号方形周溝墓→第2号方形周溝墓の2つのパターンを想定した。

第4号方形周溝墓が先行すると仮定した場合、B2型とB3型との違いはあるもの前方後方形周溝墓を契機として方形周溝墓群が営まれる点で、本方形周溝墓群は南志渡川・石葺B遺跡と近いものととらえられる。対して、第5号方形周溝墓が先行すると仮定すると、第5号方形周溝墓が付帯施設を有する点が留意される。柿沼は、このような方形周溝墓を、前方後方墳と方形周溝墓の階層の中で、前方後方形周溝墓よりも下位に位置づけている。(柿沼2014)これに従うと、本方形周溝墓群は南志渡川・石葺B遺跡よりも階層的に下位に位置づけられる。

しかし、調査区は道路幅の制約を受けており、方形周溝墓もごく一部が検出されたに過ぎず、このため、本稿の内容は推測を重ねる結果となってしまった。今後周辺の調査の進展を待って、さらに検討を重ねていきたい。



第50図 南志渡川遺跡・石葺B遺跡全体図

第14表 南志渡川遺跡・石葺B遺跡方形周溝第一覧表

単位: m () は推定値

遺構名	規模(外法)		溝幅(上端幅)		溝深さ		主軸	備考
	短軸	長軸	最狭	最広	最浅	最深		
南志渡川1号墓	14.7	15.0	1.7	2.6	0.45	0.65	N-10°-W	
南志渡川2号墓	18.0	18.5	1.5	3.5	0.45	0.65	N-50°-W	
南志渡川3号墓	—	9.7	0.9	2.0	0.3	0.3	N-50°-W	
南志渡川4号墓	(8.5)	(27.0)	0.7	4.7	0.15	0.5	N-61°-W	前方後方形 短軸には前方部幅を示した
南志渡川5号墓	—	17.1	2.0	4.75	0.6	0.7	N-33°-W	
南志渡川6号墓	—	—	0.9	2.3	—	0.5	N-26°-E	
南志渡川7号墓	—	—	—	—	—	—	—	
南志渡川8号墓	5.5	5.7	0.5	1.0	0.2	0.2	N-2°-W	
南志渡川9号墓	6.2	—	0.3	0.5	0.25	0.25	N-47°-E	
南志渡川11号墓	6.6	—	0.3	0.7	0.3	0.3	N-46°-E	
石葺B1号墓	19.52	20.8	2.4	3.04	0.22	0.42	—	
石葺B2号墓	9.44	11.04	1.12	1.92	—	0.32	—	
石葺B3号墓	11.68	13.2	1.6	2.12	—	0.41	—	
石葺B4号墓	8.64	10.56	0.96	1.28	—	0.52	—	
石葺B5号墓	5.2	5.2	0.6	0.8	—	—	—	
石葺B6号墓	9.44	(11.04)	1.12	1.92	—	—	—	
石葺B7号墓	10.72	(11.04)	0.96	1.8	—	0.32	—	
石葺B8号墓	26.88	19.06	0.72	3.6	0.42	0.58	N-55°-E	前方後方形 短軸には前方部幅を示した
石葺B9号墓	9.44	10.88	0.96	1.84	—	0.5	N-50°-E	
石葺B10号墓	12.96	(15.36)	1.6	3.4	0.38	0.5	N-59°-E	
石葺B11号墓	14.56	15.36	2.4	2.8	0.46	0.6	N-30°-E	
石葺B12号墓	18.88	—	—	—	0.54	0.7	—	

引用・参考文献

- 赤塚次郎 1992 「東海系のトレスー3・4世紀の伊勢湾地域」『古代文化』第44巻第6号 財団法人古代学協会
- 楯沼幹夫 2014 「荒川中下流域における古墳時代前期前半の付帯施設を有する墳墓」『埼玉考古』第49号
埼玉考古学会
- 响宮史郎・佐藤忠雄 2003 「石葺B遺跡」岡部町史資料調査報告書第1集 岡部町教育委員会
- 埼玉県 1986 「新編埼玉県史」別編3自然
- 坂野和信 1987 「下道添遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 塩野博 2004 「埼玉の古墳」大里・児玉 株式会社埼玉出版会
- 鳥村一志・長瀬出 1999 「豊島馬場遺跡」北区埋蔵文化財調査報告書第25集 東京都北区教育委員会
- 長滝誠康・中沢良一 2005 「南志渡川遺跡 志渡川古墳 志渡川遺跡」県営圃場整備事業美里地区関係埋蔵文化財調査報告1 美里町教育委員会
- 深谷市教育委員会 2006 「岡部町史」原始・古代資料編
- 福田聖 2007 「井沼方遺跡における方形周溝墓の上器配置と郡構成」『埼玉の弥生時代』
- 福田聖 2012 「反町遺跡Ⅲ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第393集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 福田聖 2014 「大木戸遺跡の方形周溝墓Ⅱ」『研究紀要』第28号
- 福田聖・金子直行他 2002 「大寄遺跡Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第280集
- 若狭徹・深澤敦仁 2005 「北関東西部における古墳出現期の社会」『シンポジウム新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現(第1分冊)』『シンポジウム新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』実行委員会

写真図版



1 伊勢塚遺跡遠景（南西から）



2 伊勢塚遺跡遠景（北東から）



1 伊勢塚遺跡垂直空中写真(1)



2 伊勢塚遺跡垂直空中写真(2)



1 伊勢塚遺跡全景（北西部）



2 伊勢塚遺跡全景（南東部）



1 第1号方形周溝墓（南西から）



2 第1号方形周溝墓遺物出土状況（1）



1 第1号方形周溝墓遺物出土状況(2)



2 第2号方形周溝墓(南東から)



1 第2号方形周溝墓北東コーナー遺物出土状況



2 第2号方形周溝墓南東コーナー遺物出土状況(1)



1 第2号方形周溝墓南東コーナー一遺物出土状況(2)



2 第2号方形周溝墓南東コーナー一遺物出土状況(3)



1 第2号方形周墓西沟遺物出土狀況(1)



2 第2号方形周墓西沟遺物出土狀況(2)



1 第2号方形周溝墓西溝遺物出土狀況(3)



2 第2号方形周溝墓西溝遺物出土狀況(4)



1 第3号方形周溝墓（南西から）



2 第3号方形周溝墓遺物出土状況（1）



3 第3号方形周溝墓遺物出土状況（2）



1 第4号方形周溝墓（南から）



2 第4号方形周溝墓西溝遺物出土状況



1 第5号方形周溝墓（東から）



2 第1号溝跡



3 第2号溝跡



1 第4·5号沟迹



5 第6号土坑



2 第7号沟迹



6 第8号土坑



3 第4号土坑



7 第9号土坑



4 第5号土坑



8 第11号土坑



1 第7号土坑遺物出土狀況



2 第10号土坑遺物出土狀況



1 第1号方形周溝墓 (第16图1)



4 第2号方形周溝墓 (第23图6)



2 第2号方形周溝墓 (第23图3口緣部)



5 第2号方形周溝墓 (第25图25)



3 第2号方形周溝墓 (第23图3底部)



6 第2号方形周溝墓 (第25图26)



1 第2号方形周溝墓 (第23图1)



3 第2号方形周溝墓 (第23图5)



2 第2号方形周溝墓 (第23图2)



4 第2号方形周溝墓 (第24图14)



1 第2号方形周满墓 (第25图28)



2 第2号方形周满墓 (第25图29)



3 第2号方形周满墓 (第25图30)



4 第3号方形周满墓 (第26图1)



(底面)

5 第4号方形周满墓 (第30图2)



1 第4号方形周溝墓 (第30图3)



4 第7号土壇 (第40图5)



2 第7号溝跡 (第37图7)



5 第7号土壇 (第40图6)



3 第7号溝跡 (第37图10)



6 遺物包含層 (第43图11)



1 第7号土壙 (第40图4)



2 第10号土壙 (第40图10)



3 第2号方形周溝墓 (第24图)



1 第2号方形周溝墓 (第24图)



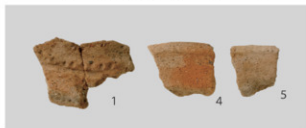
2 第2号方形周溝墓 (第24图19)



3 第2号方形周溝墓 (第24图24)



4 第2号方形周溝墓 (第25图20·27)



5 第4号方形周溝墓 (第30图1·4·5)



6 第5号方形周溝墓 (第31图1)



1 第7号沟迹 (第37图)



(凸面)



(凹面)

2 第4号土城 (第40图2)



1 第2号土壌 (第40図1)



4 第12号土壌 (第40図12)



2 第6号土壌 (第40図3)



5 遺物包含層 (E-6グリッド) (第44図1)



3 第11号土壌 (第40図11)



6 遺物包含層 (F-7グリッド) (第44図2)



1 第9号土坑 (第40図)



2 遺物包含層 (F-8グリッド) (第44図)



3 遺物包含層 (G-7グリッド) (第44図)



1 遺物包含層 (G-8グリッド) (第44図14)



2 遺物包含層 (G-8・H-7グリッド) (第44図)



3 遺物包含層 (H-9グリッド) (第44図)



1 遺物包含層 (H-9グリッド) (第45図)



2 遺物包含層 (H-9グリッド) (第45図)



1 遺物包含層（一括）（第45図）



2 グリッド（第46図）



3 グリッド（第46図）



4 グリッド（第46図8）



1 遺物包含層 (H-9グリッド) (第45図)



2 グリッド (第46図)



3 第9号土壌 (第46図9)



1 第4号土壙



2 第4号土壙



3 第2号方形周溝墓(第25图31)



4 遺物包含層(第44图17)

報 告 書 抄 録

ふりがな		いせづかいせき							
書名		伊勢塚遺跡							
副書名		主要地方道花園本庄線整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ名		埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号		第435集							
編著者名		砂生智江							
編集機関		公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地		〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1 TEL. 0493-39-3955							
発行年月日		西暦2018(平成30)年1月22日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
伊勢塚遺跡	埼玉県深谷市 後榛沢 大字北東 501-3	11218	49	36°12'17"	139°12'26"	20160301～ 20160630	1,620	道路整備	
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
伊勢塚遺跡	集落跡	古墳時代	方形周溝墓	5基	土師器	方形周溝墓5基を検出し、第2号方形周溝墓からは、東海地方の土器の影響を受けて在地で生産された壺・S字状口縁台付甕などが出土した。			
			溝跡	1条	土製品				
		土壌	6基	鉄製品					
		遺物包含層	1箇所	瓦					
	奈良・平安時代	土壌	2基						
	近世	溝跡	6条						
	時期不明	土壌	4基						
要 約									
<p>伊勢塚遺跡は、埼玉県深谷市大字後榛沢字北東地内に所在する。本庄台地の南東部、志戸川の左岸に立地する。本事業に伴う発掘調査によって、古墳時代前期の方形周溝墓が5基発見された。第2号方形周溝墓においては、東海地方の土器の影響を受けたとみられる下彫らみの土器のほか、多量の遺物が出土した。</p> <p>また、調査区の中央より東側の、標高がやや低くなる位置には、河川の氾濫によって形成されたとみられる遺物包含層が検出された。縄文・弥生時代、古墳時代前期～後期の遺物が出土し、また、鉄製鎌が出土した。</p> <p>奈良・平安時代では、第2号方形周溝墓方台部に位置する第4号土壌から、瓦片が出土した。</p>									

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第435集

伊勢塚遺跡

主要地方道花園本庄線整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査

平成30年1月15日 印刷

平成30年1月22日 発行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

0493 (39) 3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／株式会社文化新聞社